

大荒經 十六

四



新編しらべ巻之四

續本草

河合宗臣 輯錄

四
卷

河合

なく有一は安里。薄友と不才と一家空。亡よりる。されど持伴多てゆきる。
企有よし御ひぬきひとて不才の御のびを仄最後のをみく一首の辞世と書れ
嘆くに付。死の處ゆきづくとす。身死を免めり色を上漢う耶

嘗ては多^シ花のあつまつゝに山宿^{タチ}を喰^ステ色^ム山獨^リ那

一嘉吉元年六月嘗て時、軍事教官布川清高が領知となりて赤松貞村は左近
宮御室を守らしめし。酒祐是とすて賤軍使私物を詰候しありて源氏傳子
左近の大内をあわう難と迎へて之を擋てて敵へ小舟御坐すと色して之を
よじまうとて守ひよ御とて宵殿酒母の所とあ言え年

太刀討子多とゆる者荒事三郎正年下者之づく内陣と仰ひ名きば、お北の御船三十萬石。今日雨の序は温苦よ色石一車も程遠づかせ中一早く入らしむ。會入るの處は日既暮垂て色數と可進をしなとほんてあ陣雨中の眠と醒しやうん言ふとも是に因て勝負を及しう。と氣り方々とあるの中よそひ筑紫丸國は褐色行き矣。次に次仁王荒事とて長八尺半四寸八毫よ見ゆる。冒火威達は銀仄の冒と見ゆ。八岐の太蛇アマツナヘがナ東の劍と稱す。上べるかと恭立よし九人余の段牌と枝と拂り上り其正體と名のる。何者なれど一陣と云。惶法介の難言。咄咄辱め。ひよと見ゆ。と走ふ。うち蓋事はねくは長刀とめうと食を。蓋事ま戸が打れましゆと相高弱。しりみ合トバ戸が石と踏みにし。谷は底も蓋事とよ。蓋事安立シ。旅と宿。さへは蓋事より戸が劍と宿而と双方脇廻。事高り。戸が合と頬。零あり。蓋草が達テの龍と云。色バ裏不文。や。日菩提本。非樹明鏡。亦無臺。本末無下物。何所。惹。摩。埃。毛。參。六祖の偈也。軍勢是と見。何者。書。戸ひ。陣屋の幕。落書き。立

西の事はアハシケルの連ナ情筋く見色は六祖アリテ
亦萬師ニ師ガ戸次が劍立而ニゆき色ば城邑トと見テ爲善と立テ
アハシキ多モ二王を道程冲々^{カミツルギ}剣アリ叶なきの劍モ此也
壬辰白旗^{クレマツ}遂^ステ活命^ステ滿祐^スト警^スト一族師長幸三人自害^ス
ニモウモナリ^ス哀^スヒ^ス松縛^スハ上^スハ尾^ス上^スハ武恩^スト^スモ在^ステ^ス死^スル
多通^{トヲ}の行跡^ス天河^スデ^ス旅^ス其眾^スソシ^スや^ス監^ス矯^スガ首^スの惡名^ス今^スの^ス志^ス松^スが^ス赤毛^ス
万人舌^ス卷^ス翻^スト^ス年^ス半^ス不^スし^スと^ス身^スの^ス多^ス數千^スの^ス赤^ス犠^スと^ス討^ス而^スて^ス敗^ス
穢^スキ^スアラク色^スモ^ス毛^ス何^スの^ス後^ス一^スも^スアラ^ス

代の和ハ色ニモ形色亦種と改ムリタキニシム族の跡
島山政長 権本猶子 島山義就 権本寛子
亦能おぬの事半端モ重ねずて全歎ふが爲る
シ今度政長殿ハ自ツト御靈の爲トセナガと放つミ一斤の牌リと權主を降す敷の
本筋シテ政長至怪僅シカク敷のシテは後乃テ道明シ見シば鮮厥手燒シテア
ありウラ松是多々政長うやむん裏シ昨日毛天下の榮養領藏より今日ハ白骨

如く郊原のち、埋めきほひを済むと、よ住訓し方里小路の度詔を控え移
がき細川の湯色の頬とよ眉と流しきる裏事少きよとへ日の暁。此時おじゆる
お湯の外は、細川の湯、とあると、所と名とも流しきる也。
又京廻　　の上意とおもて寝食と一味しりうれづかぬよ殿の政事とおん度
この身ともおもじりしきどひ處の振ふと、萬人の指掌すことを居する京極
門の扇よ竹者よ書けよ。

レツトモ、多忙極みの脚、茶事を御引取せ、羊煙ももの
世後と政長義理を送恨不平して政長、細川勝元とぞらの草履と山名
宗全と船を合歎絶り。薄なく天下たる色うる尾等無仁大亂のそ
しと覺りよう。

一、將軍義政からまほあく、寛政五年、瀬戸義壽、義政の連枝還俗と名と笑視と
改め、仕官叙位有く。是れ今、お川殿正、細川勝元と名く傳、御山名と一昧に名ふ
付、六年義政の夫人、彦昌子後は義昌公と云、山名京全輔仇とする尾等山名
川起争の根元也。

○續六平記

一、嘉仁五年中、細川右京吉、勝元山名持豐入道宗全骨相よみの端中玉を合致有る。時、草
急答申す。第、手事、行はり不極、詮を肺持清御の身方が聲の中より平井十郎
曰、壽と、室美一の奇代のうちと、其の後と場る。是れあり。樂音足らず、度々
星非た神出、一高名と亮をり。日本の躍、嶋名と、も上ち、不然、家風の討死
し。我等跡をも人手被讀とて出る。味、小缺角と頗る事件の是れ我不
知人とう思ふ。而て馳しる。食事、京極と、一毛、落す。其の後、御子を
あると駿馬逐きを、心に付。又、居候ハ古と留へんと、ひく北の河、白川
修学院へと、走り去る。其と、病と泥の駿馬は、策院と合致し
を、一、お見る。が、下の邊を、見の城、多石壁よつて、さる。臂と敵と、互に、と、御望
かけ、いざよき御んとの、伝ふ。而て、御手、底重り、一時、斗、仕の、下る。さん
や、力、起らん。而す、身が頬と、梅印と、直に、の、手。人、平井と、大別の者を捕
へて、と、と、自稱して、引る。侍所、おじい、首の實、檢、入しんと、能く
見えれば、故ま、あくまで、身の立派もあり、お轉我孫と、慕ひ、も、ある。あ

乞ひと詔と口へ討ること不覺なるを下我何トヨシ御もハ往し乞ひ於此の
亦よ文も又何ガ計りの私辱より会へんちつて是とうの種でと懺悔一々禮
脱置子切れ枝まづきを承ひ既に身とがしまる代未曾有と人び第一の

山名室全益セーは候。幕並相手観御都と仰言有てあまのうと
ゆき在處か由河を過候。

流色ゆく身を多河の水の濁の済すと遙すある方を

粟田に閑山の程の心事ゆづの美ッ情より候。

先、もろもろ行き多段の糸水よしこ盛りと新やさむしん
出、紫闇而東望、山岳林粟根之暗、闇、翠草山嶺而西方顧
家郷盡没烟樹之深と見る所の古言、どとすがわく高す頬阿法
師、かの山と候。と宣ふことを叶とばしと景心細くお詠じる

古白毫をめくとゆりとぞくらむかなくねと書は間。

かくも粟源多至り故に上陸を難とぞ逗留し淺多キ外諸里七道の大名各郡

とあらきさるが項の山く押勝たる名の今更、憮々とは吉良ひ三宿佐義幕三条の爲とある。

流色との名ごとにとすをも可い水の情よ身を潤ひと

斯波治船を拂矣、簾に石都よる人なきよと承き額のミセラキミ

もがきつて計りとほすと蒙もて致る多段の糸

仁木駿助義冬と一念命、命尚直とも多段の糸と相附し弊のやまと

ふ淡一のをか時もと道の役免なしと大津打上の邊まづきまくわづる
がこ色う南北引剥きと義冬

名よりがき流路と宣ふ間ツアヤ仰み大津の浦と傳ひ

高直奉し

もとがき海をだすと多段のせきよすと下の情と

多段とあらき多段の名なまじ行せりと多段とすくの名なまじ

主色バ細川の勢始六百山石が庭黨十至東西は別色日は金錢勝敗も一色年一
文明五年三月ニ全軍去ぢらきし日も細川も大に力薄在も敵びる勝を
内ニ主の者内サ草木やら色もそれも西黨ハ將軍軍は對陣しておらざりしる
文明九年ニ至テ御は天下左半の代とす

後軍政の後應仁元七月う昇者登記と文明九年末十一月のう天下大
の後太平記

後荒園山幽門の時萬國云「君の事と極ば」天子賴也ひる

後太平記 あびやうを書ひ「天子歎きとぞ天子下もし濕る被う耶

山石入道事全或大臣事なまつてあ代和尊まで備人をよろ一也林振へお
詔りてゆくわ良亭の大臣を例とひうらもかくがこくすきるよ
富全猶く帝め者有色ば膳しする毛色となくやゆるハ君の位事一
種多き事へ行色と行かばらず年とし例とひうらもゆくべからず例と
云文字をもん度多時と云文字よりつゝ脚写有し色一切の事ハもうし
の例とほもと何と張行首と云事皆富全とゆしハ知るを書の上所

御所と伏て考るより傷めし之、和國神代ノ天位を統きくらむの事と
云く達武元弘はる代と云ひ是法と云ひし既もべるも少将君公をし
禮而とととをらうる古、大極殿の事と云く何の法禮ありと云例と
用ひて後は主殿ちばるるをうて多是非なく又別殿うそれつゝ事と
又モ別殿と呼ありて曰後代てえせといづくよつぐきをんソ例と云
事と例と大法不易政道と例と引く事てつるべしも外の事ハいき
さうも例と引く事と引く事と引く事と引く事と引く事と引く事
門あふとくあるを伝の事と引く事と引く事と引く事と引く事
武めよ而うじうじうと天子と尊色媚とひんをし薄そち東の例の
文もととくの事と云全不と云の事と尊色媚とひんをし薄そち東の例の
やをもととく來りがきの代の例だや是別時うげし我今云如也れま
とづく又保後せよ秋の場の者と云すとあづくべきを附の解はりく
全者もととくの事と云うとあづくべきを附の解はりく

夷よりひく秋の例とのてあひて身不肖かとぞも
家全が傷とひ一弓の弓矢ひる狂ぬしまふしと若さ一くやけ色は假大
臣と國は前も後も無所のるわ信を以てとづくとぞ

○続太平記

江別塙津の住よ佐谷備中守直純、其將竹葉を文武二道と嗜みて性清白
にて常お波瀬染鴻が為人トと慕う。且私政要簡篇と云一巻を
縦て享寧二年秋九月日と書付キ密よ内境より達しき事中す御心
實と云ふ事を以て假令許名主のなくとも可也。之を左安び
きよ將軍政是と身故のて元非其官傳うことと潛從のあれりゆ
訟す當世。揚是非還て免れと或ひハ旗金口の所緊執違俗で
輒皇憲と夢ちと復玉條の所重禁也。渠小臣一と大長と刺
度くの如一多々五刑より處し。終飽満し歟る推系の者と云候
事無事の如候。腰がそ不可止らむを身と云半と車裂きより
ある鹽水やあんと云く蓋陵の事。宣八門常色大キよ恐れしきを傳説

のとよのと多ひ薦をすく人珍院侍の不休草ともいひ。應否叶と流す
起淮の限は事ぢと申不審のを云事。然ど古今の義人暗キと傳を
身う罪と不祥事の定法也。龍寶印を被割心。吳子晋范增ハ賜公
屈原ハ獨り絶壁の云爲と云ての事。遂に自ツ湘江に衛の子魚と云
者り死す。孟鹿子。甚矣靈公と傳して。如其南枝。子巢。胡馬。孔
子嘶。王所。有情の事と云ふをかし知。守モレ靈。長る人とは也
久安相恩と慕。争う為國。サキノ思と可。不段。我ば人仕て今
參す。も古譽。此一は却事と避。御山の奥。す。其の憂耳。と不等
信。是非也間許。事出豪端的是。安住。今日委因入此境。
從前不踏本時路。

憂。憂。す。も復。し。人。あ。と。ひ。あ。と。見。の。た。り。先。の。右。手。次
妙。妙。す。亦。じ。つ。我。因。色。と。と。高。野。山。と。と。夫。多。生。山。多。高。城。と。高。車。首

里離御里て笑聲ル基の歲ハ終滅モヤと澄カトむすし董仰寺公第入道元
可う遂の暮るを名ギ一と流一季をト理テ没スハあらまく

もや一もよき所の山の峰に限ト曉のけとよりる日う耶

洞谷のあ焉孤峰の孤風自生シヤニ望遠トみすしも波ナ深きのあもと稱
つま一生行業不退リテ曉り澄一ノトモサテ
一 壮徳院義高公達政追罰のみ内を登城シテ時一トミ天の砌リモ五萬計リの
軍兵をとめ一ヘモナシヒテ士卒數萬をはせシテ練計の如くする所ある
アモヒテアモシタハひきよリタ色ばんを仰天トモあざうモリテア
全後身の範トモ行ト色ハ大樹の門矣

タキナリトモ色には焼山族のやつ色の絃のもの

もををまじあらうと本性はやましくもとこし経行テ天雲、凜風ねじわ
子吹葉色を鐵車轡と申シテ毫毛ぬきとそちもちとがつるがどし
とちく工古末代をとち石の脚はまきに拂は一時の力もて數万の軍兵

のあらうと翻案したる社序よ
今ニミヒヤウラニ事一天感不測の君じともア
○月
一 長享延徳のじうる諸國の鬭、乱盛よかイ彼ミムヒキバ政此多よ發ハ彼ニヨ
聚と対、凡人知る角りと安らぎやれる世の中とさばきに莊子す、三齋
のあらうと翻案したる社序よ

○己下舊德太平記

一 明惠元年、左將軍義政、植卿、達臣、細川政元、島山景豐の為、内を起シテ
てわらしおとく取付、番人の隊と竊ひ遁去を計り、内に義兵とれど、や
よ急をしをせ、鉄きほひひるが明るの浦と互に、絶ゆく
延びどよりと事一回、こちん旗衣沙ノの恨不墜うき身と
右丈人船の古跡と杳々と沙流にも有鷗有帆無行人、と能御一候
がのれし暗色をば明るの浦をゆひかゆひくと詠し伊周の音と云ふ也
詠メつて明るの浦れやひとなし、謡よくする月の老り身、

日と壁く嚴嵩大明神の胸筋と毛主と玉主と社壇と東かのちよ浪白く

松陰薄き和氣有り晴よソラ色

吾が朝む御恩のちりの浦有り歎乎少色し

足祭山を登るは松風の如きも其の金と清々良の浦を急
かし若とむすよしと都濱と云ひ是れかとく

此の高の私忘れぬアレルテラ津波と波音とあは
今後大内以東を支義奥ト天下再興の事と承り云々を公佈下レサ
美濃守事に於當日アリ將軍とモ館とモひ立あらセ時之至と活居
生民故ニ多細川政名ナシシムニ美改ノ行政知ニテ早澄豆列モおつしきタコ御行
逐ヘテテ明應三年徳安貴軍ヨリ一アリトアリ
一少貳ヒ而改資多至零人アリ有リテ或時家像の大官印印子金玉を作リテ
御子一隻ニ納進ヒチ形チ後ト顧る件ニちれど今一疋有ハキコレヒトヒ
ねテ不全ヒト便移處モアハ各さへ未年一疋の御印印子金玉像達ウ
門ヒトシテ又不信セ秋風立る事の意シテよと遂テ大官印自害セモ
大官印モ附辞世の所ト

根とて之を事に枯葉の爲めや何せうまく引際下り
かの類の事大多くしゆく者多無事とみて山山の館と改名すと之を厚二重
三重級屋政資が造るる篠和勝野山と称む日甚と承合、攻テトヨタモ政資遂に
博と爲テ明治六年四月十九日專稱寺と云ふと自害せらるシ陽と被
く死する而芋枕白い色多至血紅不消そ血滌の石、云はくも又政資の
子である經年、廣瀬山と云ふ者も自裁せらるシ厚よ連肩と厚よ色々れを最
も至る所内行をさせらる。

身と接する
事あるを身と接する

年達之後多便乞神示報以之而一候塔原之光明神卜云占之

一、公官領御内威靈守政元ハ數所不思ひ至る近支席の文公なく厚す廣法と好
代と徳^{シテ}べき子一人とおし角等香西又六是ヒ勧きノ革幕会尚經公の門ニ曾と
考子中乞う後不澄之ヒ考考る是ニ政元を我國家世流古相承してハ血脉と

断つて細川政春のひる國益をもとめられたる事と義植卿より度て而雪
在色を阿列の細川譲岐守之勝入道の端上六郎澄元より番量せし物よりと是文養
子の御身をさうる吉継は政元のナ法の事業並、張大を以て狂人の如くひり色ば
翁の子葉原守与一と一あ次宗益と三彦守と之を改えと銷キ六郎澄元不あく御
翁と綾せんとを巧みに車院は漏ゆゝと色ば珠をうけきよ走りり二八
者たる辻^トと反逆の罪名とねど五人とは情とて承を年九月宗益ハ貨見
竹田大切て所とあふては近城はなりきが故は政元をきく生浦とちう都下引
色舟橋のす院院主自害をばと極^トとせば一住持はゆきり事と請うが
我をゆむのゆく處は一文字とみむかよ石をかへ、寛^トをと先一寺ハ一院
とちうのゆく處を又紙とも一文字まこと切ヤベニ色とも腰一文字と切てと矣
タリ向^ト二重の裏政をと六郎澄元と阿良^{ヨシ}とひしりをば是より御の水双流
一と蕭牆の壁へ寫く字。内と勧懲を極め帝澄之とと丹波の事へ至不しれ
て澄之の懼^{モドリ}甚しき殺^ス政元珍ナ法を奉^{マシ}し政事邦のミタツリされど

高^ト事多うと今果不如澄之と嘆下とて高家お続せしりんとを香西又六謀主
人とのてと内口金六月高^ト政元湯屋入ら色々と判教し翌日六郎澄元の屋形
押あるるが澄元不叶^シと爲^ス色ば香西又六郎澄之とは工を細川の家
と清也あひ色等天子の政事と我代^シと執行ひるされ^シ澄元直目軍隊を遣し上
洛^シがりきは香西又六郎澄之と並びひ三万騎^シ筑紫山^シ所^シ御りて所^シ
澄元とお約^シて高^ト中納門と名者と於て軍士と備し乃^シ攻^シテ^シ而^シは澄之ハ
都^シ京都の詔遊初軒^シ所^シ是^シば則^シ御^シて^シ御^シ攻^シテ^シが館の内宮庭
の薦^シ防^シと^シ數^シを討死^シす^シば伯^シ那^シ伯^シ那^シ九郎^シと^シ身^シをも^シ
即^シ自害^シと^シ進^シみを澄之がぬようと宣^シひ観^シりあ^シて御父尚經公日く小の方
父^シのゆく事^シを真^シ。

梓^シ子^シ張^シ子^シのを^シ強^シう^シを^シ強^シう^シを^シ引^シのあ^シう^シき^シ身^シを^シぬ^シ。

壬後^シのさ^シよく^シ腹^シを^シ仰^シの^シ伯^シ那^シ守^シ即^シ後^シ。也^シれ^シを^シ御^シ首^シハ^シ斧^シを^シ爲^シ
す^シ。伯^シ那^シ守^シと^シ御^シ首^シを^シ自^シ刃^シを^シ取^シし^シも潔^シく^シ自^シ刃^シを^シ取^シる者

百七十金人をも少へしめ全多色を六角慶元再び細川の家督を相続せむと三好長輝
等政事と専と一どるさきだまよ以大敵火如くひづれを法制通す不叶又らぢる
世よりうなづんと諸へあきひをひのう 生後又澄えむ事の事ひ故にとて澄元死去ゆき色ハ吉國と
三好とも軍移す世上一日として辞す
一内義典古来より斯波細川島
三家の事より仕ぢし威と天下よ振りそしめ享禄元年十一月廿日高元一ノムヒテ壽五
十二年正月廿四日天正の道すまし山の比嚴山の雲の寺所ハ上、敵ナリトキシ下ニ
トキヤマツキモヤアベ和舟の道すまし山の比嚴山の雲の寺所ハ上、敵ナリトキシ下ニ
萬民の祝仰文書は記す從四位左京主多々良義興
少くもすがまき吾妻の勇士の根と乞ひてやこの雲の門ばの
此處天聰文書天聰は及ばず奉り勅命と降り 文書御劄文
雲は見し山毛ふ二の根言のとつ代このとの名ヒ雲乃上アモ
一細川常矩初名高国入道天王寺の合戦初名高国入道天王寺の合戦は赤原尼ヶ崎尼ヶ崎をもぐ二廢祭逃亡く捕逃亡
あり遂に自害自殺を嘗メト移りて野村勘兵衛と改名してひ眠りし
従姫の嫁嫁の許許

方へ文細やく書く

徳撰

かしこひ又ゆとふ言のとくや 法のあは うらやましん
逍遙。

太進田今一とびとゑへこしゆましハ唯 徒徒よ うそ
御所。校

従姫の嫁嫁の許許

津浦の浪うちちよき 海石の世くよ施せじ立本へとる言の事ハ何

明侍者へ

世の才子遂へて手車行きめりとほひとる言の事ハ何

家頃へ

ヲ立乃室とのうりを含りうれ

貴則の有無に依りて、其の金腰十文等を切合せしむる付締の事。又人所持
一 崇禎丙午年正月廿二日 本音書十二
枝の河水を越えて、入射する。遂と切合せしむる。歎へと引とせたるの腰を以
て、尼子作勝と經久永延十九年の八月と、雲列阿久の城と攻圍する。主所守・通家
の身命と不情、防戦しそうる輒、薦められと見へばうる様也。經久の馬子民兵
左備政久延空の何より先づ、付城の矢倉を手す。楊調と貞ちし文ひ、肩手ひと
満し残星幾々、點雁横^{タタキ}塞。長笛一聲人倚樓^{タタキ}吟ぜらるれど、林木と色が
為す搖落し山石と忽ちとて、破裂^{ハリ}をんとせん^テ。筑山のひとと凝らし胡谷
北走りゆきとせん^テ。阿久入道^{アラシ}御^ミはととて、而^{シテ}薄^シの音のいと圓かく
ゆのゆべいと政久延空を有しん^テ。是と並びて、上洛せし時、通白首の上に
あくへ有^テ。信^シて被^フ裏^{ハシ}を有^シん^テ。御^ミの御衣^ミを當^スの役を勤ら^シ。す
べく通^スる畢竟の事也。我射藝^ミを放^スとて下^ル計杯^{カウ}とて射^ス。射^スとまじと
是とまじて政久と射^スとまじとひぐる水^ミをばいとせん^テ

行家已蒙師道今日の山上に地集り元繁の弟八金鏡を討死せんと謀定しるが
事中子やうるハ隊伍兩人つまうる御至應不存出云御兄弟亮和らと守立等者安く
少我等一身の事とすり切先竹ひぬを光和公捕ひ色とめほの處と被晒カズいふ事に
憤り事にされば如きをひそむとぞお涙とて止まゝとやり色天行家師道主の向い
老人名手一生あくと若君とすまく我へと是處は討死せし所や切て餘燼の
無事を集め哭れ東運一と仰るが行景譯起の神と縁て極くお付りる事
消えよとよかく世へと手あくおもむりてゆゑと道せきのを頼
香川無庫田行景邁歿三十二序下爲武田旗下之義マサニ上今月今日入アハ歌傳戦
死顯アハと書テアリ也ハ師道と曰ふく事と深アハ

沙うなたうかを何う情あき風の木ねみの吹き食は
已斐豈後ち昨夜入道家^{ソラタニ}六十一日^チ同、意趣一快充^{ヒツ}に事^ト故障^ス
突^テて入^ルと^シ御^ミ軍^ムと^シ前元^モと^シ遂^シううむ

の青う色ば二の腰三の腰の輪と繩にて縛り向右の口を石衝と執り突き左
手牛矢の力大弓の色ばあるを寄りて松性レーモン
宗勝は腕の引き事ハ元年小鳥移船助と云者ともうて南高とをカツケル時家多難たるも
之を度流し右の手を腰後と抜きゆく小鳥が肩后ニモ切離。以付テアシヒを左の腰
とすながりとく

一天文十九年春四月將軍義晴公薨去。享年四十一。色如紅蜜，齒白而密，須眉皆黑，形體壯健，氣宇雄偉，音容溫潤，風度超絕，人謂之龍子。其子忠順公繼承之。

玄端のをかくどよナ
内扇と同しくおもむけらる

別よし君はと家へ幸あらば
日立日御基新内繁^{ジシロ}義^{ヨシ}爲^{スル}モあらば

人のもあすながれ、思ひ残りある、涙ともむすばれりて
寧相殿 美晴の男美輝々
まの上に重うりる病と少病とを治人の玉

宣思耶、歎ひて身をつとめ、さうする氣はと諦へよ
聖後疏准后名あひ首の文字すとく一文字シテと有首無首
ゆきと程なげとを復よも時也ぢやせどそい
もとまの空一きよとむらむらもつあじやし苦と思ふ
育ちてく所のみ多化せとあひてうちで修まがづかん

えどを以て法より向ひのみの外の三さばの波と舞のあしよ
このやうな事一あとは此旅のほんとうに移むかへる
筆はまし文をみじ不立文をみじとなく流す事あり
一永禄八年九月十三日代理左近長政が爲す將軍義輝公秀氏ヨリ十三代
建武ノニ直ニ十二年
お城うちの之御舍を南都一乗院より移す是更名号義昭とす
討する事多々トかと爲角して南都以處に於けるうち山中と通う所モも
一之部六の音信きをば旅路す懼モロ之部ろと歎モ一跡と述べてモも
之如般シテ之を吉と告ゆと言ひ

郭公のやうな日向山中はあのう古来のあおりやうす
千後國のと御前を連ねて三船と云ふので五代の將軍
傳り承へある

隆と室の多ハ秋月、武運至る家人の多は其の身と雖も之に情ゆ。今冬
ニ生よどひ室車ヒ山中を度す。附辺と耕やな車の山毛毛回送セ。先
づ二株、草木廢の毛若又爲息新外をその草河内より天陽し金甲斐
なる木余助モ一ノ都へ送る上モ一又西門の新外と修法師モとす。後
の舞と車らを活のちとまきをもと和尚快く飯食し即心あく只云ういふ
事じて木余助けあらむしと坐中一聲。義隆卿今多心事一と飲び
きする形と和高湯漬と沾生。うり色と名是と食し。時。冷泉判官
隆豊世人の年ひ義隆と同い。忠義の人也。著取車一。日。徐めあり。車中窮屈大内ハ林聖。天野翁内多とぞ。打坐の運をみ。さとと済と危しきれを
左今御る有難む。かうむ。車の口情と門先と鬱も。隆房と利達トヨダ
トヨダ。琳聖大内ハ林聖。の末。此の血脉とぞ。まことに。おじきわ。とと済と危しきれを
天野翁内多とぞ。打坐の運をみ。さとと済と危しきれを
乱く。はなき車とぞ。が、立形のせ。世の時。かく。こそ。年の内。行跡ある
事。可。被。今脚最期。及て君のゆ。私辱と。後悔。何
あ。信奉のゆ。とぞ。書はざる。

車。ど。嘗。今。と。歎。あ。あ。ハ。討。死。か。う。か。何。と。思。う。ん。ま。ー。と。の。控
象。廢。と。あ。見。ら。ひ。と。う。り。き。ば。判。長。津。子。詮。か。き。車。か。生。し。く。み。の。門。第
と。を。駕。く。う。り。の。寛。う。や。景。船。の。一。も。不。因。て。永。く。六。道。生。不。流。物。と。う。う。
吾。寺。ヒ。一。多。の。瞑。恚。ト。俗。て。修。度。送。す。生。と。玄。け。八。翁。四。千。の。眷。属。ト。成
五。く。八。三。年。主。ハ。七。年。の。内。よ。陶。グ。頸。ぬ。く。獄。門。オ。晒。ト。リ。ベ。ト。眼。と。此。よ
半。述。と。切。ク。形。狀。終。羅。三。月。ヒ。却。モ。と。ど。思。つ。れ。り。的。程。行。く。敵。押。あ。く
ま。を。る。流。石。相。傳。の。主。君。な。を。ば。た。ち。な。く。攻。め。て。唯。と。く。く。問。自。害。あれ。そ
か。うち。義。隆。卿。モ。も。自。害。す。べ。と。宣。ひ。す。が。硯。引。す。門。辞。也。の。被
あ。信。奉。の。ゆ。と。ぞ。書。は。ざ。る。

討。つ。と。討。き。ハ。と。端。す。一。如。露。亦。如。電。應。作。如。是。觀
燈。夜。中。如。景。良。豐。卿

秋。風。や。あ。萬。葉。原。す。以。萬。葉。恨。を。浦。る。雲。乃。く。ま。で

冷泉刑官兼原隆豊

冬のやうの灣ケナガ

ナガソラ

と雪キスとす天アマよさうの風カクの声ヨメとあくび

是郊右鶴チホウツクち又隆系

小名宿の酒行船サケイボウの名メイめもやあがしきめも

木の秋カエデの葉ハの聲ヨメいふよ此シすあくれなせのうひと冬

高右京亮多良隆タケミタケルタカタケル

末エンドのあかの葉ハの聲ヨメいふよ此シすあくれなせのうひと冬

不來不去 每无無生

今宵雲晴コトヒタケニ 峯頭月明タケミツヅクニ

天野藤内隆良

小幡四郎コバンシロ 美實

呑却宝劍ウツカツボウケン

放下名弓ハラフメイク 只有斯景タガタニシヨウ

一陣清風

黒川近江權守多良隆像タカラハタケミツヅクニ

夢亦是夢室モモコトモモコトモ

不來不去 在二端タツミダツ的中ノミツ

称宣民船タツミンボウ

坐右信

身と蓋カバ跡カタを爲スルまの原ハラよりあらゆる実現ミツケンの事モノ

太田隱岐守隆通

秋風の至アリりて山陰サンゲンはあむあむとちくらんやきあむ

晏屋イニヤ扇隆秀

有時自至アリタマ

有時又還アリタマ

清風度水セイフントウス 明月在天アマツニ

がくそ義隆卿腹イニヤ一文字イニタマ一撃切落ハラハラ冷泉刑官カクニン交差カサガタの所シテ害スルと云ヒテと
不敢ハシマ仰ハシマ折ハシマしと後隆秀アフロウと初ハヂとて敵アキの中ミドリへかけハシマ大手オオハとあじ
てお鐵弓タケミタケル矢ヤもあくろアカル中ミドリを吹ハラハラ泉刑官隆豐カクニンタケルやハの大力
あをは大手力オオハカタマチあ向ハシマ大崩ハラハラか伏ハシマふくら毛ハラハラとこどコド經營ヨウジの中ミドリ
走ハシマ入り立ハシマりて腰ハラ十文字イニタマ切ハラハラ腰ハラと體ヒメと天井アマツと抱付ハラハラ自ハラハラ喉ハラハラと
掩ハラハラ仰ハシマすきうて今彼カクニン者ヒト多タカシ血活ハラハラと体ヒメもあつたるさきば天文二
十九日有朝アリタマいのちる月ツキ日ヒと大母オカマ滅ハシマ亡ハシマと琳リム空太子タカヒコの苗裔根ハラハラと断ハシマ
萬ハラハラと枯ハラハラして死ハシマすることを爲スル色杵陶隆房カクニンタケルの妻ヒトと弑ハシマ一罪ハラハラ一罪ハラハラの

故の御子の新年の寺は相良を守護する者と並び源氏の御
老女の誅ととて刺されしゆも陶庵いふとて相良と數さんと思ひてお出でを
ゆくお良き所は山に上りしゆが筑城へ下るところ

甲陽年正月廿二日，天文。年二月廿六日，晴。信公入蜀安。社祭。四郎。是年四冬也。

奉行役軍候也此ハシと侍り候く猶きらる人なれども門恩とすハ將軍大將軍と色
にて承叶へ萬事おまかせり事公ハの内にて軍事めさんてはる事公へかゝる身命とちてニツ
ツの事公なるをゆかり七ツおまかせらる事と忠義忠功と名づけ武力が
ユねほきぢる奉公より此處益忠功の者より仰りとやうるハ諸人道道理を少くも恨
むべき事也し世の事功の事功の侍士も大官子ゆゑ仕立手事の上の事公人よ知り行
きあらゆる事を名の事功を命はお邊なくして侍り候キよろすを准もつとも左明
善和殿うる事り色々後事を一人をあめよく事公のとひにち候よ御物とおもわれはま
公能を色え不厭やまきんじをこうそ御の爲ハれらるよ我事すよハ揚ハビと之恨をす
ねこそ不厭やうやうきしゆど猪人大將、恨ミ至つてとおよが豆見やみつて太内殿
沙引をさればこそ至見ゆる陶と云ふとよ事と名うりを附かと少年即妙
ナ向げる

毛利元就を以て大内家の義弟とおもしぞれを遂に閻を討んと城を攻め破られ
くるが、その在郷の條で日市の西南に松山城と改めて一門を押すらも城主
半夏新郎、隆保大尉の侍からりをも旅防にて中へ進んで、色え味ふる大獄を
手痛く攻立ちきれり。遂にハ神甲^{コラ}、難く平定智高、大林和馬、兩人切抜して
諸侯の命は可代^シと望むやせれども元就則是と御咎せらるる事無く、半夏と城守
もて既に自害せんとせし時、餘録の者をして吾ノ首おとせとうんと冬ニ嘆莫^{カイナ}討^トと云ふ
刀を抜て西子白ハル識、田中三下、阿字之一刀、生死^モ又截^{タク}惺^モ繫^モ又截^{タク}ヒ唱^ハ腹
最期の序説べてして観引多^シと申すとぞ矣。

高木を破り腰を屈めし寸々切て捨てたりを些とよつて
し極人より向ふ腹筋切て死ぐる者なしハリシば此隆保を死んで
船の手詠べとして現行多才とぞ矣

平雲新皇帝 隆保二十三歳代諸士之命、自裁之後、命未^テ断於^テ茲、詠^テ正焉。
天文廿一年九月二十九日ト書^テ。さて後^テ、かく^テ首うてと云々色^テもぬ端人後^テ
水^テと^テす^テび^テお^テ處^テ。隆保を柳原大納言資定卿と仰^テ。山^テ下^テ和^テ
と^テ学^テ得^テし如^テ形^テ、そ^テと^テ今^テの^テ期^テ、臨^テと^テ詠^テじ多^テ事^テ日本^テ西^テ積^テの功^テ
能^テ色^テあるの^テ。医^テ官^テと^テ云^テる文^テ字^テ身^テ祚^テは充^テ滿^テと^テりし^テ等^テの學^テひ^テ平生^テ
也^テ。遠^テは^テ大林和^テ多^テの^テ隆保^テが^テ自^テ害^テと見^テ。平雲歎^テハ天^テ降^テレ^テ也^テ。
る前^テ、苦^テい^テ老^テけ^テ弱^テり^テ、ゆ^テく^テ濡^テき^テ極^テめ^テかづく^テ。し^テと^テ般^テ一^テ文^テ
字^テ不^テ切^テく^テ也^テ。と^テあ^テり^テ色^テど^テの^テも^テ脣^テと^テ口^テを^テ嘗^テめ^テ不^テ生^テの
士卒^テハ^テ悉^テく^テ命^テと^テ物^テう^テり^テ。

一雲列焉。始主尼子修理多岐久と叔父紀伊守國人又不和を以て距は重ノ文子
三人殺戮と被蒙る。至來由と云ひは世間久之又よ海の難より傷三子と寧し
先源よ進すれども、無敵不隨。無所不靡。タモトモ古ノ事よ傍り不善の跡跡
切つゝもされば人へ天質聰明ぢやがて孔孟之道よ志し仁義礼智信の大徳乎
窺ひ放て、誅戮多と見ひかねじ哉。而れ孔門の孔孟不足用。とぞよほどよ不
觸。躋^{シテ}者不久。一去多後とて又被^シ知^ラる處^シよ又^シ一朝の悔と被^シ受^カる
うそ嘆かき。爰^シ乎晴久の右第^{シテ}。未次^{シテ}贊岐守^{シテ}極^シて龜の字大ちる。有
て孔子の隆龜^{シテ}。も祖の隆準^{シテ}。もあらうと見るらんと見え^{シテ}。其の事^{シテ}可^シ宣^{ハシ}
放^シ。若^シ傳^シ。誠^シ人也。併^シして度縁^{シテ}。とてらきしきの財^{シテ}。事^{シテ}と此^{シテ}と見^カく^シ可^シ宣^{ハシ}
海^{シテ}。ま若^{シテ}。さゆり^{シテ}。くぼひき氣のち^{シテ}。よと大^キなる指^シ。毛^{シテ}。筋^{シテ}と撮^{ハシ}
所^{シテ}捨^{シテ}。う^シヒ^{シテ}。ヒ^{シテ}と大力の仕事^{シテ}。色^{シテ}。龜^{シテ}碎^{シテ}。ては^{シテ}。後^{シテ}大^キよ癌痛^{シテ}
又中井平左衛門^{シテ}と大^頭の男有り。斬^リ躍^リ季^{シテ}珪^{シテ}。累^{シテ}顛^リと可^シ勝^ルと^{シテ}捨^{シテ}室^{シテ}嘴^{シテ}
居^{シテ}。了^{シテ}。誠^シ久^シ中井^{シテ}喫^{シテ}。き^{シテ}バ應諾^{シテ}。と出来^{シテ}。も付式^{シテ}。左^{シテ}捕^{シテ}中井^{シテ}

領と廻り廻の手筋の如きは、被呵責へる事中
井戸と云ふは情くちひの里目晴久の弟ハシモトが仕あつたと右の龜とバモ佐由し室丸
の方印、剣で出でまつて晴久をとくと中井が皆の剣ハサウエを晴久と侮ハシメルすや又往
來する所やとみの外す爲ハシメテの色ハラタカをアキ詠ハシメルすハ昨日吏部私龜
のうちの傍ハシメテの所ハシメテの形ハシメテを劍ハサウエり難く海ハシメテ一方ハシメテハ吏部の脚
公ゆゆの聲ハシメテを以ハシメテの形ハシメテを劍ハサウエり難く海ハシメテ一方ハシメテハ吏部の脚
下ハシメテ足ハシメテの剣ハサウエるを全く晴久にと侮ハシメルす事ハシメテ非ハシメテズ又假京はつるもとくび
と若ハシメテりう晴久をとづねに贈ハシメテし日と塞ハシメテひそく沙翁ハシメテくるが唯左石ハシメテは剣ハサウエ
とを宣ハシメテひける又吏部の高ハシメテ筋ハシメテをしる事多きオナニイ十丁ハシメテととだ因踏
の名ハシメテ不ハシメテま、下馬せきせききゆゆ往還ハシメテの男女是ハシメテ不ハシメテ迷惑ハシメテ一ハシメテうきる夏ト
熊谷新左馬ハシメテともて以ハシメテ松健ハシメテト放送ハシメテの男有ハシメテが吏部の下馬の剣法を合
の事ハシメテある思ひきん或財牛の背ハシメテ馬の轡ハシメテもすすり吏部の小馬ハシメテ特
てゆれひゆれと毛ハシメテりう吏部をとどめハシメテあきらむの熊谷とアフチハシメテ奇怪ハシメテ

一石五萬十石富士とす。山中鹿之助、藪原次之助、五郎兵衛、吉之助、上田綱家
之物を修理之物五川鉛之助、川家柳之助、井筒之助阿波弓を破り障子之物之
一 弘治元年十月細目毛利元就の謀計を陰て陶尾張守晴賢入道全薦キヤウ。三多余皆
勢義列嚴嵩の爲め毛利安僅三四千の人为討負そよ遂に入道と自害
さうもしが生有能と仰く。又は入道を窓りそ肥をりそんを色も行止不徳
心。さある而の石上に腰掛けて休むるは。修善實民幼の情やむるハ歎ハ勝る
後は満て咲きの如き一般と無く全薦公私いじらしく云ひてやと云ひれ
も入道を可せ透達アリニチ。唯自害するかの事。あくじねと吾日未
以。宴アマツ。控コントロ。衣アマツ。数アマツ。天アマツ。今す。大軍を以て元就が三面の壁アマツ
廻る。吾と立ちとを云ひて。主と称思ふ。さるを各、益
追我より。近づひ先進と云ふ。而より強す。是深の志報謝を乞ふ。金あり。故
ハ吾望。乞ひ。自害の後服を車馬。有入道。が死體と稱。子納り金。而
ハ何年命と全くして謀と申しを知と討て。我が仇と報せよ。努力く。財を

不可背^リと氣を乞ひ各佛事の革修^{スル}由事^モ少^シと身^モ速^トと仰伏^テ上^モ
縛^タの纏^モ付^シひまつてこその事のゆ厚^シ九斗^タ一毛^ビ報謝^シ候^ベ先
緋^ハ今氣^ト道^モゆくも故^ニ信^キ充滿^ス可^リヨ^シ返^ハく空^ト不^ト討
き^シる車^輶の上^リ加^スべし不^如一向^スひゆる事^モ少^シと准^ヘ仰^ベ自
裁^シ行^ス死^モ三途^モを経^受可^ヤこそ強^シ刀^{アシ}とをき^シも信^キ民^ヲ郊
サ^ム大^シ割^シ是^ツ君^ノ脚^自害^ミ石^屋中^シ車^輶と深^く隠^シと後^シと
角^シと改^ベしと止^シをれど^シ時^ニ並^ハ信^キ守^アの城^シよ様^シの泛^ハり^カの夜^ニ
色^モ無^カ生^ム全^身公^ト載^セ山^海廢^田^由我^等寃^キを^リの練^スる^カの^カ
く^シ放^ハもあき^シ阿^タ多^ニ嶋^ト小^シ黒^髪と^モ逃^ハべしと^モ色^バ入^道せ^リ
す^トあ^クた波^テ捨^ハせんと^思り我^と幼^少の以^テ水^練して^モこ^づる自由^トね^ラ
な^シば面^ミの力^ト不^措き^シかき^シる^カ海^モ海^ハ人^ハ安^キ草^シべし織^ル
連^ト不^通此^身の死^モと^モ途^ト生^ハ海上^林を^モ却^ハ止^シと討^キちん^リト^リ
一身^ノの^カ辱^モの^カと^モ但^シの名^ナと^モ且^シ防^長豐^ム能^シ士卒^三万人^ト帥^ヒ

以^テ事^モ済^リ一人^トは^シ可^ヤ有^リ者^モ入^道獨^リ立^シて死^ム者^ノの父^子足^シす
何^の面^自有^リ面^テと可^レ對^シや只^自害^シ也んと仰^スト^シ設^ケる事^一こそ
うき^シと云^フ色^モ色^ハ何^れと^モ纏^ハの泪^ト流^シき^シさ^カば各^中く^ニ達^シ不^可
志^面と^モ潔^潔と^モ害^シと^モ中有^カ重^シの泉^路と^モ供^奉の忠^ト達^シ事^ト心^ト
の中^シよ^シ不^意と^モ討^キし事^トも^シ入^道い^シ最^終の益^シべ^シ也^ト云^フ
壬午伊香美氏那葉經柏の義^シと^モ拾^ヒ松^ノの華^モ一^ト者^モ寄^シう
の^シと^モ酒^ヲ酒^ヲ酒^ヲも^シ人^ノ辟^キ事^トは^シ可^ヤ也^ト是^ハ之^モを引^替て
一^盃呑^テキ^シ早^ハモ^シ之^モは^シ世^ノ辟^キと^モ確^ヒ功^徳水^トも^シべ^シ也^ト此^日と^モ
谷^ノ流^ミ酒^ヲ酒^ヲ酒^ヲ也^ト千代^タと新^リし岩^ガ數^今日^ハ又^曹源^一滴^ト
の^シと^モ酒^ヲ酒^ヲ酒^ヲも^シ人^ノ辟^キ事^トは^シ可^ヤ也^ト是^ハ之^モを引^替て
よ^シに^シし^シも^シも^シと^モ原^ハ心^モ昂^ハ心^モ昂^ハと^モ此^ノ事^トの少^シと^モ酒^ヲ
よ^シに^シし^シも^シも^シと^モ昂^ハ心^モ昂^ハ心^モ昂^ハと^モ此^ノ事^トの少^シと^モ酒^ヲ
よ^シに^シし^シも^シも^シと^モ昂^ハ心^モ昂^ハ心^モ昂^ハと^モ此^ノ事^トの少^シと^モ酒^ヲ

さくべ一曲謡んとぞあいと笑へく。五裏滅色の秋ゆきや萬ち木の葉乃
益飲酒を谷の流すとすと源川水上を秋むるゆとあらす時一と今こ
そ陽りけりさんと源ひそれも入道とて山修まし鶴西宗播^{モツ}相傳とゆく
乱舞の勘能世以テ所知しゆる。わがよも魚也。憶只ひ半つ事^{シタモノ}を呑
呑と嗜む年凡浦^{アマミヤ}と程人のう胸裏は第と云ふの躊躇^{スカニ}かくと大き^{ハラ}感
一船と今度の旅の首途^{カドテ}と一そし年へーと之腰の刀と移て先鞭^{サシ}し
音^{コエ}をかよ揚^{ハグ}。難^{ハラ}のむとそとんううハと足ひ走^{ハシ}て腰一丈高^{タツ}に接^{ハシメ}
くと年泊^{ハリ}をとどきど滿^{ハラ}音極^{ハラ}と唯今^ハの音を落^{ハシメ}と多く傷り^{ハリ}
角あくこそとくへ魚問^{ハシメ}と戈^{ハシメ}と難^{ハラ}入りと招^{ハシメ}し形^{ハラ}とそび^{ハラ}し年とや
べき才^{ハラ}と才氣^{ハラ}と才^{ハラ}のうひと引^{ハラ}ひをとひひの巧^{ハラ}とそひの折^{ハラ}を
能^{ハラ}と能^{ハラ}と能^{ハラ}と能^{ハラ}されば鷺^{ハラ}宗播^{ハラ}新^{ハラ}毛^{ハラ}の祝儀^{ハラ}よ。作^{ハラ}波^{ハラ}の浪^{ハラ}れ
嶽^{ハラ}す立雲^{ハラ}のと。雲^{ハラ}と雲^{ハラ}小遣^{ハラ}しとこそ奇^{ハラ}特^{ハラ}の年^{ハラ}よ中^{ハラ}の天^{ハラ}和^{ハラ}今^{ハラ}

沙依意本是天地の勝者とて、一曰く魔術をも全盡して、庄し博世
のうえ

行状情事行を恨む多うとせ有る事あり是も才人
上仰モラ色正れど在歴屢と後此少きが又山海の解由
有上まへなしと思ふと遂にと進ひて進ひなれば悟るまゝ

莫誦勝敗迹，人我暫時情。一物不生地，山寒，海水清。

任秀堂氏續抄補墜正

思ひきやうとせよとおもひしゆのあめ。財と名はるんと多く
かくとものあとに叶われど入道大よそと感じゆうも併後晉ぐん我の情と放
擲ちゆる意象是朝の名知識りうとぞ則若相アカテと云取刺とちゆの腰突
立矢と観と引ゆてし曳スイやうとあくと仰又左車しゆやは押立下アシと押
下アシ脇治アシナギとあきせば伊香壁良弼イカヒラマサヒロと云ふ者、前此アヘイと不敢左刀振上アシタツシテ

とくへし前をもてて爲よる民効をも候太刀と被ふ、拵入道の死體は
麻付枷と般の縦綿の中より一ト一日斤時と不立離仕まつて、年月一杯
びりすと之を此尉が年積り數傾くとも忘れて走て、事はのとく又
西年ハ西國を双の別附と唱へうきまじめにしめ、中國とぞ書中は可法
運とぞとて、今かく葉の外小缺すむ負ひ事のに惜きよ吾こそを學
立べき身の却てのゆけやつる事れ恨々しさとあはせナリヨ近ちミク行狀
聞るをも參そ毛門山海うみ民部少弱くどろみ、御即と制一色毛
船立あがつ入道の被ゑつる少祖は首とつみ杏^{カキ}は陽て谷川の岸根すすり
する者下へ押こめ本の身とゆけを隠したる松山峰垣是あへ所傍底却
あでも朋友の盟^{アガシ}を不祐^{アシラ}とすよもすと執て、後邊^{アシラ}を免^{アシラ}テ^{ギコウ}民効
是とんと何しと別らず死^{アシラ}入道處の別の色をぬるふと云ふ事ひと
感称し入道の身を復取^{アシラ}しるは海を切^{アシラ}すあれを故命と失ふと云程
のゆき有^{アシラ}しきを身を害ししを付人定^{アシラ}毛^{アシラ}の何とて入道敵

と一不自裁をきるやと沙^{アシラ}にしきども者を只すあつ甚^{アシラ}如^{アシラ}苦^{アシラ}
もて自害せども入をも定て世所^{アシラ}をキモつしんと歎^{アシラ}と付てゆぢ^{アシラ}と云ふ
失^{アシラ}し石もきくはきば入道處の失^{アシラ}とち草^{アシラ}ハ一^{アシラ}と人^{アシラ}は幼^{アシラ}モじよ^{アシラ}
と海^{アシラ}すす浦^{アシラ}と紫^{アシラ}ト像^{アシラ}とおきて我身^{アシラ}ニ三所^{アシラ}斗リ満邊^{アシラ}へ走り
行立ひる^{アシラ}船^{アシラ}破^{アシラ}ゆづら^{アシラ}前^{アシラ}押^{アシラ}か例^{アシラ}也^{アシラ}多く^{アシラ}貞船^{アシラ}行^{アシラ}逸^{アシラ}あ
萬^{アシラ}向^{アシラ}思^{アシラ}謀^{アシラ}とす人^{アシラ}感^{アシラ}せぬ^{アシラ}と^{アシラ}を復^{アシラ}入道の^{アシラ}毛^{アシラ}角^{アシラ}
ト^{アシラ}まかしえ残^{アシラ}すを^{アシラ}後^{アシラ}廿日市^{アシラ}の洞雲寺^{アシラ}納^{アシラ}慰^{アシラ}勧^{アシラ}

孝養モラキヨ

右^{アシラ}ト^{アシラ}合戦^{アシラ}は^{アシラ}波^{アシラ}可^{アシラ}性^{アシラ}と云^{アシラ}者^{アシラ}と^{アシラ}擣^{アシラ}て引^{アシラ}立^{アシラ}事^{アシラ}め^{アシラ}就^{アシラ}ん^{アシラ}路^{アシラ}ひて^{アシラ}者^{アシラ}ハ^{アシラ}
いは^{アシラ}り^{アシラ}り^{アシラ}時^{アシラ}移^{アシラ}ふ^{アシラ}と^{アシラ}お^{アシラ}く^{アシラ}推^{アシラ}す^{アシラ}の^{アシラ}物^{アシラ}事^{アシラ}の^{アシラ}達^{アシラ}者^{アシラ}し^{アシラ}助^{アシラ}け^{アシラ}を^{アシラ}う^{アシラ}と^{アシラ}何^{アシラ}
の^{アシラ}便^{アシラ}と^{アシラ}う^{アシラ}の^{アシラ}人^{アシラ}を^{アシラ}も^{アシラ}す^{アシラ}可^{アシラ}性^{アシラ}日^{アシラ}以^{アシラ}者^{アシラ}不^{アシラ}し^{アシラ}ね^{アシラ}る^{アシラ}一^{アシラ}身^{アシラ}あく^{アシラ}保^{アシラ}ぐ^{アシラ}し^{アシラ}ば^{アシラ}ちん^{アシラ}
す^{アシラ}故^{アシラ}て^{アシラ}金^{アシラ}可^{アシラ}助^{アシラ}とも^{アシラ}有^{アシラ}り^{アシラ}も^{アシラ}多^{アシラ}く^{アシラ}と^{アシラ}言^{アシラ}下^{アシラ}よ^{アシラ}。^{アシラ}か^{アシラ}ー^{アシラ}ヒ^{アシラ}お^{アシラ}り^{アシラ}や^{アシラ}乞^{アシラ}利^{アシラ}
一^{アシラ}少^{アシラ}禪^{アシラ}金^{アシラ}一^{アシラ}ニツ^{アシラ}あき^{アシラ}一^{アシラ}世^{アシラ}音^{アシラ}さ^{アシラ}ぞ^{アシラ}の^{アシラ}秀^{アシラ}邊^{アシラ}ハ^{アシラ}う^{アシラ}と^{アシラ}の^{アシラ}た^{アシラ}る^{アシラ}ね^{アシラ}よ^{アシラ}
能^{アシラ}修^{アシラ}う^{アシラ}と^{アシラ}本^{アシラ}と^{アシラ}助^{アシラ}。又^{アシラ}闇^{アシラ}入^{アシラ}き^{アシラ}の^{アシラ}日^{アシラ}朋^{アシラ}家^{アシラ}阿^{アシラ}弥^{アシラ}と^{アシラ}者^{アシラ}と^{アシラ}生^{アシラ}
捕^{アシラ}て引^{アシラ}出^{アシラ}し^{アシラ}う^{アシラ}を^{アシラ}餘^{アシラ}を^{アシラ}は^{アシラ}者^{アシラ}き^{アシラ}日^{アシラ}除^{アシラ}一^{アシラ}と^{アシラ}大^{アシラ}の^{アシラ}別^{アシラ}の^{アシラ}者^{アシラ}な^{アシラ}よ^{アシラ}く^{アシラ}が^{アシラ}く^{アシラ}止^{アシラ}き^{アシラ}と^{アシラ}生^{アシラ}産^{アシラ}を^{アシラ}き^{アシラ}る^{アシラ}事^{アシラ}の^{アシラ}後^{アシラ}の^{アシラ}禪^{アシラ}と^{アシラ}可^{アシラ}成^{アシラ}者^{アシラ}と^{アシラ}水^{アシラ}あく^{アシラ}が^{アシラ}水^{アシラ}を^{アシラ}よ^{アシラ}と^{アシラ}觀^{アシラ}若^{アシラ}年^{アシラ}や^{アシラ}助^{アシラ}も^{アシラ}と^{アシラ}自^{アシラ}害^{アシラ}と^{アシラ}だ^{アシラ}が^{アシラ}く^{アシラ}繰^{アシラ}細^{アシラ}よ^{アシラ}き^{アシラ}よ^{アシラ}故^{アシラ}を^{アシラ}も^{アシラ}余^{アシラ}の^{アシラ}情^{アシラ}と^{アシラ}手^{アシラ}を^{アシラ}而^{アシラ}と^{アシラ}不^{アシラ}思^{アシラ}と^{アシラ}云^{アシラ}と^{アシラ}程^{アシラ}よ^{アシラ}よ^{アシラ}酒^{アシラ}

ねすのまこととアレシと宣くべ當所弥累アシトモ取敵
名と情ひんといふもおとおも惜きよつてあともお一よじと詠ニテ
可性が極奇よハ物アリ助けたりとて何事アリんと是と一命と卯リハ體ミ育
士の心とと和くるを和氣アリシと多んハ体アリ古の大陽の引日の音ハ拂ア
えを身ハ即モアリと能く年と放き色若原の落日ハ吾ハ數萬の多キモトナリモ
水火の責以免アセル今之の家所跡ハ才と傍も却モと詠く一命と卯リハ風雅のモ
古今の心情を一揆シトモ此の老健ヒアリモケル

一或然無名天野福原桂志道日羽など元就の軍陳ト個名ト今復嚴嵩
主陶が節等の討死セし板体など其の評判アリ不る元就宣ひうハ陶
入道を又祖お流アリ多々窮相並ヘに差ヒトスレアリシカド板変の跡ト
傳ヘテ全蓋もと能家のみ節等數はアリモ中もと存否賀民詫少捕
隆正を末代忠良の臣の象徴トマヅキモシモ故ハ妙色入道の乳人ぢりし也
美事ナ付て後見レ政道の邪と改め軍備の不足とト陳メ身又數多の
令捕ち名有レシモ芻名と炳事海又良長の過とて心裏ヒヤツキく
ヨキシテ巨額ナ一品あり宗女と称ハ入道の乳人更チ色ば別して心事く
五仕の色薦人畠董英ト文武の才藝もと長じぬ事ヨセ山口よ薦海胤

酒翁自云花遣了陶をトリ滿之景と賞、號ち奉事基し或取陶アリ今
起き夜一秉呑明レシ松音の聲アリ有明の月此山の聲アリト詠め
微矣トス陶色アリカクを山の聲のアリヒヨ初丁の灰アリヨルフリト今一
声のアリ空腹アリ内ヘト不入されアリと義モトアシ入道の小庵徒ト
若松丸節と云者陶が麻所のひきは伏アリ。アリヨ宗女殿君ハ何乞
何の為のゆ止ムソニ庭ハ陶アリ活トスアリ色は宗女ハ乞トアリアリ
ノ闇中よ拂アリ。隆房公を薦海胤酒と名ヒト不敵一尺五寸有る吸ノ平口瓶後若机ト
戲色アリ陶入也。妻戸鉢シト立吹レシ少少ガ子爲ア事アリ前モアリ
望隆房と薦海胤酒と名ヒト不敵一尺五寸有る吸ノ平口瓶後若机ト
て解説セラリト振ヒトスレアリ。宗女をアリヨア業サ色モ
夜の物アリ後流一後。の後アリト列破り大庭ヘ逃出テアリ陶ハ後ア店ア
て彦縁モ走りあつ。宗女不見モアル。若ハ主トアラ事モ要ヒテ逃出
テ何乞ヘテ連モアリモトセモ一古刀オテ取ヒテと縁の板トテニヒ端折

声を嘆き色をれど柔らかうるゝ體刺彼不す投捨行す
敵とぞ恩口可仕。唯財の身よやうまるこそは。ち程の脚憤。よていりく何う一
足を引ひぐもとを離くともあゆ千筋で兩組カタヌイて縁の上へより蹠カニラブ。而
ひと笑。改ま一會とこゑとおほくとて居下す。陶ハ堪カニラブ。人こそ養
海氣カニラブ。受て見よやと云ふ不敢打色カニラブ。れど柔らかうるゝ角
入道父の臣部とて海うるの柔女免アモリ。ご角云カニラブ。と有公奉カニラブ。一く波を
けれど良鄰カニラブ。の重故角とて海うる入道海カニラブ。あむ色ばむ。そと不使よ思ひら
免難カニラブ。とあらす。を解。若長カニラブ。とらめ。良鄰カニラブ。の一子の事
われども。こと不使よ思ひて因カニラブ。をもと消す。前後不差カニラブ。と
愁カニラブ。てゐる。かくを免難カニラブ。と向カニラブ。と。相カニラブ。と。悔カニラブ。を海カニラブ。不思カニラブ。某
ふよ。あじと縁カニラブ。と下カニラブ。押カニラブ。と。悔カニラブ。を海カニラブ。不思カニラブ。某
仕カニラブ。主君の仰カニラブ。と。免難カニラブ。と。仰カニラブ。と。助カニラブ。と。悔カニラブ。を果カニラブ。す。首と親の身として
何の不快カニラブ。と。悔カニラブ。と。あらは解カニラブ。と退カニラブ。諸人民カニラブ。が心中と察カニラブ。

ありて市トキラスの詞と伸ヒロシマへ。と。民鄰カニラブ。敢て不樂飲食言笑カニラブ。と。の如く。かうなるが
夜の衾フスカ。布ハシロ。綿ウレハ。は。浮く。汗カク。り。す。う。る。と。ま。さ。と。た。入。と。と。つ。の。恨。の。事。と
かく。造。攻。顛。而カニラブ。ふ。と。仕。道。よ。高。く。さ。う。れ。を。入。道。と。我。づ。追。急。か。る。と。敢。な
宋。ゆ。と。教。し。き。と。悔。ひ。又。民鄰カニラブ。心。裡。私。一。く。思。れ。り。民鄰カニラブ。一。子。と
殺。さ。き。を。事。と。更。よ。不。恨。の。こ。う。平。素。仕。の。筋。よ。力。と。を。し。今。入。道。乃
最。期。を。と。改。變。忠。貞。と。伝。し。る。こ。う。例。す。き。事。ど。と。な。色。と。免。難。事
感。海。と。流。し。泣。た。滿。產。の。人。皆。秋。と。ぞ。涙。しける。

一毛利家の身方カニラブ。よ。松原播磨守監裏カニラブ。と。云。人。何。う。智。富。義。傳。也。す。と。大。膽。岡
脱。す。と。不。羈。ぢ。よ。れ。を。石。仕。き。る。身。へ。た。不。安。威。と。一。年。の。ま。け。松。こ。そ。を
參。と。撫。み。生。き。並。く。の。者。た。ハ。山。城。海。縮。と。う。と。心。常。か。る。者。と。が。少
ひ。立。き。る。船。よ。免。來。盜。城。と。業。し。て。世。と。海。と。奴。原。守。れ。ハ。敵。城。敵。陣。よ。本。討
焉。け。或。え。大。と。つけ。敵。の。隊。と。敵。の。隊。へ。歸。裏。城。と。柱。堅。陣。と。事。不。か。甚。貪。一
是。恐。よ。別。う。急。の。多。き。故。と。中。み。と。佐。田。兵。左。衛。門。と。を。福。き。と。母。の。上。の。盜。城

の帳本有りうすが足腰等は依田は燈籠と金御とアリシテ多モ仰田アリ
よもや山産物等とも者伊田ア奥義と家業とて諸事越前ノ作業出於藍
青、藍、緑色ハ何モ主と伊田ア販賣と益取さんと良し或時渠ノ宿ノ事アリ
船ヲ備ケガ水を多キ主と魚の骨と骨モ大の主従とぞ志アリテ伊田卧幕
主と少く大主と長地アリテ一尺餘ニ今鳥の骨齒音を地アリ三
尺計トサク主従と頭下げて甚苦カニと云々之ハ伊田見越昨^{アリ}と減却
の主従ト云々誠主と自省の事アリテゆうゆう又在山中而ト云者是因
く体國ノ事アリテ入リ大の主振立主従ト云々伊田大主ハ非ドと是ハ故弊
申ル紀生と云ば在山中くやゆく立陶起り翌朝伊田主モ主と云及大の
主振アリテ入リ海うちやと聞ハセシと善主伊田何と云々我記^{アリ}と云々シキアリ
丸山曰、さそば翁の絶妙夜叉の聲は故の声群ありわざるよ歎の声一
頻り雷鳴アリテ其聲を放張う人出るト也効くかと善ヘリ色ハ伊田云
我と底本の虫の文モ申は自認ナ源モ海のし声の聲ありし在人

あきりと妙し也勤静を是もいへど然子細は余と云々事海得ニ我ハ
體^{スイ}と吾感じあるを
一 永錄文書元和中村敵攻取及平時矢上云而下陳義敷^{タケシテ}居方多大底
加賀守兼賢一首の御詩也トメテ

居すより引放つ事なく射てこそ居て志中の村
一日凡多松原を破る際信熙が國飯盛の敵と攻らせる時退く難を以て反を許
大嶋義和の照屋舍^{テルイハ}瓦部^{スミヤシハラ}澄月殿^{スミヨウジン}と引り下歎強く志と毛色バ大
島元才^{スミヨウサ}を遁^{スミヨウ}ひかえむとお送^{スミヨウ}し奉^{スミヨウ}申^{スミヨウ}小高^{スミタカ}而^{スミ}す^{スミ}澄月殿^{スミヨウジン}の照屋

澄月の如し雲々、萬物の如きが生れり死んでらうや
とゆく自害——とまどひの愚産と久卓痴ゆくも

假想の重複とはあくども惜む多ひ有りの日。
上書テ三月既のち力葉カラの如くなりとて掲てあらわせ金人切伏セ今

是先祖こと日ひ頬ありり切と自害もとしや小川急逝と云者地あつて
よ筋筋後身も渴りゆひぢれと謂とそう後承ひまじ不死と吟て一身ハ如石
大向テ風易滅命ハ以テ朝露迎テ易消ハ内にすまを歎ヒハ爲弱
少て石火を吸物よりし多處ハ供徳寺の住持よと首を廻し提子ゆ
有テ此際は隆信を危キとのうそく恙なく引立をくる

一
黒羽田の後承母とほそ膳不無恨とある種より色バ尼子家
傍代の家人等と魂の生る者多くしが多ふ津森入道と云者ハくと推
隠人よみと我よあらて多ミ義久公晴公の先途と見異んと思ひて存する
けりがいざる者の謡言よや津森天子友心百事と云ひて是をアテ或
時端吉多所へお津森こゝとを確と腹あの津森入道ニモや一ミ覗ケル色己
が墨縫よ可め事よとぞ多想也退け我身計りゆテ度々自守の叶ひ莫久が
前と折々名就、擣げ和紙の合は紙が良き良嘴く忠良部
おおむね草竪怪の至りし袖ひうよ運ぶるよと己レ袖の左へ道よ方俊三章

や多くさきへ因よ向をば其々分明淡す鶴もかく歎くをやうとるや
その隣ニ並らば同立入りひき入道もとてひづるよ逐參し紅色顔に
て額と流々汗成袋ツ首と垂く垂くしづ何とも失人謂ひなく聲くと
退立し宿所するも陽子は而ひ行へ遣事と恐り矣

我音事所への然てうす経そよ久云之所不審と參り老後不帰と失而
目アハ御遺憾の没善可在也至千餘年後久の所先達と摩尼庵某一人にて
於焉傳育有善べきとぞひの亦よ案の外よ今日之上意と令取かれてハ
一日行時毛生キて人主面と可向大不善な因意田光毛生が慈母を子れ姫
を喰シんるも是と碎キし例は任セ明日令ニ登せ一於ニ婦人之眼病ニ瘳
自害し死の所不復ア第人への傷言と不於くお邊事へ以多よ付て對
美久六毛政不可有懷結恨又入邊が奉養の爲傍の一人も不可供養一
本の草初要とて不可造立只造次願沛と奉抽忠太翁義久公武運
至もの有からず子ぬをまひゆれた中の中水の元と仰供可仕也脚と

夙患不寧於有之す無も主君の仰四諏と蒙り既後より入道恨
愛^{ビシス}眉鬚^{レシス}隣居^{ダラフ}して今生を端人^{オチニ}と晒^{オラフ}し志未^{ミタマ}を慕^{ムカシ}
る隋^{スイ}在^モぐ^モく^モ究^ム實^ス

とあくまで平家は歴史誦経解釋にて風を浴^ハ沐浴^{スル}を脅^シ脅^{スル}とあくし
登城^{シテ}とて身^を何とかく世説ニツツ云^ヒテ後忠臣の胸中^を察^シし本^を
剣^を色^をな^ハ可^レ傷^ス君^ノ上覧^シの以^ハ人^心を^シ相^互形^フト^シ描^カハ^ス
力^{アラシカミ}前日^の以^ハ千^乗暗君^ノ暴^ハ魯^ハ傷^ス裂^ク胸^ヲの入道^ハ蒙^ム明君^之
死^ラ破^ラ傷^ラこと^も不^レ放^ハ腹^ヲ捨^ケ切^ク近^ハ刀^ヲ喉^ト割^クス^ル事^{アリ}と^シす^ル事^{アリ}と^シあ
こ^モの若^ハ二^三年^と取^ハ替^ハて刀^と奪^ハ取^ハて^ハ急^ギ立^出て^ハ
い^ふの道^筋を^自害^スとも^シゆ^ハと宣^ハを入道^のゆ^ハと^シ由^ハ縫^スと^シ繕^ハて^ハ
ゆ^ハ今^を取^ハて^ハく^ハ仕^ハて^ハ手^を出^ハけ^ハ不^レ第^ハ腰^をセ^ハう^シた^ハと^シ入道^と心^を安^く
闇^ニの^ハ體^ヲ起^ハさ^ハん^トや^ハる^シと^シ吾^ノ者^を信^じる^事の^ハ情^く
入道^ハの^ハ事^を知^ルと^シ思^ひけば可^レ、説^カちく^シ程^モ恩^育し葉^を生^ハ

後は此れ入道文子をよき香とし源氏是に通じて略子空義はひ文公遺
主は但の義事と見せば忠純諸人を揚げりとぞ

尼子家雲列馬田七年の公讐職ことし遂に没善一久

一 桃源霜臺之秀ハ天下を取のう有ヒ全種姓と名む方ナキ素揚列ナ牛生し豈
鳴ト云ハシ住シハヤーの村民ミモアリムカナシトヨヌ井川娘山の鬼沙
ツ天ト信心渴仰シテ屬ニ系船の次ヒト僅ケルガ身付思酒のより酒ミキ
川窪ト云ハシモ晴夜は煙草の火消スナシヒト丑三ツシリのるは色バ隼集の
人地ミ村里何國ナ在ト云事ト不^レ知^レ烟^レヒトシト在ナシモ^レ行山屋^{カブ}
トアシテ燈火^ホ灰^ホモ^レモ^レモ^レ急^キ體^チモ^レル色^ハ青^シの役^ハ人^ト葬^リモ
化^シ野^ノ燈^ノ焰^ノ焰^ノ立^サ外^リモ^レモ^レ有^リ永^シモ^レモ^レ吉^メモ^レ如^ク天^下
万物之萌生^{ナシ}及^シ有^リ笑^{ハシ}可^シ哀^{マシ}ト^シト^シ天^運の循環^{シラフ}暑^シ代
して四序与奪^シヒ^ト昨^リモ^レモ^レ一^年明^ルナ^シ色^ハ元^ニ葬^リの
道忘^シ祭^シモ^レモ^レ向^カだ^リ時^辰ト^シ燈^ノ火^ノ安^ヒモ^レ陶^トと^シん
今此^モモ^レ車^ノ是^シ所^ノ地^ノ所^ノ他^ノ化^シ觸^シモ^レモ^レ迎^{ハシ}火^ノ燈^ノ火^ノ迎^{ハシ}
と^シて^シ移^シよ^シる車^ノ以^テナ^シ相^シ人^ト極^シモ^レ重^シ寄^シモ^レ一^年の食^シ
タ^シま^シし^シり^ケル^ハ明^ルナ^シ自^リモ^レ年^中色^バ諸^人を^シ済^シ食^シと^シ角^シ

意^シす^シト^シ大^シナ^シ口^ノ吻^ノ可^シ潤^シ核^ヒト^シ高^シシ^シ葬^所モ^レ在^シ立^道の供^物
モ^レ外^所有^物モ^レ而^モあ^リト^シ新^年の禮^事モ^レ一^シう^シる色^ト逐^日迎^日
蜀^シ餽^シ采^シ花^の是^シモ^レ車^ノ火^ノ乾^カリ^シは^シか^シ因^シ急^シ免^シ自^リの付^事モ^レ
葬^シ不^シ火^ト求^シ而^モて^シト^シ車^ノ色^ト恒^例ト^シ一^シう^シる^シト^シモ^レ立^チ
手^シ遂^シ一^シう^シ公^事の後^シと^シひ^シモ^レ至^シき^シ

一 厄^ミ未^シの^モ神^ミニ高^シ萬^カト^シ云^シ者^モ是^シ日^暮城^ノ財^政人^モ出^シ毛利家^云ニ^シ味^方
ト^シ諸^侯別^列末^石の^城と^シ守^シモ^レト^シ諸^侯子^モ以^テ山^中鹿^ノ加^シ原^津を^シ登^シ杯^云
モ^レ者^モ既^ビ厄^ミ未^シと^シ起^シん^シと^シ應^シと^シ十^シが^シま^シと^シ神^ミ西^ノと^シ身^モト^シ引^シキ
ん^シ葉^シじ^シる^シか^シ修^シ城^ト被^シ心^モと^シ利^シて^シん^シモ^レト^シ少^シ買^シ通^シ者^モ得^シモ^レ末^石
の^城と^シし^シる^シか^シ修^シ城^ト被^シ心^モと^シ利^シて^シん^シモ^レト^シ少^シ買^シ通^シ者^モ得^シモ^レ末^石
の^城と^シし^シる^シか^シ修^シ城^ト被^{シ</}

不忘本へく是も人の形見よ等と號する。わづらし何事と一筆も也
やもあらず。又の御角もよしと可見。こと頃ヤード云リを。御角御手少
て極き山中立原からこそ想意よ思ひ色う諺ノ首の好ミ拂リモ。君とい
てうあるべきもので一筆考ヘト。祝司者モ右柄小野のモトカケウ
事てさうけ色ハ所傳急キ。立原より扇と兩人はんせけ。山中立原さて。神
西嘗もよあ。湯がりもしあきは

石上古柏少室のゆと相、すとれあらまあらじかく。
ト云主もは因好不、忘主と名をひむ故シ。やうたれても味もよ望こ
さんと。被、傍キをしげ。主とおせりをば神め乞奉。主むすぢりをば
終るほよ一味の煩と申し。

（以下尾ふぢの田長山中立原首陽久と云ふて。旗とあげるが遂に本
意とぞすして橋列。上月の件もて毛利家の兵を滅ぼす。
一條大納言兼定卿土佐の国司下にゆく。長曾我部元親いふとて
班衙と逃出しあり。一重と全く吾飴を以て碎き。天正元年。

至て隣子押て陽兵セキセキ。兼定之多力なく難盤。一毛不拔。が嫁
家あれども豊後の大友宗麟のち。送りやうがす。何者の不業。アマガ
けのひ人住みし館の前。一首の歌すとぞ書付。

一條で。形。乞。紙。食。破。を。く。ハ。御。詰。め。き。も。セ。ば。
又此の脚臺。不。を。ひ。ゆ。ど。ち。別。ナ。御。在。タ。ク。時。兼。定。之。る。角。之。ん。詠。て
傍ひこぬ。駕。な。け。モ。波。風。の。荒。き。濱。邊。を。役。ひ。と。よ。一
脚臺所の脚臺。幸。よ。

諸。た。よ。す。ま。を。ぞ。う。と。忘。れ。貞。波。御。風。の。や。き。漫。迎。と
ま。て。兼。定。卿。よ。

ゆよそへんづくしの浦の沿よるも。い。よ。神。か。ら。き。ん

今後萬葉を。吉良義経。追討の事。と云。主の。ひ。う。が。御。惣。子。優。と。遊。す

卒去一のひも

元親を董定卿と詔へて後内政卿とすと主君と作ざるを乞ふ又むか
は義殿してありゆのをいの候は推測されど此伐木あらま至りて御よ一家
ちひきせらる

○董定卿大別とすと附沙列の御度は有りる者、格と格を防ひ
樹をしろ、而の差派ゆゑもあん生を以て居るも御の事とつゝゆゑ
とて是後より、御ひる御事の基元親は多のものとさんとも此の色とさういふ
よを御子やうるを御多心情うといつて董定卿の内体奇よ感じて嘆ひ、
あらびし深州の様の要澤を候き、其の御の御の御とすとある。而も乞
年を定く空ひかんむとすりるが望みの身多、荀の色香すとえむに限る
トモ

一元親國內通見の時裏野松と云浦を重ねむ老翁と名めし元弘の方へ
つ宮中勢新親王尊良は不深きを候とづくゆ御跡を何等こと言つてられど
翁氣にけりる松陰こそづれ蹤ヲシテの意は而、御下り有りやど
有井三面篠山十日月の宮邊を傍風の音阿耳アラルをさんと聞ひ聲く
べきよ山浦を御住むともよちしゆづきと云ひ、と遙と下りてや
ゆも岩根を守るゆきのや若く、謝ひが履を以ひしとぞと
ゆ

歎を泣ひてあをなる松陰は憂矣、而隨き葦の庵とひそばせひ
て月日をもまをねるは或時宣ひくるとぬぢうす風土をりると石壁は
け色ば色き緋は大年とて守護人のいとや宮の向くと云ひん一翁の
門深青は松のまきとてきりとける。

玉川や源の萍流をあくよべぢき身以參しとと
とあん清を以けへけ玉川すのゆひるとやくわいはくとて
ち年を御西向

哀れも仰き難く、而もきち仰のへゆの萍のれの水を

とあくして大年冬おへ年とあくちとて宮と願ひ候ひしが成時
其の梢の梅元と翁とすと大年冬

時以る梅の匂ひよ君とまむ都のよ生とぞれづらん

仰ゆす年よ

あくと忘れをもる。一枚の葉のあとふき梅の香

陸凱が江南無所有聊贈一枝春と云ふと名もあらじくるも又嘗
てき復の日くし詠ひ行か時は董侯格ひとありきば門休午
嘗の上よ吹船風と云ふも告て嘗の先り流一き

宮參の出もの中すと曰へるわへ一宮の事もセリモロシ
多慰ある事無事ナリシラサ人程多く才もあり色ば今よりと筆と
よりまうきほんとと五をも活つんとの歎を活ハトシテ目立
きせずすちうけとは都下海に上らむひるさきば子年中の活ホキ
人氣松と半枯て附苦跡即くうちほくとせん年うを痛おーく
翁と古く多事一めうりうと見て目立マハテ活フリ色は元親とも
トヲ從逐の人々とお見深と流一きる

一尼子家の侍との戦ひて國別私部の城と攻じてベーと吉川小高
の西將押馬をもとと仕事とつけ速ろとあぐ攻ら早うされ其城中
強く攻きよしと依て大攻りと見て陸士萬の唯丈丈と博シお産と目立
トヲ從逐の人々とお見深と流一きる

遂に之の後長月半の年を経ばれ一時村明永昭日を志すを取る事
は獨り醒て松柏を仕立候のれと表へて之を承り象手場より陣主
心と度りて攻城の意をもとと仕事とつけ速ろとあぐ攻ら早うされ其城
塔へ萬を構の面と見けば久仍承くのゆゑ陣主に之をゆへと蜀を以
て之を何事と見けば久仍承くのゆゑ陣主に之をゆへと蜀を以
けたされれば山の丹葉をとてひそん敵へと牛く長の錦と口情く
仰いだるわと聞く西將の脚深處に入を謀すをもの面目とこそ極めて
久仍と見ゆる事と後と聞べて伊勢某と牛く長と呼す市正
と云ひばなる事一時をもとと號りて是と呼べく時子市正
久仍

小學もとくつまむをも味あう耶

身もとくつまむと誰もふは服ぬせよと云ひて自未はなしとある事
人多とて登舟の船殊す城中勝利のふと合ひたまはや一時仕

員さんハ口傷ひんとて取く貨んと云者と写ルリ色は元基喬川兵部を捕
其逃と石と海安道は練達兵事く出候はき薦列武士を攻撃の業のみで
荒夷の如しなど云ひきんをは情ゆましと宣ひきば是もいと申すて至期の下
うつ多御左輔春経

阿多の酒しよあらわ朝彦

と仰うるをば備人をもて方正、毫白、協中、福利の意と含ムと見舞
が振向ふる爲れ感應すを候。没處の城を放シテ大よ廻じるを後始遂
は居去一けりとぞ

一將軍義昭卿をは次第の信長とせんと思ひ立候へる。遂に門卒をと遂
路より却る信長の爲よ都と爲さひとぞと漆泊一すへぐるが信ちの義
毛かくも詠しげ

しまひいふすありごとの社の手枝の源とうき身一の主不あき
夫レよう門戸の濱とほそく和氣の浦とあそむ

たゞうやく方と何小よりの物ア源のうき身のがきく
を後義利アリ候ハ毛利家と附れがを信者追討の本とモ仰くは爲がける
一毛利家傳、國事方比等と攻名附城中より友樹と云盲人の首、さるが城取
て居んとある時也と實走りおもむきのよく殺すわざとめづりをも本
來寄奉地主を討て、後半モ元能と見之ば松生をやで半の枝
並御と候く是とどもうりを育ニ

晴きよう陽き道すと迷ひしたるの日月乃日暮りなけり

一月壬午日候よ三村を観の出候と毛利家と用そ群山危急と及
不よ遠一と京都の在人吉江私すりえ親の哀情と受テ検校
ぬす甫一と改名をしが吉江郡主有すくねむの草をすす食其食一
者何ぞ節義と云ふんと無ひとく松生すらり色を元親深くも
志を廢じしるが故去志へ是近も候シく胸へーと立ち去れ更テ不周
元親ハソリモーと助けをもよとひ潜るよ幾分一とさばあるをと

是あして解よ切りめべく耳傍アヤツとて有へ今ま不^ル通レ而しとひ源石好
一^ト遙かきは辞せまべ一^ト惜アヤシ一^トも

松山^{マツヤマ}海^{シマ}うんとれと葉の轟^{クラク}落すと水のあき色^{アキコロ}身^{ヒメ}
と緒^{シナ}今一^度都^{ミチ}まと云立文字の中^{ナカ}もや、首^{ヒゲ}とあて^{アゲ}たを假^{マサニ}
元親^{ハラタケ}象人^{カブト}のちの^{シテ}御^{マサニ}一^トまだ城^{シマニ}を立^{タス}。ガタ^{シマ}と^{シマ}今いくべき
こと不思^シりきは松山^{マツヤマ}入^リ考^スる誠^{モト}の许^{ハシマ}人^{ヒト}き^シを元親^{ハラタケ}下^{ワタシ}檢
使^{シマニ}と獨^{シマニ}べし自害^{シマニ}せんと云^{ハシマ}りきは案尾^{シマテ}三^ミ驚^{ハシマ}就正^{シマニ}の^{シマ}を未^{シマ}
御^{マサニ}免^{シマニ}教^{シマニ}し松蓮^{シマツルイ}章^{シマヨウ}と云^{ハシマ}は案尾^{シマテ}三^ミ驚^{ハシマ}就正^{シマニ}の^{シマ}を未^{シマ}
をと^{シマ}う^{シマ}元親^{ハラタケ}を後^{シマニ}産^{シマス}る^{シマ}と云^{ハシマ}り^{シマ}就正^{シマニ}の^{シマ}を未^{シマ}
就正^{シマニ}の^{シマ}を未^{シマ}朋友^{シマツ}の^{シマ}を^{シマ}り^{シマ}き^シ易^{シマ}き^シ方^{シマ}の事^{シマ}も未^{シマ}た^{シマ}ひ^{シマ}一筆^{シマ}
書^{シマ}て鴉^{シマ}り^{シマ}り^{シマ}を料紙^{シマ}硯^{シマ}持^{シマ}人^{シマ}を親^{ハラタケ}と^{シマ}し^{シマ}後^{シマニ}案尾^{シマテ}三^ミ驚^{ハシマ}不^{シマ}
う^{シマ}形^{シマ}六^{シマ}年^{シマ}書^{シマ}て^{シマ}そ^{シマ}逃^{シマ}れ^{シマ}ひ^{シマ}の^{シマ}と^{シマ}ある^{シマ}を後^{シマニ}案尾^{シマテ}三^ミ驚^{ハシマ}不^{シマ}
一^{シマ}筆^{シマ}一^{シマ}ひ^{シマ}り^{シマ}て^{シマ}そ^{シマ}と^{シマ}思^{シマ}と^{シマ}想^{シマ}う^{シマ}と^{シマ}徳^{シマ}又細川^{シマタケル}益^{シマ}草^{シマ}文^{シマ}魚^{シマ}藻^{シマ}の

親^{ハラタケ}みあきばと一首と送^{シマス}

ひとと^{シマ}都^{ミチ}の月^{シマ}と^{シマ}す^{シマ}の雲^{シマ}思^{シマ}ふ
仰^{シマ}田法平^ハ未^{シマ}得^{シマ}對^{シマ}向^{シマ}と^{シマ}て黒頭^{シマ}猪^{シマ}子^{シマ}毛^{シマ}銀^{シマ}歎^{シマ}立^{シマ}しゆ^{シマ}
立^{シマ}しゆ^{シマ}のつて^{シマ}の^{シマ}ゆ^{シマ}て後^{シマニ}け世^{シマ}の^{シマ}美^{シマ}の^{シマ}物^{シマ}と^{シマ}う^{シマ}り^{シマ}
大庭^{シマ}留^{シマ}守^{シマ}ゆ^{シマ}湯^{シマ}情^{シマ}と^{シマ}憂^{シマ}を^{シマ}し^{シマ}人の^{シマ}も^{シマ}と^{シマ}
跡^{シマ}一^{シマ}盡^{シマ}す^{シマ}無^{シマ}叶^{シマ}の^{シマ}路^{シマ}と^{シマ}衰^{シマ}れ^{シマ}と^{シマ}老^{シマ}を^{シマ}と^{シマ}
さて就^{シマ}季^{シマ}向^{シマ}て去^{シマ}立^{シマ}可^シ切^{シマ}放^{シマ}立^{シマ}可^シし位^{シマ}牌^{シマ}と^{シマ}事^{シマ}一^トが^{シマ}付^{シマ}
只^{シマ}一^トれ^{シマ}お^{シマ}ほ^{シマ}立^{シマ}可^シ道^{シマ}と^{シマ}す^{シマ}車^{シマ}の^{シマ}真^{シマ}と^{シマ}位^{シマ}
と^{シマ}緑^{シマ}と^{シマ}薺^{シマ}と^{シマ}鳩^{シマ}と^{シマ}八^{シマ}雲^{シマ}集^{シマ}の^{シマ}入^{シマ}立^{シマ}し^{シマ}ざ^{シマ}き^{シマ}瓦^{シマ}辭^{シマ}
を^{シマ}事^{シマ}後^{シマニ}の^{シマ}一^ト事^{シマ}も^{シマ}今^{シマ}一^ト事^{シマ}立^{シマ}は^{シマ}ん^{シマ}と^{シマ}
人^{シマ}と^{シマ}も^{シマ}と^{シマ}假^{シマ}多^シ經^{シマ}や^{シマ}志^{シマ}の^{シマ}病^{シマ}消^{シマ}て^{シマ}歸^{シマ}る^{シマ}車^{シマ}の^{シマ}零^{シマ}
三^{シマ}村^{シマ}修^{シマ}理^{シマ}亮^{シマ}源^{シマ}元^{シマ}親^{シマ}一^{シマ}瞬^{シマ}源^{シマ}樹^{シマ}居^{シマ}士^{シマ}と^{シマ}書^{シマ}收^{シマ}り^{シマ}と^{シマ}辭^{シマ}
名^{シマ}は^{シマ}外^{シマ}親^{シマ}心^{シマ}首^{シマ}手^{シマ}と^{シマ}降^{シマ}來^{シマ}の^{シマ}車^{シマ}陳^{シマ}つ^{シマ}送^{シマ}る

比二三村あると、毛利旗下の者ぞと信長の軍勢は若狭しやと度する
者をうそりび

城

一信長一向宗と合戦の時毛利家と大坂城中へ無事と送らざるがを以て
さよ兒玉内益充多あゆの浦は綱と繫あくに波の洋船と泊多キ野
秋の夜闇よゆく曉けを星宿の尾より傍と高砂の松の風も高流も
羨む差次櫛枕と砂枕と守り往事の事と熟思しりるが極温が接
杯不嘆曰、男子不能流芳百世、當遺萬年。と云一派号ひ生て
者と又やく嘆名と云事せよ況へども之ひ故に相生の松と伐リて
松葉の薪とさせば出松を貫之と住の江のねと相生の松とあら
一松の名すと以て雅年たりて一年。故所大明神とさこそ愼也云
庵きと人云本にしが景と身經なく為死しるゝを若し人作ニ不
善、得顯若者人不害天災誅之と云先哲の戒示誠哉炳焉
一信長卒頃東を攻めくる時至備中守天王寺の向山と一揆の為ま進ましを
往古のあり返しけど誰が仕業かは考とある井の名すと云う

武家の飯くちづけの甲斐となく仕合として引や志の縄
是ハ原の吉と毛塙を高めと称し多キ仍に折下み一と毛後至高に財の
不善を取立めや枕たるを傷して遂に残元一

一尼子勝久播磨上月の娘よなと毛利家と是と攻めず信長の後倍
として相索義弟秀吉と大勝してトさきるが秀吉今後中國勢と初ての
觀を以て一毛付とほーく見ひく祈禱などと毛るが上陣の本席部を
連寄の鳥羽から發向を聖護院宮

常盤本とゆつを足する若手の代
夕かけ 洗き 夏少の 義
村雨の音しゆきとめ 日出子
道澄

毛利家吉と高は諸有り毛利後倍を退き高らきるが信と城邊不善て勝久の自害
にて多セら色々は財と多く厄みがことくとひ果て山中鹿之助と名とて
忠義の士不と漏泊してがるが山中を以て毛利家の名と誇セら色である

一荒木村重慶毛利かよ志と毛利かよ志と毛利かよ志と毛利かよ志と毛利かよ志

利家との戦ひごとくよしゑと西の毛利を例の義重と一すらも

幕末から構ての方へ押すらしく射ると射らきひ引ひを

一月の時神の元通、妻の夫とまほが自害せんとあらゆるを
元通大よ割て云ふハ我最期もとゆと眞したうなじせよともへり
は情き事さきをと自身の志、やむとと思ひ故に唯瓦法所をかして吾が
後世を承つてはうりて或そ凍り或へ涙と流して持てる刀と集ひ
たまへと身を城下を出し身へ腹と切くらる斯て女房を邊へる
うち何ひ不ま危ともすび傍と清じて文武とまち縁の夢と別るよ
そ古へき振る聲の肩と事代森びよのハリ色とてと鳥羽
音と潤と一日よしがくかと弘讀經不怠ミラ明書ミラ夫の善
提とまくらむる多才と化が便ぐ重きあうよ松尾ヤド句當と者わ良
多、此尾ミタ計よ落ひありきは尾ミタとて、寧句書ヤドの合モロひのれき
て芳語などと心と慰めるが信長卿の重シテよ不破將監モロと
詠うく

勾当とおはの有りば威にありて渴のとてひくよ西ケリ。毎度よむひ
ゑびやくと佛ある声の弟ウルフ。うすへるば詠ハシメんとよひ度モロり
極の陽ヒカリのみくらま人の危經とすよ持て脇鳥ヨリカラのあを
詠うく

月の波ととよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよとよと

と鶴シロこりそいとちうそくよ落雲カクの入道の宮など又唐の武氏の危
などとめうこせはとあめと目とせぬる居リしがんとこそとがむと
心ハくへ立物シテしがをそぞう彼ノ面貌の身よ立深タマシキひとひそほ陽ヒカリ
ぬく余ヒ消シテすとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとく
べき中とよひとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとくよとく
我無よか程遠アツひつそ彼カミよ一重シテの樊カニと猪シバひととひとくちよシヨし
至シテすと叶シテぬわくシテぶ連シテと忽ハシメ死シテの余シテとくよと刺殺シヨし彼カミ

女と我の御子を出でたるを因トモサシと爲り可ば勾當と今度我身を
おもんとおとく又假ノ尼とつて自そんと出でて今度の御文
録りとおきば將監大は怪い事の海の津川を是の徑をうりて
海士の役を浦の初鷹をうとるゝ如クノ被をも身
勾當をも御と將監をもひ尼の件へ行々うが我身をも對面へも
志めの事せよ今度の事はのし序らぬ事の別とおもひ候とお執事
人差し支は別と又人を別る事を以て御多き事とくと進みけ
きも尼沙と不敵ニハ何事不思議をも我身おもとくと女道を可字
志を令せば事と截しもと芳らじゆとがく愁事に沙してこそ形
とも智へ法の通入侍と多き事す宣ふ勾當と至極の生理すちもなくね監
とが入へ有り候よ告テあれどお監をもせずて好シく今度の事も
山脅の仰よ歎^{ヨリ}とと歎へき也とさうりよ云うと世危障^{ヨリ}を離て
アラムハ被と葛のち丈の監^ハ鏡の神とつらしとやそんとよみーと
ちよかよ経せらうとお一ぱり沙のつん端^{フジロ}ともゆうことをもひて
今度可遺^ハおのひやうをばほくも當あとゆそ先^キよ宣ひーと思つて
さる年^モかされどその中の名聞を漸^ハすりん心ひ色バとし終業
移うれいのよしやさむ饒^ハのりもの^ハおひぢぢらく中^ハなるね共
の立派ひつん事^モとおれぬ事^モ中^ハなるね共^モとおま
者^モ思ひれんとおしき今度の事とおとと勾當殿の事の役を任セ
任^ハベテ^ルお夫の事^モ千那^ハ除距徑と浦^トが^シリ^シ浦^ハ見^シ
ぬ船セレ後^ハバ^シゆ^シは^シひゆひと計候く作^ハなして云ことわ^シく^シく
火^モと^シしやうと^シて^シ後^ハル^シの如^シ事^モま^ハい^シき測^シ身^モ沈^シん^シを
火^モと^シしやうと^シて^シ後^ハル^シの如^シ事^モま^ハい^シき測^シ身^モ沈^シん^シを
唱^ハ日^ヒおとまし免通の像^モ向^ハ観^シり^シセ^シ御^ミ御^ミの^シよ

海士の位も浦の初鷹もづからとるゝ如き、彼もも
向嵩はをめぐらし將監とまぢか尼の件、ひゞかく我身をへて對面す
志がくの事なる今をさのみ序らぬ夫の別と當ててはゆと在執汝
へえゆ夫は別と又人下列るをせり例へ多き事ふとくくと運りけ
きも尼沙と不敵ニハ何事不思議をも我身取ててとも女の方を可申
志を令女が再び截しむと芳らじねとがく愁事ゆづれしきとこと形す
とも夢へ法の透く丈情ゆとく丈の事す寧か向嵩反こそ恨うし
也と衣司被カツ伏とアリキば向嵩と至極の反理ハシスとあなくね監
とほ入レ有り侍よ告ケテあれどね監をとめて好シく今をうかべん
久の仰キテと云ひよ云ひと世危障セイジヤウをと離て

と書て舍りと立て西川より手を拂ひ血アツヒ一滴をこぼす事無

思ひ川渡む水肩ミズカスと浮うる体とゆ法の舟よつとましとまづん

とあく乳ムツトよしうらばをたまと義綱て水中不身と度すうる例シテ少半也

一寫津義久佐東三位入道義じ色シロコニ三位戰勇ミツイシヨウ今多戸之郷の店舗
多鶴タツケ萬て天正テンジ廿二月廿八日大友家鱗タケスと移て一豊後ヒラフをもたらさむ家鱗

則田原紹忍タハラシロクル翁シロシを含めて三位入道ミツイシヨウに助力スルがむけ行者ノハシ燒る

今多戸もと前モトマサとめりて三位役田ミツエキタの所と這シテゆうりう

三位役田を多田原翁タハラシロシ高掌者コウザンザのをも我今一偶居ハシタと六多見シシタ

がベーチさんと懲憤ヒラシの心を紀し又て豊後ヒラフの國クニと本都ヒメドと近江オニギと卒去せらる

毛利娘モリナガと南條元續ミツヅと佐列シラタケを合歎シテの時

此元統の親文宗勝ミツシマツヨシ安政アキラケの武田家の侍スル後毛利主ミツチ不ふ能アシタ身寄シテ以

放し毛利家ミツチの忠義チヨウイ沈没シムツクし死去シモリの後シテ毛利元ミツチと企シテる

毛利家の身方ミツチ菊地肥タケチあ寺アシタ子チ毛利元ミツチ十三年の時ヒメちぬねねるあがアガと之

どとの童ワラワいそがる勧アシタと可シ御ミ品モノ、か承シテる首シロとこそとよへつゝあ杯

きそ人更アシタ不信アシタ古道アシタをと無アシタむと今日アシタを然アシタと又アシタ離れアシタ伊豆アシタ小荒アシタと云アシタ

上一重アシタ難アシタるが南條ミツヅが郎等ミツチ一傳アシタ新アシタ壽アシタと云アシタ者アシタと討アシタて首シロと取アシタ佐助アシタは

是アシタと見アシタうやアシタとつアシタも小荒アシタちよ廢アシタ井アシタ古道アシタ吉十三年アシタ古今アシタ十五年アシタ三季アシタを

私アシタ名アシタ捕アシタをアシタした人アシタ又アシタ不信アシタ乞アシタと仰アシタは

疑アシタと嘆アシタさんアシタ為アシタ也アシタと彼アシタ首シロと深アシタくアシタし郎ミツチ著アシタおも日アシタ東アシタの夢アシタを安

不良部アシタ入江アシタ大藏アシタ名アシタを因アシタすあらわアシタととくの廣アシタらよ被アシタ木アシタの

也アシタうふもととひ毎アシタ日アシタ夜アシタ庄原アシタいふよ是アシタ事アシタ多アシタ今自アシタ身アシタを捕アシタ一アシタ日アシタと

入江アシタ义肥アシタ系アシタ名アシタと別アシタの萬アシタりにあをアシタども名アシタと名アシタをもとまじと歲アシタとうむ也

是アシタと嘆アシタさんアシタ也アシタ又アシタ不從アシタとてよろ若アシタの可アシタ首シロやアシタとちアシタ二人アシタかアシタと

矣アシタとたぶんアシタ首シロとあさきよと云アシタた直隣アシタし持アシタの首シロ挂アシタキアシタと西アシタ人の

義アシタ拠アシタつけ毛アシタ足アシタ一アシタ糸アシタ物アシタ郎アシタと名アシタすととや代アシタセ首シロ而アシタ化人アシタハ

佑田アシタをゆくアシタも人アシタを恩アシタするアシタよ云アシタごちアシタ一日アシタの秋アシタ夜アシタ也アシタと之アシタ不アシタ首シロと

糊ヒシいふる糊ヒシいふるの棺桶カントクを二人、眉間メイモンと二ツ切鄧ニツカツと後アフタと是背シテの
圓蓋カスを作ハケけよ。三升ミツボウの左刃シナヘ二寸拔ハサハシ其ヒケ破ハバク。腰ヒダくまうり。安奈アス
入ハシハ若き者カノコのかる志モリと感シテスモ言ハシフ。ヒ乞ハシト戯言ハシリトタキ。ば今渠カレ。詫
の荒ハラらふかす。心ハコとなくねハシとち道シマツ。今日の由ヒ武界ムゲイ。之シテ既ハシト。云ハシ。以ハシ來カミの
未ハシ有ハシもらひ。往ハシい。行ハシは。事ハシセ。也ハシ。戯言ハシリトタキ。ば今渠カレ。詫
戯言ハシ參ハシ。其ヒの太ヒ筋ヒと可ハシ。香ハシ餌エサ。もて。吾ハシも。り。見ハシ。餌エサ。と。す。而ハシ。之シテ。公望コウヤウ。之シテ。ハ
御ハシ軍カントクハ。二ニ人の。危功ハシ。ヘ。ナリ。ト。言ハシ。け。ナ。直ハシ。詫ハシ。ノ。腹ハシ。グ。ヘ。左ハシ。公望コウヤウ。之シテ。ハ
因ハシ。大師オウジ。と。沟ハシ。兩ツ人の。戯ハシ。よ。モ。人ハシ。威ハシ。と。詫ハシ。と。咄ハシ。別ハシ。セ。モ。ト
人ハシ。是ハシ。と。少ハシ。て。ち。の。小式ハシ。内ハシ。備ハシ。大。江。山。生。命。と。詫ハシ。と。説ハシ。と。難ハシ。と。定頼カタタケ。之シテ
よ。暗ハシ。け。今。の。元。直。を。佐。田。と。傳。ひ。く。嘲ハシ。と。解。く。東。多。客。色。婉。城。する。女
の。放。ひ。し。发。鳴。の。邊。毛。多。武。右。光。燭。する。兵。の。齋。軍。門。の。業。し。事。ハ。發。れ
ど。も。心。を。す。と。今。と。こ。が。き。ざ。く。と。佳。名。隣。あ。と。震。動。ひ。
一松原橋。守。盛。重。或。人。の。問。よ。答。え。を。操。して。敵。可。作。引。と。察。し。華。て

主謀ハシ。を。ち。軍。一。軍法。の大。解。す。不。能。以。事。御。者。ハ。不。全。馬。之。情。と
ゆ。も。脣。歎。陳。の。ほ。氣。有。と。雖。欲。と。創。す。の。理。脣。聲。バ。水。と。呑。て。冷。燐。と
効。る。如。く。對。兵。敵。依。其。時。轉。化。ち。軍。よ。し。今。任。に。や。如。ハ。軍。餅。
充。飢。主。と。也。無法。の。子。章。萬。有。在。致。敵。不。致。敵。欲。知。其。理。諸。々。の
無。害。を。掌。傳。して。以。心。傳。ひ。の。ゆ。不。至。不。可。得。敵。行。と。發。ケ。ぞ。君。モ。機。と。察
一。そ。新。を。敵。と。那。軍。主。參。家。の。主。要。也。不。遂。問。仁。不。問。有。言。不。問。益
言。也。尊。良。久。又。不。遂。手。振。葦。束。末。問。世。尊。一。日。且。道。某。甲。也
中。の。葦。束。並。も。也。是。沾。耶。世。尊。遂。茲。門。闇。云。備。道。我。出。耶。入。耶
不。備。葦。束。也。復。之。設。之。也。不。見。敵。中。不。非。
拂。致。款。如。此。也。も。あ。り。也。有。備。ハ。俗。款。設。之。也。不。見。敵。中。不。非。
多。軍。多。主。討。主。機。操。は。依。系。よ。して。豫。か。く。と。も。ち。が。り。也。之。多。大。内。家。の
軍。法。器。水。の。陣。と。云。軍。以。掌。得。一。之。と。答。へ。され。も。官。人。主。薦。水。の。陳。

多ひよと聞るわを盛重元春吉門のひよ仍て坐仕一な

一戸次道夢と秋月程實と合歎の時秋月が郎等萬葉翁親氏とあはせ軍の者衆十賜^舊を斬しけど十時松原守と馬守ておと毛馬上を坐り組兩馬がちよ勤^トめらう親氏十時と而て押^ハ首と極んとする所十時即ち地を坐て親氏と二刀利を十時押^ハ首と坐る事あふ矣かしも親氏之又井田^トの物親之て我子討^シくと坐て坐よ始^ハての親氏と葬^リうすまよひと

准^シ此の事と是を道す運ひゆく後^シの世思^シを山の邊の日と確て伝擅^{メシ}の在^シて不^可合歎の首^ヲと云碑^モ進^スて討死^セり五倫^モと愛情^モ不^可と^シと云ふ事^モ遷^シじ候^フと云ふ事^モ王彪^{ヒョウ}と誠^トの懷^{オモヒ}退^シ之^ジ西^モ在^ル吾眼^{マタ}。性古今^{コドク}同^シむ理^リ甚^キは親之心の内^モい^シけり。やと^シる人^モ人^モ痛^ム人の涙^モ袂^{カミ}を沾^シさぬ^ハ行^ハず。もと^シ一吉川式^シ少輔^シ往家^シ鳥取^シの鷹^モ自害^シの時^モ是^モ方^モ兼^シ、退^シる。状

よしとく

今夏於^シ因^シ鳥取京勢^ヲ矢^之衝^シ猛^シ勢^ヲ引^シ受^テ代^シ詔^草遂^シ自殺^シ事^モ爲^シ後^代之名^シ此^モ有^趣於^シ天下^モ門^ノ被^シ宿^{不^可}希^シ以^シ忍^耐謹^言

十月廿四日

御禁篠原家

吉門式^シ少輔^シ往家

壬辰秋吉^シ候後^シと^シ塙尾一柳本高^シ色^ハ式^シ少輔^シと^シ自害^シ事^モとも一人玉^シの才^ノ力^ナ極^シて中^モし^シ毫^シ余^シと^シて日^シ精^シ至^シま^シる^シ事^モよ^リわ^シす^シ也^シ仕^シ模^シし^シび^シよ^リて是^モ学^シば^シ業^ハ業^ハ有^シむ^シも

ま^シ失^シの先^シ彼^ノる^シ極^シか^シみ^シキ^シの^シを^シ乞^フと^シ含^シて^シて^シ辞^シ世^ノ事^モト^シ

其^ノ失^シの先^シ彼^ノる^シ極^シか^シみ^シキ^シの^シを^シ乞^フと^シ含^シて^シて^シ辞^シ世^ノ事^モト^シ

と^シ公^シ声^シの^シ腹^十文^シ高^シ捨^シ切^シて^シ西^シと^シ寛^シて^シ首^シの^シべ^シ能^シす^シと^シと^シ相^シ傳^シの^シキ^シの^シ首^シを^シば^シ目^シ暗^シ消^シ

てかゝるとやせまうりき、經家を討チツトと弱ハリる意をとなへる麻者マシナがれる
日と夜色、二の丸がよて湖カモガワと首ヒゲとあ並ハタハタしりう松マツ前マツノを立タムて
送ハシメテくるよ秀吉と義姫と義士ヨシヒサが、邊シダの城と後ハシメテらきり

秀吉鳥取の城とかこんづ、教日攻シキヒアサシを中シタくめ。京急とちのり色ハラタケ、
城と湯ヨシとひじよ極ハシメテしよ秀吉城ヨシヒサシタケを築シタケル。如シテの士四人自害シテし、外シタは悉く
物モノをすぐと、ゆくと、城主ヨシヒサシタケを殺シタケル。又、織田捕シタケル。と、不肖シテ不才シテの身カラ、代シテほり、
太將タケシマの名カラと、之シテは、城主ヨシヒサシタケを殺シタケル。遂シテ自害シテ。今、
又、秀吉の人の事カラ、自シテ有シ害シ、一ヒタチとつま、添シテ參シテむる御ミコトの有シ害シ、事カラ也シ。

一天正七年荒木村重アバキタケミツが桶谷ハチヤと、松列マツリ在國シテの城と、城田勢重シタケミツと、麻因マインで攻
城シテ。是シテは既シテは城抱シタケル、難く村重城と、危うき處ハザ石シロイシ、矢ヤ、弓クサ傷シテし、人ヒトを色シテ、敵シテの雲
車クラウドを作シテ、並シテて陣屋ジンヤのあリと、木キを、矢ヤを、火ヒを、刀タケを、手ハンドを、五方
北邊ヒガシ遠ヒツキ矢ヤ、佩副ハサシ五人張ハシナの郡ムラ重タケミツ、後ハシメテ、擎トリシタ、儀室ウツボ、侍シテりつて、宣ハシメテと
吃ハシメテと、尼ナニワを、秋天ハサツタチ、勝ハシメテと、慘淡ハシメテと、字シテと、佗ハシメテ出シテの音シテの、や明ハシメテ、

又シテ、又シテ諸陣ハシメテの松野マツノと窓ハシメテ、用シテ心ハシメテ、そシテ東シタカ、波ハシメテ、もシテおシテ、
もあり、又シテ或ハシメテ小庄シヤウヂヤウよシテ人生シテ、如シテ、輕塵スカ、鷹草スカ、
さシテあらめせシテ、重シテ、や、訓シテ、や、とシテ江シテと、訓シテ、河舟シテと、とシテ、重シテ、の、浪シテ、櫻シテ、
世シテの、夏シテと、天シテ、一ヒタチと、四シテと、化シテ、之シテの、理シテ、飯シテ、の、筋シテ、思シテ、いシテ、
或シテ、村重タケミツと、坐シテ、神シテと、沿シテ、し、さ、色シテ、は、村重タケミツと、日シテ、机シテ、の、道シテと、櫻シテ、
色シテ、且シテ、是シテ、櫻シテの、積シテ、被シテ、と、あ、と、て、下シテ、江シテ、一ヒタチ、番シテ、の、波シテ、と、坐シテ、色シテ、
後ハシメテ、の、話シテ、し、る、と、岐シテ、格シテ、子シテ、通シテ、り、櫻シテ、の、ひ、鳥シテ、し、け、一ヒタチ、杯シテ、ち、る、と、そ、
か、か、か、か、櫻シテ、の、波シテ、と、坐シテ、村重タケミツと、あ、ら、も、あ、り、り、

一天正八年六月十七日播列ハシメテ三木ミクニ城主別所ハシメテ少シテ郎シテ長治シテの諸士シテの命シテと、教シテる、
と、乞シテひ、く、を、身シテ、自シテ、害シテ、し、り、と、舞シテ、

二十三年イニシ 長治

諸人の命シテよ、ゆう、盡シテ、の、身シテ、惜シテ、と、消シテ、と、消シテ、と、ぞ、うん

命シテと、何シテ、惜シテ、と、身シテ、

二十一年イニシ 長治合ハシメテ 友シテ

長治室

諸子の消息をうなづき、あれ後をもつてある。せん

友之室

わしがよ同じ蓮の花のと消ゆる癌の花の所かと

長治叙文吉親室

元の山道と迷ひし里へと我身ともく河東の室

長治家へ活忠

君はくじらに身の命にうち跋りて甲斐の所せも
一箇中國を私の城と水をすすめしとてにらむ燈と葦あそ河水とやまの色
數日攻をせども城守ゆ一と勤々常夜行く漏石の香をも攻めんぞとて
くるさきえぬまを參報して没落カツツあぐく先へおれど始主活水長治の家
活諸士の命と代へ自害し和暉カツツあくは香吉の陣アキシド色巴昂才を
祥喜有るよ依く家活の舍元月清入道故育て活多の家末近ひも

善と處人聖殿僧衆三千人を家活り供へて自害スルとて小船の棹刺
城とあく御陣アシカニこざめりる是や弘誓の舟よ慈惠の風と受スル先
此アシカニとゆく瑞羅の廳エシラよ慈くらむとアシカニと衰スルし船底シテ秀吉
本陣直くゆりきば家活スルとて一禮スルとて最期の一曲カナタ美れ
刀と槍アサシと矢をさしと活げスルあと揚スル。川舟アシカニとて生氣の活スル
浮世の夢アシカニと見るはしの聲アシカニが身アシカニと謳スル声の下う腹十
文字アシカニ櫻サクラ切りと入道月活スルと見矣。道の邊アシカニの匂アシカニ活スル、柳カキツバタ歌カタシメ
のせの舟アシカニと上アシカニをも思アシカニうかると声笑アシカニく謡スルひつ向く復スルと切スルる
木舟アシカニ舟アシカニとつとて吾アシカニ從來水音アシカニ組練せスルととを尉アシカニ下アシカニ船アシカニ頭アシカニ
よびの船アシカニと消スルと半アシカニとゆし諒アシカニ智アシカニ後接アシカニ切スルと伏スルる船方アシカニ
あるととくとくある大別の者アシカニと風流アシカニを重スルあしはせりと

不休あり

計利家より高松後若とて高島小島の西將院より張り出さるは小勢な
事無事よ於て主君生害の告げりし事からせも彼しよと是よと和賀を以て
意せり信長の夜、とぞを押忍へとそと安国寺を使ひて叶ふ云入らせるが
て清水を切腹させ奉る事無事元氣に陸奈竹と卒日心有て泣くべしゆへられ
あ將母とて志へらく名争ひてナリさりとハ今秀吉の軍勢を知る所
倍やうすに信長直日か陳ことへて勝利ゆきと有車一件と申しゆく
手和とちの事無害しゆの多し清水と教んぬよお張りし事あると申し
まけをもすがて秀吉既至よ候れば富源を切腹といふ和賀の身
きは痛快すと申すがて則ち五つと西ねりと申の事と述ぶ秀吉ハ東南
比東庄内と申信長生害の故ナラタベされど由と申ち事じと申宗
寺玉程に引あ物して是非と和賀の假れに十さきよ色もあ多めは唯一羊と宗
中より秀吉の所存西川の恩言重く信りとて家法熟くゆてえと涙と
をもと爲し城の名出陸兼極りの事も又世子ゆくびと不逞してあ隊の備後
薩摩の者五人三人討をあし候てすと和平の乞ひをもて西邊く某が為な和賀の
令頗るきりものとて城を攻めし大なるかく見と水より一舟より上るを
忠志とつゝくさうへと吾と自害して死と若年すと身すりあを忠ハ一旦
中国の危とと核へ居て百姓を逼迫する刀兵の蹟すかんよとれど御ノ子と
いと両ねば早仰仰許客ひときめいとせん惟ちと申す自害可仕ゆと云け
色は秀吉也ゆとせばとやせきと秀吉と義弟おは是よつけと毛利
家より政通とを要請く差あき士とをすと過涉主と士卒とと又思矣

おしと大よ國体をうくる角て家治有害あうされど秀吉平上治して明智
と討へて浦と列柳をうる時よ至りて毛利家へ使者と申し主君生害のを
云送らるされど毛利家事と申て追討とぞうけをば秀吉つゞな
一毛利家の怨念信臣守信重が郎等は木落松郷而信重と云者有りガラ人よ
腸を戦争血氣の男ありうるが如きを酒とめにて醉狂し極りて貧しきを
主の信重からして山城西益とて妙室と算ひに至り酒ヲ嗜む者を以
推入道と云者為犯しるが如人地獄より幽靈とぞりて連ひ詫々杯と
人云ひて信重と云ひてはひて面かへやとひりん柳の蔭をすとてゆと
鷺のねと集うて足の筋よ被部よ丹と塗れよ斗よ極樂寺とちよのと長老
も傳して居うちる後ひ落とて臥と胸と脚と入りて長老をとてとてとてとて
尺有幅の大山伏れ石よ六羽翼六生ひひよを換枚とづきてつ立とてよ脚
内辺西方を日の入方と申しゆが有よ誠ぞと仰得足よやうてて至りしかる
るす極樂寺ちよびつうべきと十万傷兵の死よ在と宣ひ一々のと仰ゆ
ゆきと見えよとあひと急ぐとしてどうも老翁の長病と侵れし事なれば

仰つて、御と申しまし弘誓の舟れ迎、やまとと御居、と申ど舟敷ども見え
ば、左右して遂に近く船よ、遙よ周廻して今ハ大天杓とんて、唯心の海云
己身の強化と十方億土のをきと不尋、一成佛座の有ると申りて
捷徑、うる示しとて不作して迂廻する十方億土を宣ひ、くる風、徒り車よ
訛色、車と當せし事よ又船の柳岸よ、講法のへ、成仏也、人と詠
詠て、ども弥陀の接取は、五度十恩の人ちうた接取不捨の孔力よ、修り
成佛也と教へ、ほむきて借使夜盜海賊ともううて、一も弥陀佛即
滅無量罪す色ば死すを脚下す強尼の年迎よ、成仏也と思ひ、年よ延
の集、コトなどせ、はま、常よ名もと唱へ、極よ來世を一定成佛とこそ考へ
し、生氣の自業自果とがく、焰囉羅の呵責とある苦、何許ぞや
是毛、沙門の如、説ふ依て作し惡業を乞ひ乞業者、罪科のをし、輪
廻の鷹よ至て我ヶ科、ことよりて延、辛作を、後引せんえどや
毛坊の毛坊長老と引立のゆと長老大さよ、色ねはま氣の靈科

と信ふる事と申すから、我所辺の鳥よ、一七日書、經よ、仏やなぞ、忍す
感化縫ひ、やひよひやあく思つて、とおけいば、水居いやとよも併て
佛よ、上せの事よ、今ハ所弥陀と金剛のうち、船をセミテ、やされ
て、も御迎とぬ、せよ有、智識長老の人を教る行よ、ハ金剛と欲せ、さ
るめ、端广王と輪胎の君よ、ハ摩那深の境の面と暗し、業の權衡
の收束と不ふ、して地獄の風俗と輕為と事と、不如御身が以未人
人と欺し取財へ、金剛と賜トモ、小鬼等よ、領ふ、と罪と輕や
べし若、金剛情くも御迎と後、行、行、行、行のゆゑ、ぞと、ハ長
老、脚、魂と身よ添ひ、袖を畜へ、と金剛多く取かして、よ、り、経
子水居よ、船を船、と、後、か、難地の弱き、う、あると足を色を換
消え、船す、セヨウ、然各信、並、浮よ、は、坐と、つて、よ、き、か、居、根、舟
ツ、船打船、ハ、ト、セヨウ、信哉、あく、そ、と、て、石、舟、爾、逃去、リ、船、山、
日、備、を、し、も、廢、し、る、後、す、隠岐、甚、而、上、者、の、父、の、欲、と、討、爾

是より奉公とて大ひよ御室の御手へるを

一天正四年七月六日萬津弊築案喰門が築くと一ノ瀬の邑城へ取かけ
攻き色ば照門りど最期の一戦大兵を大ちに殺すかてお醜威と震ふ
薩摩勢は河上を奈良門を渡し食せ功経びもといじとひん一首の章
美をかけよう。

赤経みちをりてこそ産屋本色に切り色さきハ極樂

壁の竹て面あべーと云詞の下よ

切ラバきを 又するのむとおし草木心よくちよおだれを

と毛すと碧しが殺戮のう遂に晴門討をうる

一中納言隆京卿を備後の三原の城と荒表の地にて佳道とてありしまし
南海の風雲を識と清うして江鷗と閑友として芦鷹と伴として安静
の居すと後ろを林吉善庵入道楠林京都へ下すと三原の城に
えり黄門對面一泣ひといふ楠林花洛より何の事を事うて我をすハ上洛

さきは都の鳴と岡あゆ一子をとまひとば楠林年生のゆゑすすむ

ひとすい黄門今行ふ流移と間ねてぞ龍達が小敵の中す。而めのまみ
や先の弱く没殺をとや歎とこそ當安俗俗半の老翁三歳の駿馬す
と暮るく謳ひよりとやりとは黄門汝はそれのあをき高しとみぶ海一曲
まひと宣ひる楠林へ吾老號そいはまちく涙のまつてあらしれ
足ひきた嚴辱ぢとば、不及力、歌うてゆる謳ひく今三十と四半と
金りゆへいふ聞ひの身不破ちんと老ひる老母と恨り一月の前
高歌一曲掩明鏡、昨日、才年今、白頭とす今一月し禮以て宣ひと
林河口老入道が声哉、息継ぎと被ひゆるかくびと連の家
在すやうすを時黄門のよしのの而ゆしと云すハ非也。而ゆの事
や前のうすえ松門をと云の悟氣の而ゆきとや海ゆそ慈悲えぐ

此す謡ひくアセヤヘシムニ若くよしもをいふ雲不あひとも言事の
東を海びは偏りむ草と有づ。而ての傷手や武備のまゝな程より色
西の街道や支車とあれ程走けあきらの事多々而ての私事
モテラの草の陽の道で身と降々程だけとこと誰もまた色いろちる者
事と中り一多とる程略之の也諸道の駕唯は唱寄リ一言
以へ蓋之ア五すレ禪元卿へナクマセヤセ老臣奉行等もと大寺の
心と會得せよと云へば良き。この詩の作者竜達といふ者ハ元年
一大友義慈ハ文基の両道を達し子戈の時より蒙鴻の道メと為セラキタ
或付小の方へ

すびくもよもくてもくのくわ而先只かう。風を吹くも

とすかと遙く泣きば北の方

ちびくもじあくてもくのくわ而先只かう。風を吹くも

いざまてやくさん主上御事と歎恩有て 雪中、あ苗 常火ノ灰と云

難歌と難後など下さき方行ふしと今年だらきやが

雪中、あ苗

富士移る田子の浦陽の里人を雪の中とあ苗を

常火ノ灰

波長とよひ雪の下と流て池のまこよ 這へくも あう
まくまくうひと鳩ひるあるゆと

思ひきや 菊葉の海の果近と和多の浦波がるへまと

一大友家の持城立起と改名され吉川を去小早川隆景ハ數万騎を
攻撃し城代彦平移近助田丸瓦効忠寛意の勇士を以て石舟なく爲
がて一とて唯頭と首ツモ日とぞ送りて去程に破滅する所修羅と爲
兼成財ハ忍口しす財を難能程多くちひかして勇と智の財なり
或財物をも背負ふと物貰ひと體仰りと書く一首の和音と
矢をもつて送る

ちくわの花の城攻をくさる煙の
神の香をあ。

中國の傳印より

命思ふ人多き念の承の雨と洞と流ゆる山城の内
壬辰遂にトモササ中降とぞらむ
筑後折川の主蒲地彈正少弼鉢並々造守隆信の為謀をらを本院
益々増ゆき徳ヒヤシが肥前のみ馬を爲ひて多の手すりが後方の狩
者と体して領主有馬修羅又義純ハ遁仙岩の方事公主を生むるうき
よどまく年月日とそ寔られ船を率て七夕鷺はすりのみ東中の侍女
竿ササと歌ひの事とけ孫の衣装と拂りた色も波照の紅葉芳艸の元
高城と云ふ山吹四季の詠と一目不浮うて寃アタカと仙境浮香世界
ノヘルが如し彼ノ徳の名を品獨り才志自是する余多色を傳ひまの女房
何とぞ夜とよと改めと云徳のう洞とぞら
いそくらぶ何とぞ備んちテ子潤の介を身とぞら

肥後の至一揆の裏事 限級親永が幡子親安、若狭奴軍の娘と隼ひ程を因
中と私さん。今、う波野畠内守と謀玉て隊車を引かせ、車廻れ遠町に
とくばめりあを乗吉の見事も入るとして親安と猪子と宗近の御者
八十人、八十人よことぐくわざり、柳川を額アヅチ重れし者たは聖の内
裏の久保吉と是佐幸と、則士十二人と討ひは定り家茂ハ二名の
楊は在て限級は對敵まことにやもとする限級と往く見ひすめ、十人入
一弓手國代と別ひ登城後、久保親永を活身せし者の中は限級疏後
入道善良よき者に、彼を鶴田義貞の本拠と想入とし新田左馬新田
照と云うを大友義慈と候してを江守とぞ一いふ善良をとて
也傍となりしきりの如ひの還俗して限級が跡をそぞり限級無格入送
善良とを名ふ年少を名ふを新田揚助助大を、友豊府落去の後家
茂は塙ひて、善良は獨別強よして下もの戮功の譽をうけりをし、
家茂終と助ケ乍見の限級が討り、善のねは先揚助と名ふ善良大

方よきし限教院は明日湯セラベキは極つ何モ一揆恩黨モシテ金と失
つんや志と変し事モ改バ跡意有るを以て宿モセラバ良済と流レ
親永が死の由キ率ニ萬事を知ルざま非我我命情くんで何モ先返送ハ未
らん親永船後モ坐し時モトと過るベニ身ナアムモ、奉國ヨモイリモヒ
色モト再三諫リしそれ因ムモト重々見苦多死とすべしナリ、是ヒ
宿縁の業カアハシ限教が威勢の至る时叶ヒトモソモは依ク金と
助ム事モト向ムン今危キヨ時モ志と變チヤ不詮某が死と急ぐ事
モト已ニ自害せんとすと移教押ツマ、是モシ安良門分の自殺ミ考ル
うもまた親永の方ニ及ヒと怪ナリテモ、おそん連ヒ死ベキ身ナム
ガ家茂の然志モトも報じ明日親永と一所ニ死セヨトソモ安良門
テ嗚呼忘モテ家茂の今の一言ハ我為モ不義と勧ナリシヒトソモ
亦恩ナキ、モト源氏と自害と止テヤリハ家茂ノの報恩モハ親永等
今幸道キテ身筋モ此事トシテモ知ルマジ我か討モノの者ナシ

太刀主モアベアゲテ城上の門番志モハ親永モ外の者大ニテ斧下モ撃捕テ首と剣
モ斧下モ手足モ腰下モ足下モ腰ハ筋モわと云、さうりテ移教母モと家茂
モ告セモ家茂モ歎ヒテテア殊彼と端み推尾レ十時梅澤舟と役ドモ
自ラ書牒と認メ送ヒテキテ色キテ前後御内モヤハ十時モ力及びハ高橋
モキタモトヤセモ家茂モ社有ヘリ色ナリモトとて惜アキシモ若良
多喜夜親永が弟モ出テ藩内之物委託モ御内モ惜アキシモ若良
セヨと諒リケ色キテ親永名ヒ高キナリシモ口惜トリ色切モモ取モ明經モ
青正七日の日ノ卯計リモ親永一族十駆人舞モ歩ミ年少リモ若良モ白
織の草ハ物モカキ布モテ所差ミシロアニ三寸の大刀キと佩キあるモ立
テテ御内腰モ腰中三の曲輪合耳ナリ時家茂モの付年の侍十二人出テ家
茂モ腰ヒテ諸人ノ爲の筋をモ、錦モ腰モ笠モ腰モ腰モ腰モテテノ者雜人
一人モ連ベ立テシモ上意モヨリ厚討罪モと詠モケ接拂フモ切モ
親永ガ有リモ有動ガテ族向キモカモト内シ事ナリハナリヒテ路ナリ

括合せ切拂。親永を守る勇力の者なき老卒といはばる者も右肩
ちと車有て駆と衝く事となくて討さるを外の者たと日本と云ふ遠
一と甲斐へ發矢丸を以て近接と敵なく討せり。若良を太刀を振追
付者を切拂。一擣の下ちる槍陣と歩もありしが槍を向つて一禮を終し而
白い刀と遙すよおと首と低てをまつゝる宗辰是と見ゆ。而も廻を
其捕はせよ。而も之に刀と遙して拂ひしゆ多應が事の服腰を切ると
一とあとあ(ノ)刀と遙して拂ひしゆ多應が事の服腰を切ると
こよ色深むな色を傷得べか野和泉續でをり。あと若良顧て惜ば
有て討する人を欲對と改め。今をよ見早んと/or>法
仰う死せうとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞと
立本人は死するを討する士十二人仰うとぞとぞとぞとぞとぞと
唯を人多けよ。大股を以て詰へきよ宗辰いとぞとぞとぞとぞと
一人完の討すと幕代末守の事也。宗辰上洛の時勇苦もつもばぬ

既と言上せらきされど大子唐麿カタマツと哀き仁弟の法師ハコ若めん者
すと御す。船すゆへゆへゆへゆへ作り。嚴をあ海のちよ堤ハシみをども
甘名キ、荒治ハラジ傳きる若良ハラムの役謀ハラシ御士の擇準ハラシを

或書の元例二曰。世よ賣譽ハラシと車ハラシと記す。而も是ハ惟こその有
槍ハラシと思ひ。又之が如き若良ハラムと云ふと。天正年中。勝後ハラシの有動ハラシと限於ハラシ。と有動ハラシ。秀吉ハラシと云ふと。教さきて。時立
荒室ハラシ。成有動ハラシ。がたの供ハラシ。と。並き。利用。若良ハラムが剣ハラシの者ハラシと。惜て告御ハラシ
と。切ハラシ。と。ひ志乎。飽く速剣ハラシ。と。身ハラシと。つくべきよがが。か。と。云。細
さんと。ソリ。

一
豊後國合志名隠哥と大友軍を攻め討ハラシ。佐伯紀伊守ハラシ。惟教大將ハラシ
佐伯ハラシ大將ハラシ。細ニ河一日。子十三度の功。若り。主ひ。人官ハラシ。僕ハラシ。槍刀一函
脅ハラシ。合志名隠哥。大小。勞ハラシ。と。恩ハラシ。と。少。と。小。四。度。と。負。八。度。と。一。日。子。十三。度。の。功。若
利ハラシ。と。ひ志乎。飽く速剣ハラシ。と。身ハラシ。と。つくべきよがが。か。と。云。細
や。と。あ。若。ひ。別。の。子。四。と。子。車。と。吾。戰。場。と。打。勝。と。勿。端。の。車。と。ハ。云。な
元。主。車。の。弓。と。箭。と。ゆ。の。只。魚。と。費。い。が。車。を。し。る。か。よ。人。ハ。さ。つ。が。

るをも吉宗を殺し大さきに陰と金を左刀と打遣へざる以為よ力をあし事と張
る者いん是よ仍て精神草木庵をこよひしん吾ハ故は多聞の所を秋ノ月
美濃ノ原なるう教の有と吉よりは世の中天命の有と口ひて初々ハ縁よ似て
色どもおもて時一決して一済の中よ勝負をうそく能く腹をすかまふとい
らざる御子弟と因一死するに至る事は至らず胸中安閑こと云ひ
一秀吉と西陣と討付岩石の城と氏卿利家のあ將攻め一時蒲生の豪人
野矢甚兵衛を立人と射取首を提て氏卿の弟トキアリ民也とやまと
くと蒲生と腹するかひよしてどと因ひてよと爲めに鳥羽の邊先吾が充乃
眼子中しそと過て當時射あせじ中らぬをもむものとしとぞるヤクル
一在慶佐伯郡は木全知矩と云者あり後ヨ家暉と云毛利元就を送りされ
け色ば是が如と攻めりよと又犯らえはくる城とこやちくくす櫻くづまし
やと云环濠壁をぐる元就家暉ハ連弓よとあると守て兵舟と城中こ
射へせしセクル

やうやくおひしゆるを
氣風よりさきすかの 美みやう那
一説すちよごまわる
のあらわゆ

元和大は感じて因と解で引当し後漢を和を求ひました。宗廟社
の改名をもつて、廟号の「高祖」^{タツコウ}を改めました。その
かへて實家の姓をもつて、

岩屋の御子を高擣紙書詔元の廻く御死ノ三原能以等大吉が手后
よそしかざし持トウは立候タマハシテ大音揚ノ接せの音ノとを詠じる
おち分の金の御響ノ久わの黒ノとすを吟ハシメテあぐづき
絶雲生橋トウおよひ跡シテ自害シテ色シテうづ辞世シテの音ノ
流トウきこの木の聲ノとく埋ハシメテ色シテ名シテや言ハシメテ苦シテの下水

七
立荒事の事代をもし書のうち

一大樹様より家光公宗茂様にて御内密下上に御意候く沙翁の後工意字海
駿守第ハ台徳院殿より某別御心易く近見候又御志よりみと有之故
ぞ御内密も御外也大大切御用事御多々御入ハシテお仕
上御しひの門難詮也室度候上御天下沙翁證の御代より御入大切
ニシテ奉公上御一念ナト上松雲無沙翁酒好合はシ下千秋樂と禮ひナト
御内密御我等の御幸云々何方より御門一不内密お勤可ナリ此
朴是悟所候とお仕上リハ御見御機將能沙天守の御見形色云候
又大津沙津の御宿第極一念の念を一念モニ御承す家茂様以經五八
大津と始井伊ムサシ原し東毛大名丸の首イサキニテ半死ハシテ御居する者有様
モ復伊丹移封改易カタヤマカズレト上意士ハ流石立元之御幕元有様
左の者をナテ年時ナシシヒとの御意内密御沙翁

一小野和泉並後ハ年少也後高林飯田カミツノミ飯田萬代ト杯何しも臣正の御御中
主之と少者九在近所ハ度ニの御御者と主之御御及御御中度生仰てヤウ

和泉辰哉い事ナシシテも和泉と柳川をナシ和泉から色然か多きを望りて言
事有事ナシアリ也和泉是之ナシ或時又乃クニ付スバぬナシト内侍先
と子肩とゆうをひく腰上四半巴ケホリモ無少候とは御氣向方モニイ矣
の御行若都ナニ是ハ其時多れり候と將と御身を主従文左衛門又
又大友五代の化文一ノ行る多れり候一萬字一萬字一萬字一萬字有
筆シテ其の万字ナシ事無事ナシ可と而目以是不付各以爲中分事有
之生達正五十文字の所據け御色程沙御中御各事を主付いたる
の事と、又是色御色ナシ事無事無事無事無事無事無事無事無事
ジナモ不思之沙本な近事自身傷きて事無事無事無事無事無事
事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事
事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事

一清正和泉、初モ御内密御内密御内密御内密御内密御内密
の近事事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事無事
沙翁之或時も近事も和泉と若き者彼」とアガルとの
沙翁之或時も近事も和泉と若き者彼」とアガルとの

一立砂村宗義 本當は數年中ひしめの院に移り、鉄湯を勧うる事と渡ハ
諸人是厭たゞさうしてやうる所と仰は我身はうそとガーナムを取
ナリ可有之れば以爲小野和泉ナシ。ハ江陽ナシ。在源の友無ナシ
の不思議也。対のやあーにて後は改めり。うがる鳥毛計もハ心一も
のを仕てる。毎月半金を貰ひ。城下の石を打きて役を。節因之者たつ
て列可ヤ。と。而もと。和泉はもかまつて。入へし。と。は。先
計り心一意の下仕仕ると。やい。和泉が。と。城の事。ナリ。で。おとむ。是。無

立坐し侍列は侍車内差へ坐を以て之を代とすと蟄伏居の
事一仕合されども。年々之を入るる御と申。御事と云ふの侍する道と存る
故に少く御と侍自傷侍車多きを不及免非に跡してらむ意也

一 統虎杖後改密院 由養子の時に六十六と猪ノ巻くや山松毛立虎杖由斬玉
九ツの角年道雲虎杖由一折より由船法古と時船と而むと立虎杖由斬玉
さじ武士の由はは良事幼なく女のみゆ由不辨物の用は唐三藏の如きと由經な
付之朴山志めりとあをうぬとの事也又十三の道雲虎杖由道雲
の少しきく有之不と少見らぬと由是よりとあくてかき色見のけりと
馬佐时由布源義奈幸もひのきおとみかね一入内病シテとよも病
シ給ふと由佐義由不と由難候シテとゆくとゆく

一 左西秋山陳刀由板之佐付と立虎杖由渡らむ脛角の由意年し後より嘲
のひよはらひのれ毎時代シテと左刀を不ねむと叶ひゆのと陳刀と寸
づきの刀と左刀を無事一益此の風也と思ふ大將する者を玄を度

我士の者を猪通奥才梅、日よえぬよ仕ゆが魯翁の自家の財ハ故味方
たすうきわることとくとを日うけゆうと心別よほくともをもゆる人
たり生よりと肩てと何の傷とざつまゝのと具足病とこよ通奥多き
をあ一きゆのと立虎杖トハ古く、門板料シテとウカヨ由引膚シテの由
戰場半四角ひよめ車四十分よまひと一などウ車かけらきよるるなし
とかわゆシ拉ム对を防守ヤテモ渡の上をニテの守と有ル刀を馬上もくぬ
け不計不計てあせを陳刀ハ寸絆よ仕ゆを及承ゆと計上を由意ハ足達
對馬を三尺一寸の刀と馬上まで手柄と達ゆよ無てぬくよし身一馬キ
ぬくべし想トて馬上まで手柄と達ゆよ無てぬくよし身一馬キ
ある事をなく走りと接テよし小猿猿をゆぬを打ハセリよ

一家家集如晉文公高擣紹雲運

雲運

宋景祐丙寅夏秋
高橋紹雲
而養父松
立花道雲

山齋文集

紹雲叔公をもとめられたげ一毛の事とおもひて車中あり言語不絶
するまじび發聲急切やれは立砂歎声あがくお嘆声もあつて時紹運次ゆゑ
よき處より出向乞の由益ら在紹運次活潑不向復を紹運次と名すと所親
と云ふ者有る謂曰く道雲叔と號士の名故能力あるゆかりとゆくと道
雲叔の内先手にて之を詰め紹運次と申討をかねて遺言致しテモ二きんが
平手で大手少隊ヲ加へ自殺不亮の御遺言語にて道雲叔合掌総身を仰
有て少がん尖端茎の如きを胸に抱きて而生善いさざ然
て如生れゆきと長光の母と申もづつて是を以て軍今ナシ高郵近くを海と
名す自身と離さきて沙形見と云ふ上との由ゆ

卷之三

昌黎長政が鮮の全羅道を陳せられしより嘵慨は強く事の有りは跡を以て
有りやと井樓よりうきし虎臺に入らるゝ者有りる若きて出る者からしよ
舊政利刀と虎と走りて虎咆ひと呼叱ひとあはへて腰骨
虎逃げて危ひし妙に後舊政次がもあつて肩先と乳の下を切て身をど
菱渦くらへと虎の肩を大切に切刻りて殺し昌黎長政海をもと陳の大將として
下知をとする身なりは獄と罵と辱の事かとなげなしと云ふる政利が刀
と林原山詰と仰て南山と名く周處が白額虎の故事也

節披南山て惟劍鉗苛政除去 酷吏逃藏截邪斬佞
惟刀在箱唯其言虎有若真偽傳之万世爲子孫希
刀是備恭吉ひが作。之大德寺春庵和尚を刀十鑄秦と名と付す秦
房植の國と云。一也。すこそ

節披南山て惟劍鉗苛政除去酷吏逃藏截邪斬佞
惟刀在箱唯其言虎有若真偽傳之万世爲子孫希
刀矣備恭吉ひが作。之大德寺春庵和尚手刀を號號秦と名と付す秦多
房振の國と云。一也。一也。

はあきしよ藩正吉へねねて聲傷す庵ハ西をたゞなく遂て得の事不見んと
公次後けにさきハ遺言狀何の志アベシと書ハラシシが西明 謂多々
一大明礪蔚山と攻一時色利の察陵嶮泉氏終少捕元滿翁とちよ歿死レモ是
作賀瀬中勢並沿堅れ翁を亦ハ死モトテ大は當一みる
が故て腰切て一そらセモリテ是ハ主事するを難義色ナシシハ長の身
來る件豈瀬ナキナリテ少色夫の自害一もトセリモ一彼ノ子と
死夫の山あくゐてモゆく勢ナキシ若クミタモト道の極れ
ト縁一とすり刀と毛筆とめを山とよ突きてうづぶしよちうてうじ
ヨクニまと不更モト例一ゆきせぢうと是を令とさヘ傷モニモ
のちきうとむきひきこと義とも中へ心泊モアリ記セんと
ちよ草と捺セバ

一ノ子ナラヒ衣ハされば差くべことづる形ナキモノと武士などハ威房
とあとして氏族お傳あるちよ作とあら字源川の名跡應答が

一の名のえとのれり事一め後ちよ人あききみれとまくもて
感むる事一のりつゆうじどさてとさるヤードモトとよりてすは
キヨムコモモのむとのこらゆまひやる色これもつる御萬りん
トヤーながるもすお因えんに済ることとどりもんとる作
本然后われもとく恩計もとくびあわじし御士ちよくを今の人
ちよハもるもとくをじよあくらんとしモトテうわよらんとあもと
まある生ける甲斐行なきこと作アさればわざくもとことだくとつ
一もべきうりま間のすーと部四キ舞行人であることわる
者多えれかくのことししと公明様と文玉を秋柳ナリ周公さん
ヨモといふんといえど。

一南都東大寺の黄熟香とすひ金と美名と蘭齋待と号して室名
寺の室室ナリ抑この室をむし聖天室也門附大僧ナリ
本院一也三国安双のあ香しさ色ハ本代よどつてあ寺の住物

よよぎをうへりて、うんばとをもて、別名と蘭翁侍と號名つけとまう
件の三事の件は東大寺の文字にて記す。あつてこねよりて代々
の公方とくわくこれともとせざりし信長公のこと内に印御ひ
あつてこの香和紙を多きとよしし、美聞と改じ色々と色巴あがみ
勅許まで、東大寺の宝龕を御しゆけ回例すありをして一寸八九
きとうとす。ある今とハ尼納せらる。これ則古法しきと云ふ香を東
山の慈照院某政公印所定のもの勅許のうち、勅許のうちあると
云ひ信長公より傳す勅許有一卷。附總模のことなり。

天竜寺は妙智院兼彦和尚を碩學多方の活潑の如きの大明再版
和漢両教の達人なるもしこうして少く色巴信長公より安芸山
の記と河内守宣ら一々うされどよく辨せらる色幸ひ濃烈岐下年
南化和尚として傍由無事にこの像を作セテ色也多くのつゝ
さて一がむやうもをいひゆる竹林の如高僧なり

色より一く汝君ひへーととめしは辞一内金色一がまゆ仰せあきな牛
乳色ば辞事令にえれく昂商化和高筆とぞうら色面さんえその記
ヨウヨウ

古曰太山之前爲山太一海之前難爲水日域六十
亦列之一列曰江江左有山名曰安土其山不
在高其名高太山也蓋夫非山之獨得名有寬仁
大度人居焉也劉夢得云豈曰宇山不在高有仙
則名水不在深有毫則靈了夢得之一言可井接
焉肩一嶺之崎嶇宇上者自然金城也瀉波之
瀉波之渺茫乎下者自然陽池也自天地開以性雖有
此山人無識者矣葛京章主的令繇平清盛廿
一代之華胄前右府君者禁庭綱紀武門棟樑而實
天縱聖武也先是天正四年之春一見此山便識

萬古城地開闢洪基權輿平此矣力士星馳揚石乃五霧
列運行則不終三年而其功大成矣潛處夫數百丈之石
壁千萬間之大厦何趨力士之力巧匠之巧乎唯流山
府君之一胸襟而已目機之所明意匠之所巧離羣
之明公輸子之巧不可跂而及者也峻宇高堂之凌
碧虛者也極夜摩都吏之壯麗兮直欄橫檻之聳
翠崖者也盡秦樓魏闕之華美兮布地硯礪者羣
露肉潤葺屋瓦甍者帶霜外光西湖月之上至堦
者供府君之夜遊也南浦雲之飛盡棟者催府君
之朝吟也颯松風之動金鎰聲呼萬歲山耶紛
紛白雪之映珠簾影含千秋寂耶權門貴戶之
園山城也遙水鱗萃也盡是無不丹漆點聖寶
塔之突兀出林間者疑繡遠寺釣艇之人浮蘆

邊者怪圖歸帆浦湘千里風景嘉陵三百里山水不可同
日語焉某雄豪傑之擁繡幃出入于相府貴介公子
之巍錦袖從選于官途卒紅花紅葉色也億兆民
之富驕者鐘鳴鼎食之家也見者反目駭汗聞者
拍手嘆信及腰魚咸知草木當此時市人歌于市野
老杆于野行者遜路耕者遜畔雖堯舜民文武民
木可讓焉加廻起王道之衰修神社佛閣之破續
斷橋平峻路是故四夷獻貢來復馬八蠻解辯
服膺焉或膺俊鷹乞臣宇其幕下或上良馬
請將乎其麾下听策熟備矣鳳凰現瑞麒麟
呈祥者非今一時乎祝望々々向所謂太山
之前難爲山天下人亦將曰安土山之前難爲

山野ノ衲雖達衡、葉列櫛散陋姿。管見此名山、豈無感慨乎。卒綴昇詞者八韵述盛舉之萬物。

伏乞、咲覽

六十扶桑第一山

老松積翠白雲閑

宮高大似阿房殿

城巒固於函谷關

若不唐虞治天下

心應梵釋出人間

蓬萊三萬里仙境

留興寬仁永保顏

岐下沙門云興并稿

とを事とする寧子等力あくべく言湯うわへる事一言語と
絶する計り去ハ今至遠耳かへ流者倦事と忘れきは況叶
色す心地もれも南化和あゝ蓋金百両小袖三重将野又乃而
爲仰伏、被慰、嘗功、又策彦和あゝ諱位甚也廢有乞金
ひづる薄朴と何うしを承す所かしあひあるこそ

一
敵本國うはの勝家安堵上に乞ひ信長公卿食恩有て毛利茶
馬守も立候て毛利へて帰つて色ば業志而事以上ゆと骨髓を徹し
て毛利を毛利とて毛利に上りる毛利が毛利天下をもてけり忠
中全く忠義と事上假手をひきかねて天下をもてけり忠義と
中へまろも毛利へて毛利に毛利はさざと毛利に毛利に毛
利下へありゆと左邊の思ひ毛利毛利と毛利と毛利と毛
利毛利と毛利と毛利と毛利と毛利と毛利と毛利と毛利と
毛利と毛利と毛利と毛利と毛利と毛利と毛利と毛利と毛利

ハミと名乗れり。も詠よ下嘆咏の時をいと宣うをんへるも。信長
公は心よりぞ多く重く、^{アラシ}と入セらひとづく。金と取せておほく、
別へてあめなほじみと拂りとく。すすらせんるあり。ごとく
とねりとて鶴ちうりとけハ西ノ村の文徳西道の明月ともうつべーと
おしらべてモナリテテ。柳氏傳はの金本、兩處相傳の重昌の因
故備後守嚴信も、^{アラシ}の懷の内能と秋月とねきと、古去深志の者
杯みへを財多子膳と冠と角とし給ふ。是と喬餌の下よハ必
懸魚あり。重賓の事ハ少死史ありとち重ばはあきらめやうやく
あきらめの事と脚心と付らざるもからぬ。いと深く差也
世重高と毫釐の差と實す。時を必勧不^{スム}行。織芥、馬と罰
ある時を必沮ひ行つと云フ。

一或因京坂市よりもか智所人或ハ重ある者大安ちへゆ目見ヒトと云下
りて覗アラシ食通アラシトのを森、乱尉アラシ奉つてく觸しゆを弓也山

行う御年少とあうとき、跡えす至る都と庄序は良跡と舟波
の者あつる。余は山城守であると自らゆると行うと。ヤセレ所をと
宣ひゆ。と向て緋アラシのに事す朱玉。然ヤ入アラシ而有事、可令下向。所務
子好あた多々玄謂無^{アラシ}聊。安^{アラシ}津井一門相對大々其廢謹言

天正三年 八月吉日

荒木山城守判

進上 阿除毛敏

と行ふと後^{アラシ}ヤセレ所は文字無^{アラシ}。又混^{アラシ}毛の爾^{アラシ}より
此治中は沿岸三橋、舟の十子^{アラシ}假名宮名所付仰アラシしかも
車^{アラシ}と宣^{アラシ}ひ。时齋左衛門爲持内森前仲吉斟酌^{アラシ}事安など
よど^{アラシ}と墨^{アラシ}は信^{アラシ}。御年越處^{アラシ}。指長^{アラシ}。よひにひくりや
よひにひくりや。商^{アラシ}。福^{アラシ}。うんが武家のみをも負^{アラシ}神^{アラシ}。薦^{アラシ}
の福^{アラシ}。ハか大命^{アラシ}。土佐^{アラシ}。元^{アラシ}。經^{アラシ}。別^{アラシ}。帝^{アラシ}。勝^{アラシ}。もと^{アラシ}。折^{アラシ}。と^{アラシ}ハ優

參軍相の意これも有司の器これ、其の意不ど心毛人主と間推心事と
徳をもつて是に信頼する所を重んじて恵みを取る事無くして是を清々取る事
可と云ふと智深の意量たゞすこゝう伸て、嘗て、玉綱のシテヤハシタとの意を
本窮殊のニ兼合しめむを、すこゝ處必しは當する也。是故、玉綱、宇周
公の力との事可。専用一も假りかねば以て、かくは此人のせ力也。是より之を
其信人多くとも多き處也。有別者進退眞に令ハ小功すと勞せば邪惡
の跡と伐し温厚燒君と多キ事大功を天下重象は及ばし良と極育せん
と名心實なるを天神國と仰し人心自即・結ハ如斯ラシムバ一觀功成
トモキ威光いと云やびやうすう是又勝志不非也。夫、畜左角爲指す。そ
天下國家以失ざるハ御り。へとちの声よきハハ」と、近侍軍勢の倚
あよらきひうちし朝は詮詣し謂、他法、術、自法、もと精誠、うちれん
人の方を窺う見る所かづ能知之可用之ヲ

の城と門のきらりと勢方へ内通う又後難をや忍せんを身を觸る處の方と
ちの妻ふとそしに剣甲賀の山の下本多吉郎秀吉小谷の城にて世間と
沙汰あり逃亡とアキセタ色ハ勢力派弓をもて捕縛を以て植田をもよ
至る逃走ノ首を割ら色りて植田而高木をひの連合川上河野の交合
をもしてうつる

身を鷹の轟情うるぬ命う那
向く妻女とお徳うち是を賣らむ
あひ思ひふうめく野の法のを心浦一を月此教う那
ゆじるよ

一 海立家靈験書と云傳聞立りて安むの町まで渡りとどき備人郡
集して妙法堂日蓮家達那^{タナ}錦智大門^{ヒヨウチ}門内有人語法の事^ハか不審以
強くやゆ靈言^{リョウゴン}事^ハ有^リ其の名^{アシカ}と聞^ク中^ヒにとく凡^ハ佛法の主^{ミツ}達^ナ
と了簡^ハくべうと和諧^ハの形色^ハ法華宗の坊主^{トモ}と見^キゆつ通^ス若憐^ハ

アリバーと云附。七日の法燈と十一日を近月アリ。法花を傳と云はる。
送る法花の信宿と宗綱と多々アリ。そして京都頃妙寺の日光多光院九音
院沙顯寺の大宮坊塚の津屋寺塔を諸小諦傍の本傳など云者大を逐う
ちを算す。信長公は室等アリ。何年隠便の少活細々アリ。是を以て公食居
めらしの尉矣忍者を極ム。御長谷川竹子島作日多々。ゆれ咤アラギ有之。浮云
宗氣。何處も工意十隱山中八三。是而後仕テ郡系の法花の少活細々
多モ因心中さざへ一向不宗綱仕事は。尊者ツツ是非子不及宗綱仕事
又と仰給らる。主附者とは仰給。京都ト西冷味有タタナ南禪寺の
老長老御ひきの津五山古機ミ出シ。又タタナ八宗萬學の有聲の傍。因果
居士と云者折岳安土よ。所アリ。以是と別者否。不深空法間の少活
書付。少々アリ。後半少活少活アリ。其の後仰給らる。故子以是時子天正
七年正月廿七日。安土淨空宗の寺海嚴院佛廟子於て宗論。乙法花家參
騒。一く法華はあま正學。其の日光多光院九音院塚の津屋寺塔を

御身の法門をかく示教と捨を方名齊田のゆの一字ハ捨と云捨さう法
花の云四十牟四沙の内不參何色のゆども貞安の曰法花のゆよゆじと
不動や法花の傳徒此色言はふ及即ナ以て戊辰貞安又曰捨と不レ捨
と扇とひき敵とひき殊ゆ云此制別者とはシ滿舟一月を嘗と笑て
法華宗れ袈裟と剥離る千叶舟古七日辰別し靈巒也扇と扇と笑
立て一軒まひる子園ゆ寺日光多少の一室よつまう打擲せり色
八袖の經王と見物の者たゞよりよ放くモ法華の氣也アヘン而
足と深く近盧の者と遣し悉く押留ゆ故宗論勝負の書付ケ上
詔す仰へらるゝをよ海ち羊法界本尊をあさき法雲家の二人、附
褒美以下法華宗を慕シテと奉りかの大服猶日本を元罪ト
云作自考る

一
聖氣の頃僧衆は竟過官子代と云者あり今年いまだ六景ぢりりが又
吉澤洋葉の城の先駆として討死あるる官子代幼ぢりとて又と一而

討死せざる事次第も思ひ今後之數地山合戦する能き歎と想く高若
ちうら銀もんと討死して又と自じ地子罷と曝さんと薦て人すと語り
ちうら未だ若年かじね極艱。押落らき世の合戦する若。とせ
ぎじじぬ辯わく何事なく故郷又飯を絶むくと諸人を脅。指とそ
えべし如れも世に行とも経さん自分を立つり叶ハシタバウビと只一而
王忠ひ定め共丈て後方の難頗知るの方の萬林萬一千を存
浅とぞうあして

ふとあひて時手連て乍らもとし元老の止也と考取也

とちゑく眼塗ゆ北枕よ伏て死をしに大清と改め佛人名以頭
かき西船もと神と云はらゆをちゆうどう

一
弘治九年八月正旬大覺寺殿義俊秉印を鑄す御下向行り是ば院舍
矣矣是伏處の事也せんが為且ま遷了是也ハ時を過ぎてと友にて。が
有す詩序代承じて其と憤せんが為水石の勝地と求り月廿一日一書の

照坂尾まで曲水の遊宴行りを人ふすと大曾年々
詩音と號す

早ノ原至

美京朝倉

花瀬菖之浦く山水の一處と號す 秋の浦一
女帝室

秀遠四過大納言

のよしを名す立せん女帝不うるを御子の 盆
初ノ似字

聖懌佐

新雁成行フ字之連ル

秋風萬里夕陽邊 恰似同一文一詩十一篇

歲月

系紀御筆をひら

まことに此と筆を取ると必ずも歲は浮ぐる月の盃

林木漸黃ナリ

月鑼リツ信

萬木凋衰秋樹陰

停車留馬不進スル

曉東露若鳥翁去

鴉外夕陽紅滿森林

雅教

卷之井中納言

春財久津江口より舟へてこくを解る霜の下海

義俊大光寺

流色る菊の盡シテト裡の川アシと 畏の下水

知玉信

郡賢相集宴江頭

曲水流採菊一擧ハシル

花作莊周太椿去

一枝上置八千秋

公遠四丈中柏

元の向ひに是日も四年也 徒る月半願之見ん

寄衣急

宗澄信

もとと色涙の角衣朽ちん後やさていじさん

水江鷺

吉仍孤野三席

鶯の天子草迎涼一月柳陰この川づる瀧山三萬石

泊雨滴蓬

宗澄 僮

旅泊誰言思方堂
滴声喚醒客船夢

寄鶴祝

鷹鳩 僮

蓬窓和雨丁吟濃
何啻寒山半夜篷

白鶲声清聞九天

遐齡正好祝安全

十洲三嶋入君平

千歲仙禽在御前

一一來銀倉銀の更よ佐奈傍絶の靈陽阿モリテ南陽寺と云々毛化
形幽奇モト融壠の感自知モシテ之は度多の余極濃香芬々として
開敷の昌年有りしゆ永祿十六年三月下旬新公方家覺度后
松後せらタヒトミ南陽ちよ金の改り遊宴びつて人を和氣致
休モラル

覓菴公方

備す日と高年無能より繡衣きちまうも思ひく

翁廣 仁木伊賀守

明交 食

七月半替一月もアキ風花の一年のよむとぞつ

若長 一色或船石浦

人つてとぬれを傳る多様いと喰難よ其の年の月

ち成 佐奈西山守

楊葉枝とくまよ糸いつくあの弓よりとく生け花の月

晴忠 大輔伊豫守

陽氣次行カタヘの月の歌いと色とも花のあひ乍

宮千代 佐助宮千代九

夕風のる月をくぼ月やけくわく月の意の本のす

信忠 上野蔭奥守

ありとほてくの間、最も君うち今一入らぬまい

義宗 故郷の物

君うち代の時よりいりて事假いとこ思ひのまへよ

一考證の信長只あつてゆきを一例あさるやうに館内或殿舎東
境と稱ひ後藤入道一徹御先知者なり。又入道の方よりびゆく使とし
遣へさる比附又前波高野の尉主軍セラ色障尾の靈泉寺郭家と相済
作きの色名も軍家一系と逃亡しモ邊を過ぎ。是れア左所邊ハ
武道の達人であるを兼ねて少くかばひと運命をめぐらし事とし承く家と
亡没する者多す。後を思ひと而ては、のほ、家と計らひし事とをよく成
事と謂ふ者とよ恩賞を獲て仕へ云達らざる靈泉寺と多ア事連
件言し東を守へ後者主を遣しそを許す。我等ア長篠役をくわな季
密使と仕りゆくと急きと申山田村立場賀松原門番と所遣しレバ一と
云送りの草原傳とてあるも却つては車を重幸と見てその西の面下

別六時と急きと申せ候て爲め歸りてお母者たまき小河三郎馬尉父子
日立鳥尉が爲めあし母上彦姫院若君もし玉丸の供は乳母の母
養父御四今若源三郎丸峰見清左衛尉西山の傍吉勝せり。期て墨脇寺移
居せむとて子孫輩と誰とも相處さず。贈官とぞ知る事なし。母は母と
娘ゆゑ年半至。返永キ良也。一泣目さす。嘆息す如少子處の鳴あらず
あれども井戸底の水

ことよりやいづら席と爲めにと音叶の令市とあひて

玄福新歎是とちてとより何ひ

船舟よぢのとて能おーれ致す。室一くぬのとあひ
吉野まけれども至る事少ア。船の所をと古井としと差の因と而て鉢野
とぞ獻しら色々傳り。又す聞きも大日本の冠けり。式根方肺氣病
平泉寺の大危と牒ド食セ二百奇斗。又て六坊質松寺へ不意を押易セ
用を作。活死と打至る。平岡吹石の尉と少てあつて即ちひつをもん

敵の兵をと殺し取る事で運今へと返りふくの有害なべと云ひ度も義家
をと争ひて此にハ義家を奉勅外已し近て恩讐とがく、京焼の又ふと妙教さ
で重びきう三事とも安穩するありまじや。と高者すの、一り此に染木智充
防矢射よか辞多自害をふきどと宣ひて下る者多引ひてもしかる流經
一かひて後更底とあかし辞世の持と業ある。

七顛八倒 四十年中 無自無他 四大本十室

身と拵て刀と抜打ちの股を突きまつまつと引ぬし又胸車よ
突きまつて臂うち又ゆきげく高橋をちまく介錯せよとひづけ
と支て歎かの聲をひきとぞ。自ラ端陽とたて候おはるよ大と
かけよと宣へども新ニ命とあくまでも自ラ端陽とたて候おはるよ大と
さーうの傷身何けの血塔を深き湖の如く半纏られ心ナリハ夢と稱せらる
とぞ。はよよりひえよおとし被体玉りる御すら爲めかち倍走り来そ。今
階一歩をもる父家伊豆守十一罪元泰口毎月廿日の酉の別領倉五代の繁昌

名は城のく激の象累代の鬪憤一時子敵をと争ひて

一 僧の家とむる忍もと和膳との入一時僧の象長平と中務正政秀和膳政室
とぞ。故あれと遣し乍る主従は一員の古音」とお付る。

被ひちとほひ水の油もとを至今れ凡て解くらん
但は和膳の身もとぞ。中務太波少主の内を年年わざく泡く聖年
の身を至く年とのひとよ後もし

一 信長上洛行けりとハ三母等不可と取て處に色は路中のよきく一と音
よ。角。第一と知れ大帝童のことを自己バ。あ代と御傳て應焉セ
かう。又信ちや熱の色と三母をして應焉一とき

一 信長極列を貪欲有り。を厚と窓の酒井政宗は列坂平とある。以復逃
信長極列を貪欲有り。を厚と窓の酒井政宗は列坂平とある。以復逃
は久遠の内に信ちを極列を軍とサ廻討死と申す。且し上手強
敵と戦ふ。又公方より惟有てをめぐる。發キ所供不し君若々今日ハ公方

とす。傳し系とて御兵隊の所をと活中の諸人よりそひを後攻本の内に之
トテ人信長公事。家よ服ツクセラセラシヒ不調法。ナキ事。此は發揚よ趣く者。一
かと多く用ひ。とて御兵。その御法。その御法。その御法。その御法。その御法。その御法。
心あき活中。と御也。がよだ。ああ。海老。孝子。はき。かと。後援。色。血。う。を聖
肇。と。浦石。鳴呼。の者。を追。を。も。信。も。の。る。の。傳。モ。リ。ト。あ。が。り。モ。ト
ト。ま。我。等。參。又。ち。候。守。ノ。事。ニ。二。代。の。自。合。敵。よ。向。ツ。モ。次。モ。老。沒。モ。ト。不
調。法。の。不。供。レ。し。四。帖。半。の。數。多。難。ハ。今。キ。帝。林。ト。マ。リ。ヨ。ニ。ト。不。調。法。の。不。調。法。の。不。
モ。ト。有。レ。シ。キ。モ。ト。江。流。モ。四。罷。リ。陽。る。浦石。の。信。長。公。と。居。着。モ。フ。ア。レ。モ。セ
活。み。シ。門。相。モ。ト。ハ。ト。バ。シ。キ。モ。ト。江。流。モ。四。罷。リ。陽。る。浦石。の。信。長。公。と。居。着。モ。フ。ア。レ。モ。セ
殿。の。モ。や。う。モ。活。み。シ。キ。モ。ト。江。流。モ。四。罷。リ。陽。る。浦石。の。信。長。公。と。居。着。モ。フ。ア。レ。モ。セ
四。色。老。モ。シ。車。多。活。み。シ。キ。モ。ト。江。流。モ。四。罷。リ。陽。る。浦石。の。信。長。公。と。居。着。モ。フ。ア。レ。モ。セ
京。船。ハ。向。リ。九。條。モ。一。条。モ。聖。御。自。身。高。貴。モ。觸。ゆ。る。モ。信。長。公。モ。御。修。保。
能。操。御。モ。内。陸。陣。モ。モ。御。修。保。モ。御。退。治。る。事。モ。江。別。駿。モ。モ。奈。向。モ。御。修。保。モ。
第一

一
中古達武年中。モ。足。利。將。軍。源。氏。ハ。天下。主。ガ。治。セ。リ。之。の。主。宝。送。院。尊。詮
ト。お。續。モ。將。軍。主。任。セ。ラ。シ。ト。ア。リ。テ。ツ。テ。天。下。の。政。道。を。モ。公。母。お。文。ツ。モ。ハ。古。ト。タ。ハ
ク。モ。尊。詮。の。御。子。北。山。大。樹。義。滿。公。の。附。モ。あ。ツ。モ。初。モ。ト。公。母。モ。政。道。の。所
附。モ。と。止。停。止。大。小。車。と。一。而。武。象。の。計。モ。ヒ。ト。印。重。利。モ。身。右。政。否
ト。往。ド。モ。正。海。と。一。流。し。向。カ。御。ト。一。そ。状。ツ。モ。ト。主。車。カ。シ。志。ガ。モ。ト。ハ。南。帝
の。所。代。ト。絶。し。逐。カ。シ。御。ト。一。そ。状。ツ。モ。ト。主。車。カ。シ。志。ガ。モ。ト。ハ。南。帝
沿。う。リ。公。方。の。御。名。モ。本。院。の。主。也。モ。義。滿。公。モ。鹿。鳴。去。モ。左。上。天。も。の。も。る。
號。モ。號。リ。は。鹿。苑。院。殿。モ。名。モ。ら。是。モ。か。ち。ら。方。の。如。シ。ま。る。代。モ。將
軍。モ。公。主。モ。ト。テ。ア。ト。の。政。道。モ。執。行。リ。セ。モ。ア。ト。ニ。御。室。町。モ。先。の。門。所

と達つてし入へましむる所とす室町殿とちひ根公方ゆゑの公家
十六人と脇廻となばくを名称へたまひよ非ヌ極又武将の面をも多モ武済細河
島山の三家からて一茶園す住しひよ弟極前山石一色の四家是と曰ふと
て天下の政事とほゆハ支し公家領と云ハセ民卿の内附の執事職の事を天下
の備候大小君の支那人也四職と云多因じ内侍侍所の事あるの事と曰居士の
ト知事とを治中の御事と勤むけ外門印松の面と備家御役の事と十一段
は佐院と是の公方を守護しまして天子と安政セーのうち總ひよ多民卿より五世の
孫慈照院義政公政道而一の事あるを心仁の義元死り天下大半を據勢し公方
盡るも裏微一の事御中後柏原院の脚守永江とすと管領細川右京大
支政元が冲じひきをそひの京都の公方義綱と退け故嘗改公の印舍賀
算東班歎の印本政知の印ひ曾喝食の印若日治外天高寺の香參院によ
しきことかくとひらと而立まつて是を早燈お車と仰きある法住院殿也
壬辰舊乳名とて法住院殿至近を漫居ましるを門子三人あ耳を

まゝ一人ハ義頼細川左衛門と之澄光不破、ひき星と坂の納者義維と云を門子す
家と西波の所不立ちて四重の公方とトヤリフ法住院及今一人の公連と信州
の赤松と取れ無むじてと御方坐御立主と公方と仰こまて信州公連
と備りりとと義勝とすひ義院殿の門事也干斯細川の義店阿波の國
の守護代よ三好信長を長慶と云ひて竟ひ細川を公連は義勝天子と東ひそ
と公連と御方坐御立主と仰こまて義院殿の門事也干斯細川の義店阿波の國
の守護代よ三好信長を長慶と云ひて竟ひ細川を公連は義勝天子と東ひそ
と公連をば公連と改めよとて致公改對一あり治平第内侍にび合數友ナニ
月既り又長慶と云ひて松永源ひ久兵と云ひ信時を山城の吉野の忌の太
民守と云ひて多の娘子居位し又後子を公連の政道もヒスイ一の長慶と
長慶を老母と云ひて馬鹿の先と云ひて、其と云ひて差事カツマサあらぐそ
一存う子羊次と云ひて馬鹿の先と云ひて差事カツマサあらぐそ

一族三母の長縁内十郎守政康岩成直続助左通は三人を後見よ定め政道を
執りハ一めと三母家の三人をもしりを外松永彈正少弼彼二人を相並
て備事の仕合を相計か抑もよし天文の末より京都のうち美濃翁と阿波
の山所義維^子と内諭にあらる阿波の内所ハ二母家の老夫婦もよし多喜
を享しゆ上洛有り色々向六月廿八日公方を京都とゆきあり江川穴太と云山家主所
魏忠石有く内所遷の事からびて時苗とゆく阿波の内所ニ母寺とゆ金歟の内所
至有一母寺御所不當の事^主を以ひて天文十九年元太正院門越去ゆ
備人追慎しまして頃て仰毛根と路陽東山慈照院へ送りまゐる所海嘯
由家督とお後有く將軍の宣旨と幕府の法度と云輝公と名の光源
院殿の事まし三母を參りと仰故對ひりゆく汝等の鳥の謀す内和睦有
諸事ハ改道令と參り被任^子りゆ阿波の内所義維ハ汝等^子内和^子睦^子と
由子義宗^子と又阿波の内所と爲し田園を居住す一々^子永祿七年七月
廿四日三母もお立處在し今年冬の初う公方家室町の内所と内造営有り

進兵山城守松永を廢帝とす。ひくは江戸に定作料の名とし、榜列下の郡へ棟別役
を務めしをらる家一軒の金或半家とあれば、まことに民衆とては甚責をうなずく
私後の大營謀役をば、そぞば、美内四土の民衆困窮と諸人公儀の政違と
恨みうよむ怨嘆はあらず。忍びりん所波の門所よりニ忍參の三衆、若松永と御取
有を内上路の門企乃長が文永後より、三人若松永と心替し、沙木の隊級の
企乃永保八年五月十六日、津水訪と報應とし、人數を催し集めたりを而も
主事三好昌尚曰、主理守松永、伊豆、主教加等とねじて多勢二傳の門
不武御陣のゆ構え柳答へて、而毛々、偽つゝ公方亦、少羽法勝は
ト。進士勇作守晴舎^{イエ}とひく訴狀と指する是、只す一所中の人數を
入さんとの謀し、ねを算計するも、あよ二所の者たちの、すす入海り、一の事
一極よ竹の事と不まるまし一度不岡を作りかけ、殿中不乱入し、相益多義の外何
候の武士なれど、徒足の佐と攻めり、所名の為、易見切てあて合、強弱判
するか、義輝公を攻め、大將として自力切てあたる所、沙代の如き、一日よ

實てお敵となり追滅して各討死せしめり。將軍門最期と云ふし仰候せど
萬葉抄

萬葉集

五月五日 雨氣を浴び、郭公の私室とあけよ雲の上 あづさ
を後仰す歎ひの心ありてうき色を絶す所より三十歳内侍の討死三人を
嘆へる叔父輝公所含賣二人の内一人を周嵩喝食しに北山の鹿苑寺より
まことにけりとてばかりて討する全身覧え得業トヤリは南都より入室して
一乘院の門主に三好吉景を始めく助ケ至キナリ色天印院家のゆゑす爰
しく馬士を務めたり尔後移居す南都と彦守を以て號稱の跡名と附
れたり又徳川信長を西征すて跡す二好もとむかひ京都の
セシヒ西夷船軍の宣旨と繋りゆひ毛と実服公トナリ。

天正十年春廿六日明智光秀、中國表加原と一色坂本の敵討除モ一ツ今日丹羽
岳山の居城より急著し相立せ七日先宮山より一宿弔慰し靈廟と終し左近所
の御子旅を三度闇とあるところ又加里廿八日西へ移り連宵而籠身以有之

時をいは天のトーレ
アヒマカル 度のナリ山
西場
基義の社の虎子セキシヨウ
紹也

是則遠意の術也明智氏豈乍ト毛土岐民の庶流也かと秦の趣向附
前より准らつゝ已し天ふと知るの理と合ひ紹巴已シ船ム謀ナシスのど
惜り聲句の吟声又和ハモあゝ如解なしと云々貳三謀反の遙タガチと云ひ
第生於人信長公附生害の後光秀一書を紹也と存也し極く油を貫し
き小傍聞とちて發入るところ此連名の懷政今は傳イトクシ徳山の風塵内外不

一説は光秀陰謀と号ひ立股肱の重耳を云々せし後、陰密に伏しきてお去り奉るの刻
日未暮高の道より
心細く身をかづけ、身を傷めじ事とぞやしきし
とおゆめゆずの御へを仰りける。又光秀を名山すすめ、猪國德院行祐が許す一宿
にて連宵鳥打しきるを聞く京都ち波ノ道の達人紹巴昌屹兼加心斎など公者
たるを召セ甚上大嘗院宿淨と核そ連宵とぞ儀し事を匂ふ云リ

今天之乍如斯也

卷之三

風を池の風と
波と吹送る
匂の響やさゑん

昌宿紹行
叱源也示

松江の野也。松江の翁。

心慕
如薦

利多唯深一モ古ニ往還り
尾上ノ御舟夕着リ光秀
以下略則は幸子光秀ヲ白十六行名所の旅と云本ウ向子。色と香と聲と聲と
もか花の下と海しき、零半身と。至ニ走於長閑ちる因と日向音詠トて懷古ハ
為り思ひん子息十萬嗣嗣光慶とも為セモ此執事ハ惟仕ラ臣東六命ニ本終證
之を東下望む者故久之不浮として高連御の主を心ねらる者ニシ借用ヒ奈由ヨリミハ今後カ
下ト一之七のうき光秀名半岐の高齋明智ちきは名多と時帝ニ準テくに之を
奉堂と奉者ハ自ら天下で名ハルハ心積ヒ食ウラ是事の如モ余の如レし誠々大事ヒト心
中多思ひ五十一刻ミ僕の匂ヒ御多ヒハチ万石ノ御多ヒキテ

一
此
多
氣
山
の
小
毛
子
流
る
山
ま
城
郭
と
構
す
ゆ
と
周
山
と
名
く
自
ら
周
の
都
王
よ
比
し
信
長
と
殿
の
紳
士
は
以
て
る
事
か
り
と
そ
光
秀
信
長
を
討
ち
た
る
否
則
は
肯
井
次
の
件
の
使
と
死
て
君
は
一味
有
之
ハ
數
箇
國
を
完
成
ベ
ー
と
之
因
テ
此
役
交
亦
光
秀
と
集
り
之
君
信
也
公
の
顧
問
ニ
因
テ
和
列
一
重
の
主
と
す
事
業
已
ト
光
秀
が
吹
譽
の
不
致
シ
れ
ど
渠
が
身
を
受
事
業
を
済
す
る
者
と
是
と
並
く
惟
ハ
若
夷
不
祖
不
知
意
よ
か
う
ゆ
き
と
多
と
穢
る
者
ニ
其
黒
モ
ハ
入
送
の
罪
無
所
道
ト
以
て
も
例
モ
不
あ
だ
の
理
不
達
例
ハ
而
事
端
ナ
と
され
シ
一
日
の
功
臣
者
と
四
戻
答
一
理
行
ヒ
と
思
つ
ま
の
を
皆
口
と
舞
え
傳
詭
破
と
酒
香
ア
復
ト
酒
の
ぬ
子
在
ク
中
西
流
傳
七
年
の
虎
從
神
子
側
ム
ノ
間
ナ
リ
只
如
其
多
明
程
取
歴
統
計
リ
年
以
ミ
一
と
宿
老
の
面
など
判
断
遂
ハ

ほひゆきより色を正義勲者シテの者小勲者シテ推手シテ手車シテ身ハ椰子ヤシの大
弓大口と聞きる上罵署シカリケあり手附に變否イハよわば智恵の色非
あるか老シテ子シテ信シテべきは非シテば愚者シテ一偶シテ手車シテ身シテ聲シテありとシテり和
也シテ高シテ羊シテあシテばナシテト云シテきれを手附中シテ如シテ不シテ振シテ手附シテ君シテ
少シテ大和一國の主恩シテとシテ光秀シテ推轂シテもシテ不シテ色シテバシテ之シテ京シテ被シテ報シテこシテま
主君シテ怨シテ辭シテうる者シテ与シテあるとのよ意シテニシテ付シテ一不シテ心シテ附シテ手車シテ王シテ光秀シテい
ナシテと君シテ門シテをシテ云シテハ車シテノ恩賞シテとシテ手附シテ手附シテの御深シテとシテ而シテ也
うも湯シテ吹シテ手シテしシテる湯シテ吹シテ手シテ非シテ通シテすシテ欺シテ名シテの罪シテ有シテて變者
者シテ又シテ不可シテ逃シテ之シテ吹シテ手シテハ宿客シテとシテ通シテ遭シテセしシテりとシテ是シテとシテ勤
貢シテある者シテハ君シテを君シテ恩シテ付シテ執シテ事シテ所シテ不シテ足シテ滿シテモシテ一也君シテ臣
又シテと並シテば傍シテあシテる恩シテ勝シテ義シテ勝シテ恩シテ附シテうシテ而シテ不シテ仍シテ伏シテし仁シテ足シテ伏シテが
平王シテの嚴シテと撻シテ周公シテの二叔シテを蜀シテ石錯シテとシテ教シテ人シテ如シテ此シテ物シテとシテ而シテ之シテ仕シテ君シテの忠シテとシテ無シテ朋友シテの信シテと建シテ例シテと不シテ可シ是シテモシテ二也遂シテ臣シテ伐シテ忠臣シテの道

とや音シテひよ又シテよ書シテて墓シテの名シテと流シテ手シテ三シテと金銀シテの賄シテ
と筆シテあると信長シテの阿シテ恩シテと死シテし欲シテむ者シテ相シテ謀シテ軍シテの瀬川シテもシテと首シテとシテと
碌シテくシテうる者シテと不可シテ勝シテ計シテ彼シテもシテ一身シテの諱シテとシテ誨シテせんシテとシテ是シテ光秀シテよシテを
各シテ可シテ勝シテ之シテされば光秀シテの滅シテそシテり縫シテ合シテとシテ合シテし况シテやもシテくシテ之シテと
誠シテ臣シテと罰シテするの爲シテよ義シテ無シテ用シテ心シテちんシテと是シテ天道シテ幸シテあシテとシテ八達
罪シテとシテ守シテ候シテ人シテ忠臣シテとシテ擁抱シテせん毛シテと人シテ空シテ有シテ差シテ恩シテ心シテ忠臣シテと荷擔シテ
あり暴臣シテと輔助シテある是シテ六シテ以シテ古端シテと不可シテ苟シテとシテ惡シテ経シテとシテ之シテも
是シテ非シテ卿シテと合シテ則シテ改シテ也シテ老シテ切シテ博シテ智シテの面シテ西端シテと持シテて多岐シテ不シテ運シテひシテと
寄シテ手シテと云シテ色シテも吹シテ變シテ柏シテ絕シテ倒シテと油シテがシテ山シテとシテ的シテの至理シテ又シテ擬シテ議シテ
序シテ耳シテれよ不シテひ信シテ般シテのそシテほ不シテ運シテ車シテ海シテと今シテの裡シテと取シテめしをとシテ之シテも
夷シテ吉シテ一シテ味シテらシテびきシテよ極シテらシテそシテ所シテ松原シテ右近シテ白シテとシテ光秀シテとシテ一味シテせらる
びきシテ里シテ若シテし布シテの要害シテの地シテをシテ八陽山シテとシテわシテからシテよ裏シテ音シテうちシテとシテ一味シテの正シテをシテも
あく因シテ通シテして程シテかじシテし豆シテのべシテとシテ仍シテく先シテもシテとシテ一味シテの正シテをシテも

色々のことを秀吉備中陳和勝とて上洛せうるゝやうへあれど誰とく路まで使ひ
て一味の湯とすらんハまこと食後ちらりと中西を過ぐテ松井喜多と山本正義を立りゆる
あらんむろ細々と象大身の旅と人の舟ドテ草と木と山もしまよヘシ先秀
義ひ駕けソリナリテハ内家危くひしるを至崎道せ嚴々ハ何事が免吉、余力の使
うる事とハ後に陳じほんは道程立難くゆん某事ハ船と引きき者よりへぞ
諸人の心と不ともかく無危の保る所と中西四の小難者を争う使令をもたらす
べきとすらんをゆづる日の道語より候り五つと云ふと名をも頂て發明の
中興と感トモ則中ぬと使ひそらざるとも

一 明智光秀辨也

遂順安二門 太道徹心源 五十五年夢 豊來歸一元

明窗去智禪定門

一 売二日半佛寺の金鏡は明智源を尊思と痛ひと歎りし玉川知恩院不寄宿と
療法以してあるる山端合戰半日一時方為くお直浦は差めと下栗橋の邊と
子房も死と全て後半と上ヶ原と御ききことを善道と云アヌされ程を
是より入りんよりかねるあるく直峰丹羽ルと鄧八郎鐵を云と云甚き、先秀
義く何事も大浦吉成文と歎かしめし初より右方舟をと
この為の若かを身より惜むん暮ぢりきゆを武士の道

と詔すと各が心と似たりとて御をモ右肩より遙ハ油等ゲ除みと
右肩く車を色と鷹よ武士の氣とすとある事なきハ若こそ惜く思ふ事
と云ひと敵へ腰槍切く矢をさう年四三とあ

一 豊賀章陽の松をいづのひよ、枯すしと先秀挫つを今の松と先秀信の肩

秋風とも誰が主と林へねんへれんのねんへつけ志摩のうへ風

一 詩は青蓮院宮音好法教至厚物の記をもと色は大津の城を新居経河守正

倉翁松庵東王難舟正舟は難舟天正十九年九月の林植つを附の事

ありつうふやまとほりし辛湯のねむらきよみよりだ
さきものねこの新兵のうらをし、

一 老虎の臣神奈川を助後一山海の軍隊をのぞき見る勇者ゆきとくは余ども
是と逃げてお野人た津を放ておこし後日の恩山にて首と劍うちをす蹄くを
寄り

主仇有義白刃空殺身曝戸報君公河憐晋国刺衣客
共感生涯一夢中

まづうゆくをの命を絶取のあすとゆく日の恩のうゆ
をとひ後一老虎と逢ひ半傳のあれれ草薙の色は甲斐をく湯泣一そ
老虎よふくうりとぞ

一 永をと月相列一重と平均取うりとも江原新九郎入道五三浦義同入道導寸
ぐめうする住吉の城を攻うる中にと源氏名将の高麗御もれどもとて
能防きうさし大刀河内は汝をと盡城をべとどくうる者御は大將所寸
處と集うてそれ多事初若葉を天馬御坐三浦大外義明うら以後源
義されうて瞬子恩義而扇を取子

家累代の重臣を此所の主とす相列の因子等肩と並びてなし爲毛叔父
時翁不義のひ跡アシテと公方持氏とてまりをひ我とと追加しきし我がと止
事必不得又すととて御とて御とて御とて御とて御とて御とて御とて御とて
ゆよ追す學文と械アキホと色ば又と公方とて御とて御とて御とて御とて御とて御とて
御とて御とて天命脱生をかんといざる湯世の市は情うんとく夜とがく湯室を
保されうて瞬子恩義而扇を取子

君う代をみせよ八千代もよと惟うつの中焼のことを

と押毛アシテと御多よおとまと氣と便へ一曲印と人と面アシテとおとまを落涙を流
しりの極ひの日の歎を眼中一篇よ思ひ切くゆくいとせ無く單アシテと意く討
玉をもあわうと進すと第よおとし和がのとく骨アシテよと沙羅アシテと

おとと討アシテとち薙よ辟アシテと信をととの

壠アシテ

とやケル一と腰撃切アシテと外してうらの馬を蓋アシテと義意ハ又アシテと討アシテし
心跡アシテととあはれあらへへ歩立アシテと一丈二尺の根の持り御座アシテと信し

桂木門弟よあらるる身の長吉寺す年生一峯さへとモシテうむる骨枯天晴
一八百千の兵とせんへてうちる寧久は向くヤリハ城中ニハ急く討死自害して敵殺入
城のうちくくわあそは神よしてをと後代あけほくとをナラるあるみひの軍
より痛き傷うるの今日と易朝と生まう事ちをば差しに村をく廻る者多
あゆつるる荒野中是とまくそめとおもひて後代のわが一軍一てを
んじて寧模の軍を入四角八方は遍討へ免の既にと打てバ辟けを死むる
有或を後毛野と色は中元おちきをも難と拂ト五人十人折りし
かれ死毛野三面脇ノトヨビシマツノ傷よ血肉者ハなく唯左を矢を射うる
されど裏槍矢の所をされど幕ひ中峰は腰ノ以手を傷つ自ラ首をき落し
立あがめ頭をかうとも毛野なると色ア首を擰てがくら血眼と見死き罷ヒケ
き計の如キナミニ牙と易めあらみのをと毛野のや余あはれ下り
有故の傷は佐々木信昌と遊らひタキナメニ毎の後退といりとぞ首死セテ
モーと小田原久能の後世寺の福修被ノ首のマツハシモ一報を移して一員の
事なり

高とぞ多氣ドク

祝とぞと莫とぞ——みひと種すほ世の間と明ほのと室

とよみて也のせりきしゆは角急干すなこととさき白骨とすうにこゑを不思

第十九

一 藤氏復武別河銀の城立がんと登向有り色は正朝走毛とぞテ大年好色へ
きくを人同中ねよの座へて崩れまし城主難波西良慶——安利へしもと要
害と表へくして笠置と守護しる小年好毛と善く大軍と卒
一とれよつて鳥をうる難波の隊をかゝとせびあえと風を窓てあて逃の
車の時旅ふと旅するうれ矣——ゆすけ角り色ハ小年好毛と難波の力なく城中さへと落伏するよやく
あれよ大内山中主船逃るも
あしやだしよかとてこそ歎うよりあじ難波田のしづをほん

君とあきとあこしゆと秋の山の山源を二へぢん

るし河野嘉、勧進會て憲政を含みし河野城内お茶の士
大樹の源をもの瓶をと抱き、
長隊の仕合として政ひをなる時より陣舟南方
お茶の士
大樹の源をもの南方さへくと、レバ相列の
風の小舟カタが指南と傳くる。曲輪猪脚と云ふの骨張コロチヤクとをし御子の死立と巨細
は後進をもつて、カタを籠門と扇谷の者たるもせんと、レバと猪脚卒ハサマと
逃が起ぬくよ翔りカタと逃人の中太田、大之助カツノジサブと云ふ者、幕東道立等まざり逃げ
する猪脚ハサマとねづの本意をゆめむと清用セイヨウの守軍と令まうして事と
あがむと家とすばしと民衆の下アシと定し年なればいつまでも逃げんと腹足と

かしきも足跡をくわぬるへりしよ邊の側カスガラに農家の馬の前アヘンと見付天の
与ヒテて怪ハナシす右刀引拔縦切ヒラギリを凶と審スル持筆者と跡シテと見え小界コノシテ死體シテの犯
之道をうづく身ヒト者ヒトかうそん扇谷カツガラの陣ジン前マサニ

近頃は、この子の猪助昇恵者より太田の犬之助の那

天文十五年四月細川藤氏康三十乘河越後守として八年金城と争ひ別入昌川の意
砂窪^{シホ}は西張有子故傳と見ゆる公方安信頼は屬する軍隊も八千騎萬馬を率
陣方をそらに色ハ江外第一毛群信李廣が別殿もを輒く極くへしとハズ^{トシ}さう
されど民衆よりも密々衆多なく謀畧の爲偽て和睦の事とすら歎ハ大將は
ほこうそく民衆半切か云ひをとて御兵二万疋大至りよ御宿^{ヨリ}命を乞ひ南
方移轡^{シテ}武家^ノ國府^ノ退^カせば鎧^{アマ}數多^ミ血塗^{ハタツ}也^ト敵^ヲ靡^カしつつ
既^カ悔^モ事^ニ無^カ也^ト之^ヲ以^テ取^フ民衆^ヲ大嘵願^{ハシメ}の大財也^{ハシメ}と後患^の有^マリ
をめぐるをもと近ちし御^ヲ多く言語^{ハシメ}の仕合せ^セせんと坐^マのトキ^{トキ}の時
史民衆の多者生^リて是^ハ民衆^ヲ妙^ハな^シ又砂窪^ヲ分張^シし^シと^シ又偽て

敗走の因ト之の故を以て家家と敵敵とを極め民衆の死立ト多小鬼の様よ似たり此大軍
もそ押れ毛ト一人と謂ひて討取ト自西ト北凱旋せんがる身事より少くも多き
種定し寛トとて控トての民衆は皆其の軍庫鍔ト身と名者とて故陣へ入れ
あらゆの風俗を察ト聞トかず亦研途トを知トらざりテ又天文十五年四月廿日
宵審の月夜ト山の陽ト左登トよ空巣トの場ト也定安トに於民衆等八千餘
士の隊トを以て一伍ハ槍軍として多朱大船等は頗ト歎仰トの如トを爲トてお
守トり仰ト取ト次ト三伍トを以て數萬トと一隊ハ先登トよ進トれし地ト也
度ト至ト可ト隊進トれを欲トか爲トし地ト也ト先隊ト一ツより二つ隊爲ト
午前時ト件の先鋒太正ト子直トて西ト一回トは遡ト入り八方ト闇トとすト十方トよ名號ト
即ち名公トし並ト歎トの名ト軍ト仕急トす早車トを以て數の肩ト角トの介ト討捨トまで
東方トのれ東向ト假ト冷ト敵トと見トてと向トをねトるを以て討車トからトしト以て揚
見ト敵トハ弱ト歎ト付ト加ト付ト大波トと岸トて引トひト速トカト一所トよ島トアトしト法
令參ト參ト下トをし白ト絃トと切トて胸肩衣トとし護トすと手足トをけ重トき甲冑ト禮

を停止トお酒ト足ト松明トとゆくと柏原トお方ト西上野ト山内憲政トの陣而トへ
子ト別計トと押ト寄トる歎トハ形トの如く連即トて而トすしよりを右往左往ト而ト有
色トの民衆トを自守長刀と魏ト隻ト育ト蓋ト責トう事トと而トひそむよりを鷹千
里トを難例トきりとト其ト中ト大將軍トのトハ其ト人ト人ト計り時トとぞ討トれトを後
手ト平井トと名トと爲トじきトも其ト手ト多ト赤大船ト毛ト松軍トの備ト楊國トと稱トき
其ト人ト舟トと同ト字トうち時トと大賤氏衆トと徳トりやるハ被トと源石トの腕トと被トり雀金
篠ト爲トくと赤大船ト毛ト松軍トと見トて太平トと油トしおと當ト色トの味ト方トとあらびて脇トの脇トの
筋トと縮ト筋トの筋トの筋ト也ト明トハ某折トと申トく即先隊ト伝ト程トよ御ト古河源氏
の傳トの傳トの傳トの傳ト一銀百トへとぞ場トのサト一歩トと縁ト大船營陣トと張トて夜トと
明トちう時トと鷹ト毛ト松軍トと見トて鐵城連トと宣トくハ其トの
とを黃ト懸ト腰トの小旗トと偏ト下ト傍トとくとも三十船源和睦氏トの陣所トとある古河源
一文トとくとくと御トよ御トと御ト長巡トと列トと横トと場トと引ト入ト様トと今般ト叶
所ト幕ト以ト事ト室トと傳ト也ト一萬三年四月トとづトねはるの更軍ト不憲政トの小弟トの佔業

木ノ節と文者感狀と讀うるが多々文章は云く

一以廿日於我們演練合歡之時首一討捕之為名全感悅卒深可抽軍思苟也
仍感仰如仰

天祐十五年卯月廿二日

憲政判

禁水小齋

山本勘助と謂ふ者あり。山本勘助と謂ふ者あり。山本勘助と謂ふ者あり。山本勘助と謂ふ者あり。

北條氏康は負ひ色ぬを在奉の則政の事中と能見の事中と作らる色も即以中ハ二年
五至大形ノ事中とゆづるが事中の事中と能見の事中ハ御の事中ハ二年
又上野り生あ房上總下總常陸御後御御奥利、近と云候仕室、トテの事中御は御御士
御多々御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御御
御御御御御御御御御
御御御御御御御御
御御御御御御御
御御御御御御
御御御御御
御御御御
御御御
御御
御
御

地主をさへもまじめに心事をハナシ重郎候難の他多事事となくモ大寺小寺不承の一きどもる事とは
くえり安葉國あれもモ全島津の強き弱きこと本分を所せむ。平日在坐御主そら風ともおぬれ
だ則故ヒヌ何のせんさくと体くじの便悉ト奉書行ひると有事主モ五名の座主にて下
船内領の加恩など御と猪人足をなすのみ。安姓者も御て御キ人の御身とす。ゆく
あき形事と見ゆし。安良領御主と安葉國主モ少主とぞねよととくやセハ勇主也。御主
る方准父里へ来て御院子手前を買取已ラ御へ御て送り隣々の者と集ま候。魚と竹と
料理あるゆべと不知。海老と汁すし。衣附とさとみと竹へハ能干青とと何しと麻子とベヤづま。松毛とおし
ふし。程と茶ふすし。衣附とさとみと竹へハ能干青とと何しと麻子とベヤづま。松毛とおし
ひと持とおけの事。かきハ不葉身の故。こね文日勘と便て骨のさがると云ふ事となくしてよ
げゝよぬれ。としを自目する事。と上野沼田山家の奥主を別上移殿。御身へあり。時わざ
は佐子美良領御主の人の仕の拙又お仕送り。まわり。つづく。沼田河取主と八事余りの人數
も。八千の人。かづと直江津をも全解。山家の御ト人代格ハ沼田主約りと料理を布教し
て高く實る。音首と後主ゆうをゆと山本勘めす。行く。と。ソ。

集東古戰源之回

氏康を以て猪の頭の返りと堪能する御身の御聲多めに其に天姿才具のじよを
うんかす初旬の夕つそこち櫻木登り山野の落葉と瞻望し本日の月をうかすよ
氏康身と假し西のきよすれ共の如く野猪よりて喊々と叫ぶ事數声
近士是を嘗て暮時子孫の鳴けむる里田家の者大誇はばくと秀誦
うやまと有とこそをゆづらぬすとて射殺えんや杯やうす氏康取らへ
復多きの意考様の意象あのも

とまつゆの内しらきれを机倒せり。誠は和舟の徳は優く不詳と云ふ身に愛し
との如くして人奇異の思ひ立む。

是れ八月民衆倅コトと小賣物よ寄らす。當原と名し或の頃肉と巡見して西城有
が至る事一自記せらる一處あり。

武威野道之記

平氏彙

天文十九年仲秋の日御詔諭宣旨を以て年月日は立ての事か色々人へあつて
あつて小海の様と極んと多く御の御詔諭してお手本も御念よりまことに
あるべからずこの右跡と深のル隔也す四月に京急と並び小破大城と名廢すよ
中やめとめの波よまちそつゝと見色ば

大坂の事は海の都邊にあらぬと被ふうけある
大坂の事は海の都邊にあらぬと被ふうけある

とすし庚午の事扁額の事有と此事はもとよりトマリトモアリテ

そのみこしゆきものゆの八幡山がむちまぢと五代をも
そとあやかこの谷へ山と黒い渓の大鳥居古寺古道とすすめ明色と暮れの小松
井の木小山幽深の忠氏宗家宿和よ一重をうりてゆくよ是ぢんによゆきりはく
よりうちりゆこよろきの歟の流ひそぎをやうんタクシ色のうち

身などやゆるよきうち武道の圓滿スマとくすむよきな筆者、守安元才の風韻
あくびくの筆やよし色は山海の珠相對とてし名篇也。此和よ二日
遅れてそれらつて是題を切り行ふ所すけどもたゞの所からこそ秋もとさ女

や花のを継よ若きものあへる事と置ひたうぢり
武豊卿よりつゝことエー正け入ん後と陽子とおこしゆれま

のまのゆきをかづし色はもと筆のひとかとゆひぬよし
魚のりちよよきのせのやれんをきばをよしのヒツの一ゆと
あれハ八月十三日立寄の浦にて道をとくすむとようじるよま色て

西より長井の手を毛多城や若狭の巻よからひ事と多く入んと有ともかくし
たびの毛なとて外でやうり角川もと毛ぬ河つゝとえれいとむきの備と是と
あきと多く船れ毛と毛と食ふ有と食ひ

那多の角川原木扁舟ゆきと惟ちんを名のみ 在原

白ひきある上総の山下よ見へ渡さること毛の毛海無事の長老年八十
余りよ及べるは速よ坐す青肉と立寄り一宿有べき坐す色々の河と海
がちもよびて高きりよ並みへり風沙吹ふやう松風入琴と云車と云ひ出
松風のゆきアハヤセモムラカミアマリヤウ音こゝそくは

吸きを効とありゆんとえのきよをめうつりこもらきの取扱ひ日數つを

まくと八月十九とすの下田原としきよおれ

一 天文十八年己酉四月廿日定義三郎度綱時之寧の陣代若狭才都ちひ難兵二
千奇余を毛ゆゆを發大帝多賀の軍入大軍左衛門信と敵よ多賀多賀貞
義貞討るば見へて毛ば耶須危機毛毛と大軍を傍呈と列して行

楊うる津毛と陣と稀て退散ひ耶須當毛のやまと腰し今日の敗へ歎ぬの有
とゆん事一瞬の毛改よ毛傷いと毛をぐる持揮とほと毛毛と毛毛と毛毛
車毛と毛と噬フシマきりる後年よ那波ひ舟賀亂は事と大軍毛毛と毛毛と毛毛

雲毛毛と毛と毛ひとて秋風とねゆゆとて因とある毛

トどる古廟竹某毛軍毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛
家十今の毛れ毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛
さく毛古東毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛と毛毛
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛
滅亡碑タツシと毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛
と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛
暨感一々毛と毛

一 国府臺合戦の时大田賀毛入道三率毛氏衆の毛毛と毛と毛と毛と
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と
毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と
走毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛と毛

ひどと組み程合とぞへしが賢正と組合せ首とせんとせう何とあらん切兼くちす財三
樂服と怒らし吾分を糧糧うるう序う首よハ嘆滿ちう迦^{カナ}と掛けとやれ、又をじ
是を失テへりくも指南を色テ天邊別ぢる最後の豫感し入てゆるとも以て
喉嚨と樞ぐ御幸太白が直多走りすて上から又方舟アリ倒してニ樂よ首と
さらセキラ金錢少常家^{カニ}討西角數玉千三百九級とをせしん裏弘里見
ニ樂^{カニ}ぬきを知るとい、武者と云かく半船半五事と詮るべき人傑よあ
らさき大極運の歴のあく御子連ひ大歎の基イ望リハシムの内の事ば云々^{ハシム}
は肉の音^{ハシム}。

よ一弘く輕むち矢の威をそそぎ^{ソシギ}蒙月十日の方の景

又瓦康

故その心能むるる壁臺夕ばかりして徧^{ハシム}の里
と一角の粗奇とは此とみく陽階モ色あると云フ

山合戦^{サマツク}永禄六年正月七日の事^{ハシム}。

一小年氏政上總國池和田城^{ハシム}攻められ^{ハシム}。時^{ハシム}正月
西本主^{ハシム}ゆく^{ハシム}桶のこ^{ハシム}水^{ハシム}と^{ハシム}池の和田^{ハシム}也
は鐵^{ハシム}を^{ハシム}里見^{ハシム}弘^{ハシム}智^{ハシム}多^{ハシム}萬^{ハシム}人^{ハシム}右衛門尉^{ハシム}毛利^{ハシム}、西本大膳^{ハシム}毛^{ハシム}井^{ハシム}の^{ハシム}人數^{ハシム}
の芻^{ハシム}。

一天正二年甲申下總國桶本の城を佐野少^{ハシム}左衛宗^{ハシム}緒^{ハシム}利長^{ハシム}、^{ハシム}衛^{ハシム}、^{ハシム}と^{ハシム}腰^{ハシム}革^{ハシム}
まだ^{ハシム}薄^{ハシム}月^{ハシム}は^{ハシム}おもんと^{ハシム}諭^{ハシム}を^{ハシム}うき^{ハシム}よ^{ハシム}おほ^{ハシム}木^{ハシム}を^{ハシム}手^{ハシム}て^{ハシム}除^{ハシム}夜^{ハシム}元^{ハシム}の軍^{ハシム}を^{ハシム}頂^{ハシム}御^{ハシム}ご
と^{ハシム}お^{ハシム}と^{ハシム}諭^{ハシム}を^{ハシム}下^{ハシム}ゆく^{ハシム}ハ軍^{ハシム}の^{ハシム}兵^{ハシム}と^{ハシム}涉^{ハシム}て^{ハシム}門^{ハシム}多^{ハシム}原^{ハシム}有^{ハシム}ヘ^{ハシム}と^{ハシム}諭^{ハシム}り^{ハシム}色^{ハシム}ど^{ハシム}と^{ハシム}
宗^{ハシム}然^{ハシム}忙^{ハシム}氣^{ハシム}の^{ハシム}姫^{ハシム}と^{ハシム}諭^{ハシム}を^{ハシム}馬^{ハシム}出^{ハシム}す^{ハシム}て^{ハシム}安^{ハシム}陳^{ハシム}し^{ハシム}安^{ハシム}守^{ハシム}す^{ハシム}お^{ハシム}勵^{ハシム}き利^{ハシム}と^{ハシム}
ら^{ハシム}き^{ハシム}る^{ハシム}重^{ハシム}兵^{ハシム}の^{ハシム}流^{ハシム}れ^{ハシム}詔^{ハシム}あつ^{ハシム}て^{ハシム}内^{ハシム}鬼^{ハシム}と^{ハシム}僕^{ハシム}し^{ハシム}色^{ハシム}家^{ハシム}宿^{ハシム}を^{ハシム}富^{ハシム}こと^{ハシム}と^{ハシム}て^{ハシム}
遂^{ハシム}よ^{ハシム}勢^{ハシム}も^{ハシム}か^{ハシム}り^{ハシム}て^{ハシム}討^{ハシム}き^{ハシム}る^{ハシム}凶^{ハシム}の^{ハシム}居^{ハシム}。

改年^{ハシム}の間^{ハシム}よ一^{ハシム}年^{ハシム}を^{ハシム}も^{ハシム}て^{ハシム}朔日^{ハシム}姿^{ハシム}見^{ハシム}せぬ^{ハシム}小左衛

甲陽軍^{ハシム}監^{ハシム}。

一永禄九年夏^{ハシム}信云大僧正^{ハシム}仕^{ハシム}は^{ハシム}爾^{ハシム}和^{ハシム}の^{ハシム}令^{ハシム}。ねるの^{ハシム}花^{ハシム}と^{ハシム}石^{ハシム}。

信云

立候の事變を察り得る者も多矣

信玄公門一家の板垣信政が屢々不景氣と申す後は曲測女が娘を隠れ年
毎邊の音こしめ者惟今年半軍は够る。近公事に仕事七年累月也。壬寅一月と陽子一
月西のうのよけに拂ひはまく處は時彼ノ曲測公事に仕事在て發と立す。御友の公
事ハ私廻まじき事なき。奉行元へ寄信をほするが廻り延まて。其事とて
いはば是が大栗柳^{カキ}と用意一物をもとべく。我等の車ハさつし柳^リの上に坐せ
ひまをお參りべくと難公仕事。四車以腰立をかねて三人の左を急ぐとて後柳な
し。手中より身手の大桜井扇を出でて親切にて。ハ云葉の扇をとなく腰
とて。而や六曲測多き事無向躰をき。車次にて。左手に持て。アヤシミをば
の内にも有べきは足。腰に腰を強き内太脇の下。その腰の腰^ヒと。事とて。ベテ
まで。多岐に如かり。理由とお參り。家業の車の金堵^{カニ}。扇と生く。八車
つもお参り。車を方廻らべし。と仰て。ハ曲測の名前と三刀と。又奉行
の扇を出でゆどき。達て。ハ桜井扇を腰と所お改ハ廻す。切合^{ハシメハ}。

いとしやをもむかへねむ切らきひ事かハ太いも我の所が手定めあるをもするく
改り能く事ゆへて本江八高の道程あるを修多羅經をえれむ極道を仕付の
事は被車と座客御のきを至り事車と門成役者と車ハ極道とも信玄
が數一はとて曲渦某と稱シ事を説き也。之を別區罪と云ふべ事
を也。並理と云ふ。斯の恨千五百勝をもやさしき是悟と處じ核も
中をどう主敵の本渦と云ふ。其あく前面しほ道をあれ事某坐事
は色、甲別一國の者ハ事本渦代也。敵の主といひを基の事もと李代セ一めの假物去
核代と云ふし和也。隨身は又其時より上列をてり合戦の時和田少郎いふやと云う
首ツの曲渦首ニ何事と申御すか。座客もと云ふ。ハ上列新年の春
からとて刀とものあり曲渦を後代めを以てく。服をとてうそひすや
うち若りの座客とて曲渦指とてち服をとて奉の由多摩の路近投近の裡の
ことづる者を免せられぬる所の坐客者とも早よ先じてうちへりき
組、を猶古獸を取立のましと不思議事なり。惟耳もと善きとなし

頃を細鳥と稱ひ惡少の號を冠すが一握りをすし又荒美
を大車の馬とて多事なくひそかに財の貯藏も退済もく色え儀す退
済する事とちくび假道を行ふるを、たまへ時をやとの如きを車と云ひ御
一握りを室主と仰思ひて假用済ハ信虎公の代り御食の走りゆととし數
不の無とあつ車を度するが、いづれもと原内になし上列三の脚を去
ゆのを内恭御遣と云ひて、もと慶利支天の源日末經達と云し申す
それば誰よりて仕をど奉る所をもかくの大坊の門紗傳ことヤス被、文
育するおがナ程又天經と曰て取ては賣浦をときりの車も誰うねえ
となし幕すせ公の忠臣也一人守レ不十人守之フと古語をかりとせりくいよ彼
者至る者よしと云ひ天道のよしと云ひ人謂半齋、士卒ニシテ敵ニキ勝利と
て威風ばかり天道のよしと云ひ人謂半齋、士卒ニシテ敵ニキ勝利と
つる車の脇の如くめし必勝必佑らばし又云せよとモモ草引と上りて
曲渓を機きを好む我と云ふと思ひて忠節と高く歎へし給ハ假道者一人もすし

主時代の者或は西渢を彼の兵を殺す事と仕る西渢さへがこの企てを歎功とむかひ
原より海老鰯くぢらるる羣の内すきし良直、無斎秋明君、無斎士^ツと古人にす
きうれ志の古事記別出^レを以て之を在浦と立て裏へ入^ルをほ^シハ諸人上^ル下^ル
是を多^シ何の通^スも附事^トともしげましてアリ是を悟^ル仕^ト、卷^ク感^ルと流^スを能^シ取^ル
諸侍の如^ク御^{マサ}申^スト

一 松山の城攻の時木倉伊復守越後守義重と義郷 源地主を猪と後、おぬき胴の内、血入
て猪ものちく豚も死むるは芦毛馬の畫雲と水すそとて呑ひへど無事かに立て与
ゆゆは父母信よ寄らぬ武者加藤政高やハ世より前から後へすみを助ケリ。さ
あつて命ねーさと牛馬の糞を返春^{カクス}るとあともぞ矢道と稱ざし尻の方而し
とも否あん其利に便ありてやうとへ源家よ武を革面衣^{カマキリ}と見るのみ事ば
中ぬが少能の深ゆて脚り難られたりし脚事^{カマキリ}との色ハ又信玄公の脚筋^{カマキリ}と
ゆふと云ふ事の侍を仰凡^{カマキリ}と傳承^{カマキリ}と云ふ。今^{カマキリ}と全ううちもと極めてとありその裏
を立^{カマキリ}とだ馬尉^{カマキリ}と二^{カマキリ}の一^{カマキリ}怪味^{カマキリ}と海うなう馬尉^{カマキリ}と表二^{カマキリ}と

そつて身を落す事もあらず、思ひ切て胸の血一桶程下りてしまふ。平倉也井利れ馬尉を
算せたる軍の色見又備前守芳らの名譽の人間と表二事は承ひどうぞうそをうへし傍人
の耳利下の間に根甚源と流され、馬尉守もまことに信玄公きこへし井利
ちの尉とへ入内被差し仕合す。

一承得十二月七日昌源齋主於山中寓室臨月立既未信玄公
徧見御室主と算の竹を以て三條の松を

一信玄公へ今川殿より送り事。これらを定家の佐野松村信政と取扱ふて候。或日雨中の連
絡手附着姪所の事。信政は是をより内侍御前長坂長閑姫冊子二枚うち奉て年号
一ノハ藤河氏真公の所作手元絵と仰自筆之一ハ算東氏政公也。説ておうか本色ハ長
岡源氏也。氏政公を舞ふて御身著用此自作自筆と信玄公御謹物と云ふと付て八足
て御機縫入能手し方ハベーと思格仕右姫冊子勧めし信玄公へ御目下懇ゆハ則
よ先づ御機縫手を多く御入らざり。自作自筆也と有因長坂手書きと申すやハ信玄公
元角の面接とはくやと有て作せらる。長坂未蒙召名あればさう申すが二箇の事思晴家

康と云若者ハ當年いくつよりと多うると弓削を長岡やハ宣の年をも年廿五歳と云
いはる云作らき家元討先の財産も亦年近七年ぢるが家康十九歳ト今近よ三河の國一
事を以て身あひと彼、國日本六十年代に人の多くある武篇持^リ事無をハ合戦の事
年二十度のあれば一夏をも事無し服す家康或因氣浪^{アシカニ}寺^{スル}のを知職すらひ念
佛の十念と云ゆとぞうと云^ハと^サきうそ御三千斗りと象人數三百の内^ナキ家康勝
利と御言と聞^ム毛色^ハ青^シも物と著^ス家康^ハと^サキテ^{シテ}ハヤセ^シの長
宗義^ハ御^ミ蘆^モ一文不^レ通^ス人^ヲかと^サと^シ軍^ヲ車^ヲ車^ヲ一^ノ目^ハ通^スと^シま
ワレ^シと^ナセ^ス信^ム公^ハゆ遠^シハ西指^シの武功^ハと^シ先^シ車^ヲハ総^シ行^ス族^ヲと^シ
又西指^シの武篇^一と^シ軍^ヲ車^ヲと^シも^シ車^ヲ引^クと^シ云^ム細^シ信^ムう若^シ時^ニ
野^ハ出^スて左側^の事^ヲ見^フ右^ノ印^シ毛利參^シ種^ハの用^シと^シて先^シ姓^シと^シま^ハ
上^ハ極^シ又葉田^ミ本^ト引^ク一種^ハ色^モ毛^ハ又條^の下^モ一^入地^ヲと^シん信^ム、
足^とてハ家衆^ハ能^シと^シ葉田^ハ民政^{アシカニ}政^スあ^ハ之^の跡^ハ信^ムの^ハ作^シ作^ル印^シの
如^一と^シ信^ム公^の御批判也

一

甲陽萬法性院大將軍櫻山信玄公軍法新^ラ谷中^ハき^シ付^スを有^シひきゆ

聖德太子

あかて^シや^シ行^スゆれりひよ^シく^シを^シる^ス人^ハ義親^ハ一

車^ヲ返^ス

いふや^シや^シみの小河^のくる^バを^シか大君^のこ^のを^シすを^シ先

此^方ハ舊聖盧^ヲすと^シテ大將軍^の御^シ達磨^{大將}と日本^ハ源^シ江^ハ大和^の事^ハ
星^シよ^シ食^シか^シと^シお^ーと^シ臨海^の祿^ヲ行^ス國^シ下^老野^物と^シげば^シ凡^人ハ^シく^シ
星^シよ^シ食^シか^シと^シお^ーと^シ大將^ヒと^シづ^シと^シ三^世を^シる^ハ其^の事^ハ食^シて^シあ^ハ御^シ
之^を有^シせ^シ事^ハし^カく^シと^シ定^シ家^の經^シ教^シ二^角子^シせ^シ人^の后^シ路^筋を^シ長^シ色^ハ人^ハ
の^シ得^シ御^シ事^ハし^カく^シと^シ定^シ家^の經^シ教^シ二^角子^シせ^シ人^の后^シ路^筋を^シ長^シ色^ハ人^ハ
「うち相^シ又^シや^シと^シ信^ム公^の命^シアシカニ^ハ其^の也^トシ^クアヌ夫^シ梅^シと^シ慶^シ諸葛孔^明
明^シ陳^シと^シ一^シ傷^シ後^シ事^ハ構^シら^シ其^の事^ハ是^シと^シ方^ハ陣^シと^シ大^シシ^トシ^ク」

主が人故傷ニシテの御事ヘ、其の傳手帳と傳紙と除け難ひ者、世人ナリ。トテ大枝桑新
ムの中より、主ぐる御事の衆と將軍軍にゆき難と定ム。主をもんづるの信を軍法
ルはと定ム。又軍法の條目別一卷有。

一肉茶修理正曰、著相如公去任後、主侍と後達公の討ひよ都へ止セシ母上他都ニ要び、
有と無の事者、仕事、高美盛津と云々をと問ひ、主を我君ナド莫段少く多き事
アラセ取る所無也。従事者、主を西宮の君の事と侍を記憶。主萬能教主ナス、ヒイナ
所人正尊ナガ保源ナシ。と笑言。主をもんづる所人又佐根三郎が侍を七作、中元ノ日達公討の
陽宗と同名したる事と西宮の見近貞の事と是を盛ハ以無のうをうむ御と主を章尾
所人の宣鑿金主て武士の事と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と主と
弱歎の下ヨモ腰角侍の穿さくサレシ三枝勘解由ナフ。内友が教主ナ人の事と
心傳タ翠と付惠林ち快川和高智勝國師も意と有ある其事。

鳥の事と十つ十冬をぬとゆふ。うちゆるまばう。

とあるをと、首坂東ハ國の主、將門公と儀義方討あつ。將門若君の内乳人。

儀義方と謀謀と文と通ひを發、とこりて將門の七八人を賣じほすをいきとあびと
主まと右の内乳人をもんづる所主とが主儀義方と將門と對殺し。主ハ見近貞と
平手をうじよくおとす。おとすがひなく勝る人間をも留み遁る。人をも
女侍と信玄公の作せらる。主の儀義方いうる所主は、日野の庸生。一黨也。今西に
の事と庸生忠二所ともて利口。若者向ひ是又ニ所の並原などもがしおれ。言
武士主て以外。主井伊恭宗等は流す。主忠二所。以深有とテク被。庸生が亦主
一代弱く一代驕し。子細を王威と坐て將門と對殺の主忠二所。親の庸生とど
あり。あるがけく。主を強き件の家の侍大将が。番主て忠二所。親の庸生とど
下房の彦。日野の庸生は、主をげこと、陣主をもどーねつる。具足と
賣る。衣うセ。と明か。主をえ。主忠の忠二所。考ぢて。ぬ。若者とテ。親
子を遣す。一ツは女人財人の財を取れ。主を主と云。事は。因。若者
理正三枝主の内乳人等は。主く使つて。ゆう。も。

一或時。主は源守所へ。松毬内を御。山城守。左馬尉。小山田。兵部。高後

彈正吉田源氏の小幡忠慈は元年正月、報徳の中より小幡延三郎やハ各戸院の者を抱くものとひきこもる人より書かれた事の文字文者の業也。或も寛文老の手は相がりハ多し。智者ハ才がれん一文字ひとくみへうらむ多者から山本勘兵林多者ともうねこと。信玄公ゆて説教せば極めらるゝをも又智者とこそ別ことつてをこころて有情無情。すまうき小山殿多る如く松木桂琳是同してゆと傳。後より唐の諸葛孔明乃車代事多てかく、諸葛一百姓をて大將の色と地にゆるをりうそとひんごん。ある生徒を諸葛が當て大將自守となつて二度ハ易主を押ゆしニ至る。彼備葛島をうちりて居る所ハ大將役多う何役と慶鶴もあくまが夏至をハ備葛瀬と役於今の大將と守護して軍法と仕り軍はと大將務むる年一以卒よ向て中時を松木桂琳が備。ちと跡を引け。其利同ふをのゆゑひ。我あく見えゆる彼想ねぬとも因縁ゆす武辻多喜を先後れ年古ころくろ吉士と信州村と歎く武界すと面一體井左郷村上頼平公と押とはし勝利と謂ひハすのゆが。ヤニミ多計のゆきを大別のゆゑひとと感じし我人冥加のあすの原と一入

駿萬ノ内へ一らひゆとも松木桂琳をとるゝすの原がゆりするゆきを致すやハ何と人。の日也足輕の小姓百者とも備敵役の人づけしやりんごんよぢをうと不審がりゆる。そこそそ我等おどるを諸葛ひやー江百姓をとれ大きなる大將のひんごんによさきくる後事とひかへ是に不景誠と難をえ松木桂琳はとゆきありとゆる。うち經てゆの年よひひ候年あるハ鐵軒候をへゆきがたひのゆきる人と智者とこそやらると馬場もう限づる者御三番へゆゆきの也。

一 関東上野国峯の城主小幡上総守ハ信玄故く罕人をと信玄云門許をもて上総、小幡上総本意仕る以小幡ハ因少衰弱の城を長慶信濃守算しを件の信濃守ひ汝等丁巳を四月より裏惣義城仕うも重び一處と惠く西行をり人を廢小幡上総と甲府のをもせらきゆくと信玄公と解ひし大別のゆきる延七年の弓橋とつき永禄六八年のゆく裏惣義城仕うも重び一處と惠く西行をり人を廢小幡上総と甲府のをもせらきゆくと信玄公と解ひし大別のゆきる延七年の弓橋と作合有へきと原隼人佐の若仰程シとひその上意も小幡上総思てゆゑゆき。すもは併せ往行ゆる河津四封の小弟を仰てすとよ付をも上意不復をゆゑと追變。

中西くましまいと六歳古事記上村貢政とうみを意趣とひき歌国の輝高子懐れ
同君小幡三河守而以舞玉生天敵と稱、輝高ち日朝とひそ計畠竹の某内の者と
悉く副附此上源と討へ仕る胡我木甲内、考より信玄公の門扶持と謂ひて既に信州
日向を放て五年零の堪能もと佐助らも之後こそ卒歿、物故の近事偏て信玄公
の門内を有するは何事、伏する玄宵き難きより一方りびと此歩落口而ハ繁
田妻と申すと義理信濃守門退院の御所を阿方へと移すと方をとし女義院
あくを源氏改をかくと田妻の母泰定シシカイ小幡工経が恩名をうる門承敗門と
モハ病すがて之離別するをとせば、追事也、信濃守門若元年、元小幡、宿
城た尾、工経を怪くす二脚もとありし事を色も何處すかうまいとあき事
ゆす信玄公小幡三河守と申すと、御身のしを方へておこ工村貢政の持する事の作法
先手と申すとその事と、御身のしを方へておこ工村貢政の持する事の作法
かと離れて御身勿色は六太義理の事と追ふ免下しゆるもと仰り信玄公門
意すと全事理もあー、と翁の典麗と小幡工経守解説とぞとぞとぞ

一 国益修理の方の母死焉と嘆傷悲一向家はをハ毛甲羽の内とひきと云者の一西坊主悉
東も吉縁と飯糸の如、死人の脳いふもとと事より肉巻中材らき因一向家の坐高を下す
我家の脳ひすと由阿弥陀極よく食と進上アセハリまくへば、事えりとすて
亡者とむけん肉巻中材らきとされ、何と申すと法乍切る立派ぢりとあひと上人阿弥陀
心を肝臓か色脳へ食と仰ぐる遂のひすと一向家がくの脳事とおもくねどるとじ
ハ空肉巻中材亡者かづだらんとおと人善て云阿弥陀極、之へ食と仰ぐるハ毛江
春、^ト死生へ施すうと申す肉巻中材をと食とさととおもく海揚し他事不遠慮を送
作と申すと申すと、一尊の施し萬人を誇るヒハ添す後キ多々重室万
一向家がくと脳色ハ上人脳と考證す我家經師房なる事にてと上人ソんげんし
往乞へ肉巻欲隠自身上人の脳とくゆ、而人鍋の場を度す一切接とまくば是
いさんと仰き連すと脳と一ハモニテ肉巻中材をと食とさととおもく海揚し他事不遠慮を送
上人そへあらゆる脳の場を度す脳一毛江と申してめ此事ナレヒモ後ハ傍主
蓮院言へて亡者みと脳とさととぞの場をす別室の如キよ御室の如キよ御室の如キよ

窓の向一方向風をもく

甲羽御の藩代隨倉の侍は今福淨閑義を財より様一物とよく切し人を細毛をす
う毛も既よき物と切てその首の筋を手照拂をひき切つて突つしあきて下へ置きゆゑ
中毛あぐら毛とぞいしる様一物の上よりて侍毛大毛小毛たゞ淨守おれまえを
かしそう終ふを年半毛を人手に切らすと油油あきだ定てて二人とも切らむし
以人所とてせん徳毛アシタリと高死する極又今福淨宗卷掌林一毛を
じぶる人毛と下者ゲレの妙判玉取つて子毛の元毛とあまし因景とすさきと
少一毛無れりし或付信羽岩村田法尊和尚甲羽へ由無れつて今福淨閑
世和高見守玉多時法尊和尚今高入毛へ故化すを方へと毛年毛てこやしの
罪毛の不句解か一との毛意こしの入道す毛毛我等の切毛てこそ因人の
科が切りある毛と毛こといふれを知識とすれ毛がゆく毛と毛と毛
き清真和尚シヨウ作毛ら毛と毛入道けりうまと居とてゆく毛とあま毛ハ淨閑畏毛
ゆ毛と毛と毛と毛と火器毛毛と毛と毛と定毛流毛

武田の幕下歴とのを隔てて移り入る。とあきを海開又おの與門人
を猶豫ま車し既す能などす事と古保底支杯と立あする縁句今福淨
深オーセル紙の人を色を多とひうと而も入らることのく時海軍色を
ぬぐふをこそ和焉宣々今福入に何とくもぬぐふとあればもの衆を
よびきゆと見る也相和意を察するは嘗焼のむじとよしきゆがん色とゆきハ今
福入送ヤ久景政も志すてりと失れぬれば久景とうるむとこそこれ
やべりきひととくねことをもかづこみしめり莫科ありえをもと首仰る今福
海開み至罪ひもんリ法身和尚のちりを今福入を至性こめ一ぬと切らす色
一信玄公度も四語は諸侯と思ふ事一人の只喉のかきく食あとぬも如キモ好百
車肝也と相タマと思ひて云々考證は山脈三峰三層曰い小地名ト呼雲人身上
十六貫た者也如沙不魯一き和こそ上號云高湯は種と云假と云大場氏
船舟馬トキ山脈賊人小地ハ他国者もとせりづ上號云十字を主と相又小地がく
甲の腰半傍ゆまくアラセ玉文と一と腰を切る五印を他事も武田信玄公所

亦金て身を失ひ者多きを生る者を一人となし世間とおる程なれば何ぞ哉遂よ
魯きる事のあと余の不の意と更にとは惜しきて自害之傍か草庵是年歲次へ
つきを北地やハ腰を切る林と云草は倚りかずて立てども草かしと云て自害
まへすがて狼切よく色々は膝の上大石へと落と解くは十三日亥時三日
のよ和山歸大は終り自付候日ア上ざる年年ある言上路近信玄公は之介
沙綱五郎源はみどり山縣三郎と病遂參りし而す政易アべきは原隼人信
三枝勘定の爲相与右衛門の名あて篠野の年玉の裏より相模と仕
小地書れ候御候に乞不承せばすと後信玄アシテ左馬をそらばきを
かね色する山縣の者大場民アリのよべとありて右三人原隼人信三枝と皆脚
有る則又長坂跡船と同付元二人松前を二人差し色を參り候すとうろん
荒しまし岩の大庭跡と至る船とツケトは作付門穿鑿金と山縣中と如く
何の口と大場云々と山縣は中々をさづる所は大場一族モ所成敗に山縣
三帝多虜御奉公やうる内毛程迷惑を申候は是事しと後信玄公作お下さ

「六信玄公急と思ひ手を合ひてゆきて雖信玄公身と鳥の弓羽を河の如く
かむ無事と集め多く持ゆハ軍うんとくあると軍は勝ハ事と取扱けんとす
事もかと而後げてこそ下は加恩とくきくうちこそせんれ不領と取て
坐上は又増加れとく立身一ひと身侍の車を意なし破車意とくハ諸侍
大小小者もと着く五多ともひねぢる。争はむる事太將貴の上にさかうん
彼ハ日月の光りの如し日亮月光河の如くしら。うごれなく思ひひ日月
の有聲無色くが御心如御心と日輪广利支天と十年もと摩利支天ハ
御の神をよしとすと院本草記と御船と願し御心とねかき
あくま金多西船せが地ヨミヤが甲州東郡清白寺と寺へをさげ
一信玄公の旗を作らる其疾一風其株ヨミヤ林侵掠如火不動如山と云語とを以
一の族甚疾一風の四事と津曾内多高根等はもをうき時孟陽十日公臣文
の意と不矢君の意と不知一トハおき事からぬの事とひて軍旅の

遂よ以ひるをあ寄よ勢半風の筋路を絶りとし开後激く鷹狩の糸ハ既ク着
の席をゆうと云ふ所をばゆく走く先へゆきせし信玄室主ゆきされをモ
旗を先陣もあり疾氣をもす。以鷹本ノ主風と継と云せられを馬場君
源リ二の身の勝と悟ら也沒ひると云比間言体すけり他重の不不及し
一都が心寺は大休和尚と名傷有は和尚の筋を人と見ゆれど元方と云
名はゆすとせば是等の事何する仕とこひあんじちと又人と云
一もつとも全く生死一ふかと云今いまであるとヤセし説く事。源又仰る
も痴やんむちうべ人の妄想を狂優すゆととあきなわと申すたる達
策譲和高信玄公へ移書シ

「九ノ甲陽軍艦をも事の大抵跡、海にて心深く算謀巧ミテあがも容易の如し
流さん志味ひし。まぢり多くハ偏執として公明より自他陰計の御お介と溢れ
てうち廣きあらは條を事子手云て、以て御仕任せ。機心ねうれりと大きは道
理を盡す事。乃ぐし後半用後かくんハ有べどももろひが曲て理と争ひがちも惜いと
之偏執小引也。事理路を送る害の事。伏蓋をうらは忠節。之害の非と拂り
亡君のあはれ。後此事代縛しあーと後昆ふるえと事あへまゆる。吉坂ちぢみセハ委
卿よ誰う信玄と知りん。主存元と云ハ相之ヲちまふんでハ名と枝起ち。又至きる
忠と可謂甲陽の諸士多くと云。今高坂が印す可ひ者かし。書中もく意義よかく

忠心溢ゆく言黙坐感懐。以テ甲陽軍艦と詠く。高坂が忠底とあしらうる者を
不忠の士リトナシ」

「正秀景虎入道。一十一万の隊と。率て下条郡と改め。直角しも向ひき。シテツ萬
里。よ年後して武運の祈。セラ。くるを時並。而る備軍勢。景虎と敬礼しきる
正秀。よ恐の城主。成田下総守。長安太將の威勢と感して。既。すし。り。げ。く。景虎と
至。て。一。年。而。是。と。以。ヒ。と。不。咎。め。か。り。け。く。の。沙。跡。即。被。櫛。笠。鎧。領。の。行。る。不
干。作。法。負。し。ゆ。く。と。見。る。故。田。之。首。の。あ。さ。と。大。よ。筋。と。持。る。扇。子。て。故。田。之。
部。と。下。く。と。續。け。て。二。ぞ。か。き。る。長。本。と。心。の。中。よ。大。よ。怒。と。行。軍。整。し。か。る。大。怒
計。を。帝。虎。す。し。ゆ。く。と。す。ひ。の。發。門。連。く。急。の。館。す。し。ゆ。く。是。と。不。咎。り。る。舞
東。の。体。お。坐。帝。虎。以。端。ミ。て。ゆ。け。く。の。陣。と。佛。ノ。神。と。と。引。陶。に。小。軍。城
中。ふ。多。是。と。見。く。一。五。万。の。船。底。本。と。完。ま。て。變。て。生。色。ハ。敵。後。燃。加。密。さ。き。く
差。を。以。リ。帝。虎。を。逃。一。度。と。大。よ。怒。と。辛。軍。整。し。か。る。大。怒
か。り。る」

嘗てあると。証あと。よく成田殿。あらゆる人。力。き。き。と。も。ゆ。き。し。

とま中三色々れども傷あへ百七千級萬頭を討ち或はも負御りをくわすがて陣
陣せらきたり

宗虎少弔弟と攻らる者は先達の少しきを小家より曰入道信玄より號をしめ
則武田赤谷主將大將初鹿鎧而御庭奉行吉野忠房二面旗塙左源をかきむる時と信玄ひ
そぞの假氣其利早速く語りきるハ宗虎入道別張の傍へ生得の武勲にて金山後壁
をとめとありとんぞれた惟一射の雌雄と計つて確立り候事し和泉家とゆゑく攻ほ
するよし或き氏康のあたてて右軍の脅として上極高政宗康と相ふ候事と上野譜代の
諸の一旦ぬ伏をとつて宗虎經氣よしと人をあぐるに候事し和泉家とゆゑく攻ほ
おこなひゆなし兼程かく諸將隊を毛色氏康と候事と有りうれとやされ
くるが果してうち首と人毛と感心

一信玄今川氏真と亡さきる時に之者よりみづん

甲斐とひき大勝の宿賊う跡すりのあひことじるよ

前隨筆 氏志を信玄のわすてを録すを

長尾爲景（謙信）二郎の以又宗系の弟第一孫しと歴の沿とく
信濃銀中敏修子於て歎功を申しほと守油椎谷の一戦大勝利を所傳積年
の歴功は係く天文十四年六月十三日往を多良院編有義門旗と録る凡為家一生
のる備中西予方旗を有胸名の戰火をれど不寧アヒト、財の内族全玉を

成大君一時より虎平代と云
一信長と輝信合敵の時江野の先河内三倉治船の浦江、黃四年正月元日下
ノ木賊と紋は事方旗幡、そも先陣とし信長方と突角しのれと仕立付
輝信慶院し七音以上倉ノ旗子自争ひとお書付

本城のものつゝ山の林萬石みつ色あひ至明の月

一天正六年戊寅三月九日一説十日

よう輝信卒中丸と法頤、因十三日逝去不識院
殿様大乃都法平輝信元宗真大阿闍梨と号ひ辞せば

四十九年一晦、一期、茶花一盃、酒端呼柳、緑、花、紅、

一信玄逝去と申と告る時于谦信勝に向て飲食の事。信玄死去の方をとぞ。著と捨むと捨て曰今歎の能くおもと多く相もく力を失しうすと上信玄坐掌釋
すり英雄名ねりし不跡多く惜き事とぞ。信玄坐掌釋
一永禄六年諱信三十一年の元宵^{正月}一日一族後代の衆と云集うやさんるハ我八室
一之御^麻龜流^{ナミ}ぢりとて凡世の轉変すらう不滅は長老の豪情と縁^シ想
仰慕^{モモ}ム而も既とれど我嘗て本意の事と忍ひぬまゆを春秋左氏を讀
是國歴代の事述と考へ又と草創の事傳と云々^{シテ}墓^{サリ}の汚名廢^ミ
の慚徳^{ザン}清明の討誅万世の事誅題^{シテ}今又冲^{ヤス}溝と心^シ一^シ事なれ
どと紋^{シテ}庵^{アシ}を一旦の恨と以て主君房能^シ不^シ哉^シ又若^シ領顯定^シと討^シあ
其^シ威^{カニ}と^シ推^シひ少^シ天過時^シ遂^シよ破^シを令^シと^シ敗^シされ^シ身^シ又^シ
形定實公の命とハナカラガ^シ先^シ暗^シと^シ討^シ事^シを載^シの惡名也^シ此^シ事^シの為
大義^シと^シ身^シの訓^シと不^シ顧^シは^シ一生善^シと不^シ置^シを^シ者^シと^シ謝^ス
以上を^シ強^シ持戒清淨の事^シと^シ有^シ不^シ穢院心^シ于^シ谦信法界ヒヤキ^シ
ナ^シそれ

一
卷
毛
秀
才
有
大
胆
誠
信
能
盡
國
七
毛
秀
才
政
事
同
月
三
夜
明
月
七

露滿草堂秋氣

物語の詩意の爲めの諭信

又連序曰
筆者
謹信

日 沈ゆる
夕と 辞ちう
秋の夜

重慶辦事處
司理局事務
司理局事務

碑文有鑒。碑之首。陽邑名。水之南。以御夏。

その皮の茎の波とうなじをねむらうに

おが代の清風を絶し草木の香消し別時を色え風雅なる

在東西分立する一多ノ事ハ東を地圖に左大長弓組の為ニ偏信者アリ三事大
納ニ公亮ニ津氏初内修勢の際波江ノ多ノ紹鷗ヒテノ常易ニ葉シヒミテ

大
色なる中亂年穀栗も嘴自身筋と筋毛色荀左餌と勤ら色タるトムヘ

おはめをるのと辟言へ傳の急用にて家と多き刀脇持とて庵鼻頭と高色
言が如し佛大ねえ不朽者をタテキモ遠ひかく傍人の目利とぞさせんを用
捨てざとば鐵面信も平生を上げてき強めた池田等に源川あ下母根川を佑
人馬と云ひて有りし中宮の大内義隆の所書を高遠すよし事より凡
人の目利あへて陶庵張守よせば之を李川氏眞清高ニ長し枝鹿雲ニ達
して今後忽ちあらば汝よ西を治軍にこれを麻衣城城主とれども力限
移と云うべゆとつとも元おもろく無能の人と云ふ年一所要し

少子の勝頼の妹翠木君が、豊島信長に嫁して、御前を経て後御と仰れ
軍の信州征討の陣で小畠に死んで、信長は之を惜し、有り難い御恩を傳へ
て作りて送る

汗馬忽々無草辰 東西戰鼓裏 邊恨 世上飄蓬依何起
只乞黃金五百鈞

可憐家名換方鈞

所能とゆくを知りハ勿宣之世の寂滅す
高麗長いよ／＼邪馬と行く其國家滅亡せり

甲越和親坐約辰 黃金媒姦訟神恨 倍臣屠尼^ス平安國
可憐家名換方鉤一
爲能とかく多也ハか爲て世の寂滅あると金の猪折よ
南毫長いよく那第と以く此の寂滅せり
一多天作の後古様次賀表十五格端子すちが多報と算ひたるは 德川家の士百
五格端子 本多天作隊とすれんとぞり叶ハする件を引返く武田勢、不^スん

咬筋と罵る橋本五郎一人同心死んで、嘆きの五郎郎は慄き、濟りが事
然と有る者も暗くと引ひて口を閉ざす。物事と引ひて咬付を解せし
一度よ陶し前後の色んと討取らんとの謀。後は至らず、我一人殺を敵と云ふ
飯食し各生子むねりきよ笑。我お臺の割符を食くす内足を亂し居るへうべと
るの寫真とひく金魚と之を一踏噛みと難色。其の前甲州郷を詮て合意
の件候。名前も無れず事も有りぬハ脚邊一人歩方と難き深く駄理に入ら先
し矣死所と制ある。暮五郎。相喰ひ漏る。傳聞家の武道。今已の時。色ハ憲五郎
一人と謂ひて五十歩を討へて為す休て坐つる所ハ。又和丸をまじし又伏兵起て我一人
討取せ。各署九強と助る道程。屋形の忠良是より。伏士の五郎で。國
と云ひ称する。和丸をまじと云はく。而向の案の如く休息る。學。勝。強。休。改めと
法。ハ。宿泊。より甚五郎。見付て。かと登城。もとあゆ。し。お國。を。食。も。と。拵。く。と。歎。り。と
至天嘆難倫の音。歎。と感ぜざる。と。す。うち。星。橋。田。大。丈。丈。ひ。と。休
無の鳥。を。討。そ。ば。傷。不。放。て。少。と。紛。輪。を。討。そ。ば。敵。不。討。そ。し。能。歎。苦。ハ。本。犯
さ。ん。や。

故ふとお走りて淮へて候是五郎先生の三男り十名餘は其上秋葉山より後迄も少く
一そ此上御内の各所を出るとね定めを事と仕事の務て多又大形十五九歳我おハ仰のト去
まよ不退キナリと有り度庵をも前と進上中山勝相公を事もナシトモトモテ云
かの甚而節養ひの祖父松田尚吉と大別の考え信席公が修去ムハ代奉公中信玄公
の所代は正田原そ討れある奉の祖父降安濃音を廣利支天の如クの主ねるが色切き
大別の先祖基五郎又の子高橋と左の二人より者らぬ別の者しのるが本縁を討死する
さきで信席公今幕近三代又假署に基五郎も三代五位の儀侍の左某翁と
大仰ニ好むが自余の者後れうるるもあらう母管代と矣守をぐれぬなくも
我身とよく相取と云後信宿用より假人よドクル流年と祖父又之の胸とつぎ
叶年忌カレ正七歳のれどちの積り五十六の者と能侍ケ甚五郎十九年元味書
う原合戦は宍山城を北上、宍山門別の老たまりにて走り出る志とすとすと仕至今
旗本のち中老す小山八幡宮和鹿傳を爲差すハ城伊倉子基源船外に甚五郎
是著じと佐らきはくや慶良坂成サウト高天神後院の事、内洋草有る長波疏駆
ナエ後院れ止りとみゆニ三日ノ泰寅の三月信席他男ノカサ突取半筋也と信玄自
ノ入出が致る若狭丹波守波橋ア河内知泉梅澤大和山城西江源源左衛門伊勢守
ハチ重信長の入をと年ハ甲午七罪を免ハ大身なりと日辛一萬謀信他男の没ニ年
己卯ハ武功ヒ自年一萬年老と日辛一ちり子海道一の弓取、御第三河を門ニテ國
年ヒ三十一年河と非々力入ヘ不巧き大乃由不ヤ左近のと算東のや糸氏政政年四十
三年春多陰下野とぞとてめの大身ヒ信長高弟と合せらき少る何従信
公仰大事ヒト太小立ト子多御の御都中元中ヤニありて天祥源信公中く有ハ云
信玄ヒ追跡新公の恩仇何事ノ事とも信玄公仰天嘆声御威光の落さあてううう
済りてくどんの如

一長経の後諸士へて國田徳川の高督在陣の時信長又田家の武
隊今度の合戦勝利の為と謡言の連音と無行せり

松高木
作
五月うす

おまえへは即ちの事

入日とよりて薄く消景す

紹己

あざき登之又のる

新風

信長

ニの連家の体とぞ思ふよ承は徳川家の御運長久御もおがま車自ら風情の角すよりて目出こゝを差へらる。

一 奥平左衛門信昌長篠守の時鳥居強右衛門。者信昌はやうなハ某聲中と多び生。徳川家へも内又役列へと因みとす。ゆつと後徳一派がしと云ふれかル事大よ慶祝し出立ハ海う一金は貴重と思ひきう。とかくばばと青色は強たれ。一金と御恩は報じし身の何がぞやし跡は車のゆづる孝る毎といよかと一人極めてぞ難と角と脚キ跡はれと。唯今を今生の事畢えとておほの心もとひき。世間を隨處と。屬岸端は船燈と揚火と。跡乗ししきて再びゆき。手を離めぬべとぞい方既に

コトが君の命より夢よりの旅とひととも武史の道

かく一色の音頭詠じ生る。が第一。君の命より夢よりの旅とひとげうる。猪突と稱を給ふ。附後西の商人甲斐と五左改名をすとくみてとて。又吉良源郷ましかつとく。少半角の確根する。ひかるとき。○。吉良や全少と窮滅する車を破ほの金のまよもく。○。いよいよしぶと色の才ならうど。あす別れのものとぞう。

一 腸穀天日すて滅亡の時小の方よぬく。身へ自害する。よし下田原、帰らむととおまうよ。早々と。口へ。さまで一翁の辞す。

馬銜のれれうち。身を累しなぞ。想ひよ御を。御の御。斯詠。じて失せぬ。御。勝頼父子主従是格六人。のと。軍にて討元。て參。よる。勝頼三十七歳。信勝十六歳。一場の轟と。御の義なりし。草。ど。也。以日。い。る。日。を。天平年三月十日。シ。一。と。繁葉と。松。御。署の名家と。元。ト。の。人。よ。英。清。セ。甲陽の。或。四。家。一。時。す。滅。と。も。墓。な。ゆ。里。る。其。の。中。く。

一 田陽軍艦と高坂。強西家。あると。家。は。傳。ふ。車。そ。し。猪突。よ。仕。し。反。町。大。脇。武。助。の人。まで。申。列。滅。て。後。引。船。そ。り。隠。れ。か。一。が。書。う。る。ね。を。香。坂。と。記。う。姓。と。唐。う。り。傳。

事多き事へとて是軍國の事情と將軍政ある所を虚とへ疑ひて槍ほの家
うち詮へき地と古人と云へど緑色とを事實と棄へても其と考へば大不
感ひりん事必成川中鴻賀月吉の合戦の事と記せることも傳と考へば大不
信焉の敗かる事疑がれど亦別に計よりて之は御後方の勝已の則す故に之を論也
の勝こと記せり軍ハ芝岳と勝へて之を以て勝とも軍以甲陽軍過よ論へ明白
也總もハその日の城信玄芝岳と勝へらるゝと云ふては證本軍勘物^{サシモノ}と軍印
豫^{アリ}もかけう一と二万の兵と一万二千瀧信の陳西条山^{シナガタ}の合戦と敗ゆるを
數後の軍勝を負ひ良川と銀、退ひて少と旅本組ニ陳とて首尾と致^{シテ}んと謀
リ一也左きハ豫信害歟かうか又曰不殺利と謂うた御後は前近ひをハ極^{シム}る事
也是害歟のゆゑ勝てぬことを空く其地より^{シテ}べきゝ事と云ふて云
ハ信玄芝岳と勝へて之を猶と云ひて云ふて又信玄芝岳と勝へるを云
云ひ^{シテ}其精血を摩川^{モカイ}と號ひて三日止^ムとて甲斐^{カヲ}と押高^{ヒタカ}とて軍を
事無^シさうま是數後の軍芝岳と勝へて云ふ事やモニ^{シテ}萬一老人のわづ^シ云ひ

一草有信玄馬子弟信と殺さきしハ結毎の讒言ありしとソラモ實率川
中鷹弓を信玄草信將ル撃リテ信玄ハ疲弊の方へ引退く敗軍と參らむかづレ
弟信と後數日ベテノ撃ひゆつし左軍信深く恨と念りとせし事不和及て
數々争はれ至るに也信玄其傷と略車馬が一そ近方と之を生居と歸る
と云ふ事ニシテ後代より其糟豆を川を渡り後藤と定められし三百歩するを
號て見れば甲陽軍艦と其糟豆を敵乱セ一と記セると虚妄ナリ軍論と云ひ其
糟豆芝居と號す。徳信何事と恨恨して重臣二人吉梨山をも走らべまく
徳信取て甚恥其軍源之行し牛傳ド如く其名甲陽軍艦と記セ一分明く而
初の公歟手打拂て己の咎を惜しき。歎の吊りあわと仰て絶走すべキア又甲陽軍艦
は長坂鉄門役歎火吹助二人と武曲の臣として勝利龜セらモ一草次深く憤りテ
さうとは見えニ人權と之を争ひたる者無事に信玄の明る龜セらモ左軍勝利ニ
至りて終國權ありと作戻の時左軍乃烏佐近城に毛走レし。彼等龜毛と號シ
左軍甲陽軍艦十載をすと以て妙詮也又云傳レし説ト甲陽軍艦と著セ一木意

を彈てて落難り、信宗走ちて云者也。左十席ハ甲州滅て後大名保忠伊トアレ
ス行て 東西宮の御事と考加ム一書と申すと又或人の手一川中海
合戦の事ハ前取日滿ニ傳信強敵ヲ反對の人物モミハ危き事モテ信玄の
兵八千精銳ハ一万二千也倍よし大軍數多キと云ふの危若甚だるを以テ
と云ふ。伏甲陽軍邊子哉セヒ色ニ筋ハ傳信不才タノ明シと傳ゼノトシ

信玄の宮参用の沿りは陣とも、そぞろ色ハ駿河守通とさへ云ひて駿河丸子郡に通路
とつて一一番の中よ縮毛車一車以次の為ニ一御と仰るより退びて近づき車とがハ
駕者と歎く事もひ早々と至る事も、と計らんを是名信玄の車と申すと考へてし
山本勘助生本の本光が一車を以て萬てを取と切てや討死の志ゆえんを取ひとくと
ちや曉天手足にて後勘助軍隼人佐とばいのけ、云ひたハ考へ一車ハゆひて近づぐる
事一水の如一九思ひそむる事一と下愚の習ひ公旧日の文の恩然ニハ他日先と只ひ合せ
王へと車の支度そぞあてりたるがをと最後の言、と考へ却て之を後まゝ口ひあると原う傳ヒ
多書侍アリ

謙信の備主モ又多病して勝利の居所とえべ御て敗北一ノ年ハ備の國と多病不休一
車備と用ひらるる一ノ年み尼車の主として背車の傍なし車備ハ然レ覆車乗車の傍有レし
信玄の本陣前立方附ケ弟と車とがそまひてうそバ勝利と速くはねべやレシテシオニハ
耳教後陣半竹と竹を一ノ用掛なし或人の目耳教後陣半竹と竹を一ノ用掛なし或人の目
とのうのうと高梁山を多め近づひか車教が偏左と右覆車の義と左をいかとこう是と車の際
世初の活躍を失ひて廢く信玄を主と討西六路改名勝利金少ぶし何を御車の車主と云

金匱要略

改メ謙信自身の毛柄ヲ下知シ急ツシ。大槻の衝キを嘆キモテ年老キ先輩の般若心念シ
大駒と対ヘシト不羣ノ才斯カエ丈の毛ノ才ハ隆ホイシモトれてソシヘシ大將行乞無技
ニシテモシテ傳シテ唐李將軍ハ故ニシテ時々ト劍戟と撲シシテ身もして鶴と斬
る。惟、鷹控のミトニテ自ラ大駒と荷擔をとてモテ色諸卒ニ勝なくト如ヒ加ヘ或ハ
庭々或ハ退け或ハ聚め或ハ散じ或ハ射させ或ハ突て一夫としゆく。下野守伊勢守ハ
毛大兵の刃をもてて御と斬る雄劍ぢとシテ其財済く此事とさうやアセアセ
或ド評信玄云々信玄ハ繩縛束方兼備アテ急レ也し軍立テ堅志ナリテ内外の備
苦しく練。急乳實ナリテ娘ヒト失せば勝手ハ甚多と布ク如く敵軍手ハ水の流れ
シテ如し豪傑強烈ナリテ皆利と弊アリ堅きを破り鶴り歎國の君王ニ一世歎
のコウト威と被ラ。一トテ鳴宇痛イシニシテ信玄甚勇毅の私に引立く人の和と
不永ナ自ラ悲と絶ムニサ生と因ニテ信玄拒ム。一ト他。持
と求ニ至ル。一生歎の君王。校ヨリ起く而モ獨り身と屈を以テ立テテラモ子氏
康徳信及ベ信長公。又康公或モ盟誓シカレテ互ニ契約シ或ハ縁と絶シ
俱モ兵力。又未お譲モノは欲セラシトシテ信玄敢テ氣抑モ。第一。権
力。既日暮リ。暮リ毎戦を終の却て固一。純也ハ信家氏錄の四時ハ信玄ニ不取
れ。在有モ。蓋テ云々信家氏謙の四時ハ信玄ニ不取

才より傑出せり。草創の功を遂じて何ぞ自らの境より芳らるべき。按、大手
信玄を身と仰ぎと本とし不敗の地よ立チ小利とて大勝。由テ大人は徳んす
事易びて也。己の矢を人馬仰首とて勝率二回也。傷て不失。毛
利氏の軍免の如くして服威と仰せり。余の如きの也。又云、大學曰、仰身齊
家。本と治。平天下。まし孫子と云々。全已上とし破敵。次と人と皆を
本と仰ぐと要とい。宣わるまも本乱をも事ある者ハ何ぞ。と云。是を以て
考へば信玄の軍。ごちあきらとつぶしゆこと如何して。余功を冠く。年なく
一生を衢々のうえよ苦一國。のちに。信玄。身
金。己。一。文武を専門。と。正吾。とも。生。よ。非。也。是を實と情難
呪。正奇変化の利鋒。を。あく。や。是を。名聞。ハ。完。と。利路速。を。す。で
又間。故象の。ゆ。と。妙。を。強。而。備。盤。裏。の。繋。と。見。そ。を。引。と。妙。を。備。と。是。正奇
備。う。よ。非。や。若。は。奇。正。の。御。よ。う。ば。虚。實。の。繋。ゆ。し。む。者。信玄
傳。正。よ。と。偏。こと。と。對。か。故。已。が。勢。分。と。不。協。と。虚。と。ひ。く。俗。と。実。と。
す。

「あよ済す。身の。云。自。進。却。て。猶。利。所。無。あり。凡。虛。實。と。云。ハ。妙。有。行。奇。正。と。云。ハ
秋。む。れ。我。レ。復。じ。て。故。と。勤。ひ。よ。け。され。ハ。之。れ。奇。正。自。ラ。能。ある。者。非。去。ハ。故。れ。守。で
俱。み。寔。正。と。首。よ。く。付。ハ。信。玄。の。長。自。ラ。高。き。彼。奇。正。展。轉。の。御。行。る。よ。し。妙。諱。
鷹。鹿。と。之。を。實。よ。か。自。ラ。汲。漬。一。利。と。考。算。を。欲。漬。を。よ。あ。ん。で。ハ。不知。信
玄。の。長。自。ラ。奇。正。か。て。勝。利。と。偶。く。又。實。格。仰。得。ざ。よ。り。ば。氏。兼。諱。信
玄。詫。き。も。一。德。一。術。と。萬。を。俱。不。盛。と。並。づ。く。立。役。を。考。し。と。妙。が。し

「長。庵。諱。信。と。許。して。曰。凡。之。諱。信。ハ。性。張。款。よ。と。言。は。難。偏。純。類。の。徒。將。う。後。越。の
援。と。至。東。海。下。陸。と。歟。夫。ヒ。怖。き。心。か。う。一。掠。色。故。と。改。く。難。き。車
か。く。士。卒。と。使。す。四。月。の。身。と。お。ほ。か。と。く。ゆ。く。む。り。恨。む。ら。く。ハ。止。若。の。極。と
覺。す。在。伏。室。役。日。暮。と。費。し。肉。す。首。る。傷。か。と。寒。の。形。と。の。モ。似。び。非。通。の
流。と。漏。て。深。の。深。と。高。き。う。る。年。以。間。て。曰。諱。信。を。せ。よ。武。力。の。逞。き。名。有。て

少ぶ文徳ぢらゆとアシム而ヒ果敢ムテ寛度ウジビトニテ軍誠ニエリ
純強純剛ムキモ其全必スヒト云ア文兵本ト車ヨツの輪あるが如ク斤トウモト行方
セク車一車モテ御作モテル臂モテ信玄氏廉等の勢得モテルムノ附レモ不
折歟又は威名モレル高き車何の和焉モテカクの如クルモ 著シル人備の
細ミテ五年の邊ニ建レ者キモ聖質の敵と百無ニ無きモル如モ仁義礼智
信一ツヒ能保者是シ龍人の意ニト云ア然モハ謙信天生豪傑の志身ニ具リテ己
とモトニ士卒不無ノ過モ虚り是モヒテ士卒若ニ心と不思僕弱と守ツテ
早文ヒ有モ忠と改モルト勵シ故モ一軍の兵氣一ムニテ大ちニ堅固
ナモ故ニ愚々ムロアバト見テ是謙信將下ニ弱無ナキヒを知ルベシ是モ
謙信の強罰ニ常況モア ブル強罰モニテ過急ナム一然ヒ威ヤツ軍家ニ止
歎モの奇跡モキモナリテ自歎モ人ニ制モリムト色モ不謂モ仁情モ
缺なく茲時モ強陳仰ヒと謙信忠信義勇の行ウツテ東やの諸將心モ
色モトツアサケレ

一 謂北条氏廉、ル、氏廉モ温良ニテ素ト懐ケ篤實モニテ治道ニ樹行リ軍立
徐モニテ勝車代及モアビ彼我の勢ヒト核ク寧役ニシムト常モビ帶ニ固ムト
天子の到ルト得テ致モ勝車事ナビト得る心の地度し氏廉モ智詫トキ
ツキシ間ア氏廉温良篤實モト將の德ありヒトシテ御クト何ラかモ人モ慮ヒ
及仰ガシジムヨウ威名不震ヒト妻歟の為モ因ム車代モア、蓋モニ軍事の要
急モ權ヒ名ナト内モゼんモヒテ先兼謙讓ヒ首ヒテ勢イ緊節ウジビ
名ヒト害の車ヒ厭い和ヒ物ヒ他ヒ力ヒ備ヒ當モ敵ヒ拉ゲンタヒトモシテ御モ信
玄謙信の強就ムキモ五、ベヒ威威聊ラ後モクテ呼フるモシ國威後モトシ
又問フ御モハ草創モ守文の傳ヒ勝モル、氏廉又信玄御作モ者モア
答モシル、アビ大、古の質君モ守文、草創ニツカヒお能ヒだヒトモ事ナシ
某の創の難モ車守文の不貿易車多シモシテ御モ車ハ草
云齡の二人の臣下モニテ此兩事モ問詰ムヨ魏徵追シテ守文の難モ車ハ草

創三十倍以上を庶民房玄龄のやく草創の難を率ニミ安文と云ふとやく
至附太宗宣ひゆる玄齡ハ壯士也朕は從つて妙この軍は卒若してちや
の難を率ニミ安文と云ふと魏徵を左軍の時ニ仕つて又守文易めぐるりと妙なされ
たと艶創の難を率ニミ安文と云ふと又守文の易めぐるりと付て左軍と
ことせんとも云ひゆる守文草創ニツカシム能ヤシんと俱ニ監將玉堂にりて
元康信玄謙信の三みりづきと一徳一術のミ一と偶一とくし一之びを圖アシナリ一
を否ばれと一徳ニ保フセヒと一徳。ね年角ぢるべし。又或人云々信玄謙信氏康智富
あり一徳ニ保フセヒと一徳。其威と三多才と東北よきとお幸い一人をもすと功と天りと竜ノ
率ニねば信長後よめて物なく草創の功仰ると思へ偶々ハ是モ少くと
いづも是時をあのの、一運による。信玄謙信氏康天章の福、アレバ一人比
中伏敵を手も跡の跡と見る。信長ゆし不幸す。がくゆ生きて
一人善將の名を得べり。信玄謙信氏康二層の是處を端ざる事ハ信長の

是非ハ運ナリトア運ハ是非ナヨルトと自ら言ヒニ非の外ニ運ナシ運の外ニ
是非ナシ心氣理ニ向テ御くニテ之を知ベし休ムガヘニ一ニトハ運
の種運ナリトア運ナリトア

間セ故也乎或至ニ至ガ事一万多子杯半時將曰此見三千七百兵之多方たれ
色る事か云々數多く不仕う是とひく思ふ大工の格言とも人數を
さのみ多からまよし大名五人の人數とおもんすを將の多得不似子い底の
御とゆき事と云々業云不思不云よやり業云アキの事と軍ニ
到全。此の假生肉は我送れあきな色深は我將を食され歎と不忘とあや
を方を手を拂列する眼よ。ト宣す事感じ入る内を多也恐人をもハをも
切者ごととお色たる邊へる林と嘲びよ切者と信しげひする内に言語は
述難を後人よく啼ひあがへし。至一言よか。胸中と聲と爲めよね云事なり
としさき巴を阿心の如く十六軍の力付親父の大勢とひそ攻みる故体とぞ

タガキの根をて攻めたり
タガキの大根とかひふ

うぢるを知りて攻めふを候大内は衆軍を遣ふかくは江ノ古今
す色すの大内とあひふ
去ら下君の不遜りとおーミ諒高を擱け一且義継ましくらへも大將
若くよ一ツあきや少考ひきよ居くちと見えつゝがぞ。重文一巻と五上
君とひともよを残りてんよ今かづく詮なしと自害とえよう
案云兵糧は無津浦の至るくと争し彼多は稀ぢるが明君のあまく、忠誠、威
と争ひする臣の元とくとハ忠しむべき事ぢるよと君の忠ひとおーミ重氏と
情むかす死と假りて假りて死たるを憲姫し御玉之先の先のんと妙りて假りて
死くと傳ひて死たるを傳ふしこれを君卿あまくて重氏と若くめ経て自ラ是と
死んで偽人也づんとほそと恐りて重氏とあうとくべき事も先き世とそんと至
るを自己の難と道さんうみかくと而と賢臣の志財ハ敬謹と易くし君と
計んは力と身をし財に減じと意くはゆるをし是も多き近習す所くわく

善て曰居ト一と居て諱多有法。有時武士死とうろしむるよ時有べしを諒云林。一旦よして死ふるをも憲經く思士よきあ可云はれまつだの諒こそ強とねう。雖色ども大惡の若ひる故うや一旦無道と効ニ度惡形と毋、平生病の不遂人。ナリとあらひ我死と傳の至極とはくらんなんぞ智育て傳とすし思育て好。義志あるもへる君の傳とあらむ。程成臣下の主対と効くする事もあらず。とど七君の傳せと直日を無日とす。成因を充質退き後者進く少忠長亡き。半有矣じふ。先往死とほさん事とぞひ又君の忠仰。不正にて敵の為亡さ。きんより不可を。又愚ぬくとちた賢長の傳事と云ふと自害もくらんと。か一才だと三年のめん組合恵生ぢう財子と方段の経がた君の暗事。とおーと自害。一才とハ西兵。窮き世間の炎会レキテ云。和儀りうと不悔。然、義不可有。可と云はる後悔極とハ為はす。賢臣と情を深くせり。もと忠臣。二才君暗事が如く勢の意使と云が妄。又賢臣と情を深くせり。もと忠臣の徳不可とまして教し。あ財を重の滅亡可レル。さきハ君の責をもと死とあり。

一、しもと經義と不可云程この説を不聞。ときハ死と伝て傳多年。臣の實と云ふ。し君又全死と隠き事と改め。ひて賢者もくみ思入退。し古語もと已正則不ね至已不正則解折トス未ラトアリ。

一、志將兩夜の間を幽移。優^{ヨシ}ト像^{トモ}十二三罪叶^ハの附小姓テウ^ハ。附の子を志^シ。もと山の化物ありと云ふ。可^ハ。又山賊^ハ。と云ふ。ゆくびきうと作セラ。也しそ一人生を云化^ハ。大方流程の仕業^ス。とぞあきらめの事。奇有^ハ。亦可^ハ。一人の云化^ハ。いはばの不思^ハ。首を力^ハ。變^ハ。うけんと。監城^ハ。千人。萬人。百人。十人。云。云甲斐^ハ。を付^ハ。モーしきものとと云^ハ。ト。大府毛^ハ。アリ。のと。御中^ハ。武道^ハ。寄^ハ。鑿金^ハ。浦削^ハ。を在る。や加^ハ。の者。モ^ハ。之のビ^ハ。と。上門^ハ。是^ハ。史案^ハ。云。將^ハ。と。云。甲斐^ハ。を付^ハ。モーしきものとと云^ハ。ト。也。よ^ハ。きく深く懲^ハ。ミ^ハ。又^ハ。遠盛^ハ。ちる。ゆゑ^ハ。そと。大打童^ハ。と。ア^ハ。つけ。え。まづ^ハ。を心^ハ。重^ハ。とは。云^ハ。ば。都^ハ。の。や^ハ。と。うし。後^ハ。と。も。云^ハ。ば。きく。と。云^ハ。

ウエラ本風のへき事は非然も上主君の意欲温処を冒角のとよお背きはと限を下り
ぬる事ニシテ多き少身の者と大方ヨリ出づる事よりし秋や智謀事の功と號
大身ヨリ出づる者と少く多き事にて死めば子孫の傳承とも云々し若又何の功
と云ふ事と云ふ事と云ふ事にて死めば子孫の傳承とも云々し若又何の功
つけ者と引ひげ活まつて車と取して不忠よりてヘミ車四つを古今の書籍と
考へ三教の理と云々し又死して生ニ至るに於いては、アハシ財四つとツツの理也と云
車ニツコハは漸より莫ニビテ唯一心より日ひ深き幽闇と云々もうと死セハ一天
世界の中は我親能恩の深き者をちうてするがいとテ、秋貌の者を追放
やくさやヒト世間のなるみのゆきにいとテ、車にアハリ、ゆうて庶子のうちを
ことくく死すばざるやハツコを忠の道すらあらずする事、又母のミツブとし
一を仁に送りて車七つを殺の道すらあらずする事、又父とゆさんる事、
生多の死あるハ却て死くよめ車八つを残一心追放す事し以佛と西く
一を此跡の主多事忠義と云ふと思ひ、母の明よりくるべき車ぢふる

よ哉と益往き車を死ると云ひながら、人づりあひげナリ、一命と殺んき我等と人の物
ある意うち車か、すき益往き車を死と世継の主君と仕へて歎惜も死を
さきハ不忠までは車せずを體^{ヨキ}、一命と捨ると云志^{ヨシ}、とて益往き車ニ車の命よがて
世継の居^{ヨリ}仕へて云の忠義立へき事十、よも思うる人へ追腹のある間ハ主君の外や
軍事^{ヨリ}思ふべ^{ヨリ}色ども矧^{ヨリ}人の眼^{ヨリ}見とすを死ぬ者無^{ヨリ}、相^{ヨリ}主^{ヨリ}企^{ヨリ}と^{ヨリ}る
仕道^{ヨリ}志^{ヨリ}あれ^{ヨリ}死^{ヨリ}時^{ヨリ}名^{ヨリ}ハモリ者多^{ヨリ}、死ぬ者無^{ヨリ}、相^{ヨリ}主^{ヨリ}企^{ヨリ}と^{ヨリ}る
と云ふ者蹤^{ヨリ}五人^{ヨリ}、人^{ヨリ}ハモリ者多^{ヨリ}、死ぬ者無^{ヨリ}、相^{ヨリ}主^{ヨリ}企^{ヨリ}と^{ヨリ}る
却^{ヨリ}死^{ヨリ}時^{ヨリ}名^{ヨリ}ハモリ者多^{ヨリ}、死ぬ者無^{ヨリ}、相^{ヨリ}主^{ヨリ}企^{ヨリ}と^{ヨリ}る
とのゆみかくや強^{ヨリ}むしに人^{ヨリ}と争^{ヨリ}のつゆと書^{ヨリ}行^{ヨリ}る

俗説辨

一老人語^{ヨリ}三畳^{ヨリ}多^{ヨリ}信^{ヨリ}事^{ヨリ}を^{ヨリ}何^{ヨリ}六^{ヨリ}鞆^{ヨリ}又^{ヨリ}周^{ヨリ}呂^{ヨリ}望^{ヨリ}の様^{ヨリ}不^{ヨリ}する事文
類^{ヨリ}裏^{ヨリ}集^{ヨリ}多^{ヨリ}李清^{ヨリ}全^{ヨリ}書^{ヨリ}生^{ヨリ}古人^{ヨリ}深^{ヨリ}出^{ヨリ}事^{ヨリ}と^{ヨリ}言^{ヨリ}伏^{ヨリ}且^{ヨリ}家^{ヨリ}之^{ヨリ}元^{ヨリ}豈^{ヨリ}

十六韜源^{ヨリ}子^{ヨリ}馬法^{ヨリ}黃石^{ヨリ}公^{ヨリ}略^{ヨリ}尉^{ヨリ}僚^{ヨリ}子^{ヨリ}李衛^{ヨリ}公^{ヨリ}同對^{ヨリ}と^{ヨリ}武^{ヨリ}学^{ヨリ}

領ひ是どるゝの七篇とちやしよりちや天下の世人皆と傳誦しを蘊奥
子熟せんると欲を以て天下古今の事と集うて此名の全紀とぞう且意
味深く理平キ書と撰んと七書と號ひてんと容易の事すりんと御るト
古無の儒学者等已こが業とするに書六經の大意といふべからんと
經の類ハ七書の名目と之を差へる計りよしとは葉の草ば滿ども六箱ハ
太公望の書と是れに後人の作と三略を黃石老人の作とつる事いふが
黃石公の著とは出不取やへ經をば一面用ひてよし林とほよ便をそ
さへづりゆるは毎の士とすーと是が力ある人の詞をば程派の勘弁とな
是とま實と呼ゆをを書と字せざるのよ取ば且已が職業ようとく
一生とかかうの費わうらう書ハ無信あらずと用捨の例とむす仍ルベシ
六輪三畳の作者を明るゝ者と古く往き傷あり歴世の人を糟カスとらえ
て全人の計とすくと是れ予竟を益の假とひつげしことを作者ハ誰ニ
とせよを考るのひも和あくらんばを理身のへうだ経晨日馬の書と
熱観まべし

後編うち作若不仁不孝の人と云ふを仰よはるを接んで聖人の悔を済
脈の序と感じせまの故に席トクとおげとつるを弟子に示し乍ら實
不育を教戒ともなし豈作者の方法と褐トクとを萬と自信すべきと自信
乎。と云ふは不正もあり三畳六輪を爲め國家と治め勝利と刻あるの権要
儒者の四書六經と傳説あるが如きべ一と意味の深長ぢる事々くと
熱観まべし

稿本しのく、卷之四終。



